
勇者喜譚

伊達倭

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者喜譚

【Nコード】

N1955K

【作者名】

伊達倭

【あらすじ】

異世界から召喚された勇者の大冒険……のはずが、どうしてこうなった。

壮大なスペクトルも、劇的な運命も、めくるめくロマンスも介在しない世界で、チート技術の無い主人公が適当に頑張る話。

第一話：召喚

別に世の中に嫌気がさしたわけじゃない。

勉強は好きじゃないが、高校はそれなりに楽しい。気の合う友達もいる。

家庭環境になると、アル中の親父が放蕩しているが、幸い、母は女傑と名高いキャリアウーマンで、親父の失踪に「しゃーないわね」と一言呟いて、親父の数倍の年収を叩き出す猛者である。

父親の愛情を知らずに育ったと言えば悲壮感も漂うが、十七歳にもなれば父親の愛情よりも、むしろクラスのかわいい女の子の愛情を求めてしまうわけで。小学生のときは「お父さんに会いたい」と泣いてしまう紅顔の美少年だった俺も、今では「彼女欲しいなあ」と呟く健全な若者男子である。

悩みがないわけではないが、多分、誰だって抱えている程度の、ありふれたものばかりだろう。昨年の夏に一世一代の告白を力マして、見事撃沈して以来、少々恋愛に臆病になっているのが目下最大の問題と自覚できるのだから、むしろ人より幸せな人生なのかもしれない。

だから、どう考えても俺は自分の殻に引き籠もるような類の人間ではないし、若者男子として相応の妄想をすることはあっても、白昼夢や幻覚など見たこともないはずだった。

「そういうワケなんで、できれば帰りたいんすけど」

無駄だと思いつつも、俺は目の前に佇む女性——耳が長くとんがった、外国人風のお姉さんにそう呟いた。

最初は夢かな、と思った。

下校の最中に黄色いマリモに触れたら異世界に飛ばされました、

というのならばともかく、ごくごく普通に眠りについて、気付いたら森の中にいたのだから、まずは夢だろうと疑うのが当然だ。

木漏れ日が心地よい、静かな森だった。立派な樹木が生い茂ってはいるが、仄暗いおどろおどろしさは無い。木々のざわめきは恐怖を掻き立てるわけではなく、癒し系BGMのようですらある。小鳥はピチピチとさえずり、ともすれば森の動物たちが踊りながら歓迎してくれそうなムードであった。

なかなかメルヘンな夢だなと思ったのもつかの間、背後の人の気配を感じて振り返る。そこで、俺はようやく驚いた。

何より先に俺の目を奪ったのは、その美しさだった。

透き通るような白い肌。^{エメラルド}翠玉のような瞳。そして、腰まで伸びた銀色の髪。

硝子細工のような華奢な身体のラインは、それでも女性らしい柔らかな曲線を描いている。

純白の――おそらくは絹で織られた衣はワンピースに近いが、肩から先が露出しており、それでいてゆったりと作られている。腰には動きやすいように革のベルトが巻かれている。

やや直接的な表現をするならば、神秘的だった。特に、妙にとんがった耳などは、この世のものとは思えない。

「いや、明らかにこの世のものじゃねえ！」

「ひあっ!？」

思わずツツコンでしまっていた。クラスではひょうきんなツツコミ役としてのポジションを形成していた俺である。つい、休み時間のノリで軽く裏拳を虚空に叩きつけた、見事なツツコミであった。

お姉さんは不意打ちのツツコミにぴよこんと耳を押っ立てて、大きく一歩後ずさる。ウサギみたいな反応だった。

夢にしては現実的だなと思いながらも、折角の夢である。目の前に美人のお姉さんがいるならば、要するに「アハハ」「ウフフ」な展開か、もしくは「お姉さんが教えてア・ゲ・ル」な展開が用意されているに違いない。どちらかと言えば後者に興味があつたので、

俺はそのまま「わーい」と声を上げて、お姉さんを押し倒した。

「き、きゃあああッ!？」

「大丈夫、大丈夫。優しくするから」

「いやあああああッ!！」

絶叫してはたたと暴れるお姉さんに、俺はやや困惑した。

無理矢理という鬼畜な所業は望むところではなく、できれば「せかつちさんね」と笑う余裕をお姉さんに持って欲しい。夢だから思い通りになるとは限らないが、折角の夢なのだから、多少の融通はきいてくれてもいいだろうに。

「うーん、どうすればいいんだ？」

「ど、ど、どいてくださいイー!！」

とても大きくて柔らかそうなお姉さんの胸を間近にして身を引くなど、ちよつとした拷問である。しかし、完璧に動転しているのかお姉さんの声は途中で裏返り、ほとんど金切り声である。もしかすると、お姉さんにとってはマジモンの拷問になっているのかもしれない。

仕方なくお姉さんを解放して、ついでに上半身を起こしてやる。

既に半泣きで、目にいっぱい涙をためていた。

「あー、その……大丈夫？」

どうやら、お色気ムンムンの夢では無かったようだ。ここからどう軌道修正をすれば「アハハ」「ウフフ」と微笑みあえるのだろうかと考えながら、お姉さんが落ち着くのを待つ。

「ふう……ふう……」

お姉さんは胸に手を当てて、こちらを警戒しながらも息を整える。俺はとりあえず襲いかからないことをアピールするために、両手を後ろに回して、自分から距離を少し取った。

根が単純なのか、お姉さんは安堵したらしい。最後に大きく深呼吸をして、俺の顔を真っ直ぐと見ると、桜色の唇の両端をゆつくりと上げて、こう呟いた。

「ようこそ、勇者様——」

お姉さん——アイナリンド・ケレブレス——は自分はエルフで、俺を夢見の儀式で召喚したのだと説明してくれた。

「今、世界はまさに滅亡の危機に瀕しているのです。魔王の軍勢が押し寄せ、多くの同胞が殺されました。ドワーフは地に籠もり、人間は皆に逃げ込み、我々は森から出ることもできず……」

アイナリンドは涙ながらに窮状を訴えた。

どうやら魔王というのは、悪魔の王様らしい。数年前に北方にある不毛の大地に突然現れて、魔物の大群を率いて、世界征服を企んでいるという。漆黒の髪に、鋭い目。身体は鉄のように硬く、神出鬼没。一声叫べば嵐を呼ぶわ、雷を放つわ、火柱を起こすわ。しかも狡猾ずるがしこく、英雄と名高い男が魔王討伐に名乗りを上げると、甘言を用いて籠絡し、魔王軍の將軍に据えてしまう。挙げ句、好色家で美女ばかりを攫つては、囲っているとか。

「うう……妹も、私の目の前で攫われました……」

アイナリンドはまなじりから涙を零し、俯いてしまった。

よほど恐ろしかったのだろう。思い返すだけで身体は震え、何も出来なかった自分への怒りに拳を握っている。それでも、すぐに首を振り、キツと俺を見据える。それは一つの決意を胸に抱く、儚くも強い女性の眼差しであった。

「勇者様、どうかこの世界をお救いくだ」

「無理っス」

最後まで言い切らない内に否定されて、アイナリンドは「へ？」と口を開けた。

いや、俺だって人の子だ。可哀想だとは思うし、自分に出来ることがあれば手伝いたいと思う。だが、その魔王様とやらはどう考えても反則である。何の特殊技能も持たない高校生に頼むようなことではない。

「いや、夢の中だから、何かできるかもしれないな」

エルフがいるのだから、魔法ぐらい使えるかもしれない。

むん、と気合いを入れてみる。こう、不可視の力的なものが湧き上がり、魔王すらサクリ殺しかねない強大な魔法が使えれば、俺でも世界を救うぐらいはできるだろう。

「エターナルフォースブリザード！」

裂帛の気合いをもって、近くに落ちていた木の枝に向かって呪文を唱えてみる。

しかし何も起きなかった。精々、突然奇怪な叫び声を上げた俺に、アイナリンドが耳をぴよこんと跳ねさせたぐらいである。

「ど、どうしたんですか？」

「……帰る」

自分の夢の中で、しかもエルフが出てくるようなファンタジーワールドだというのに、魔法の一つも使えないなんて、なんて不親切な設計なのだろうか。夢の中でも自分を凡庸なる高校生と位置づける自分が小憎い。

アイナリンドは慌てて俺の服——なんと、寝るときに着ていたパジャマだった——を掴み、いやいやと首を振る。折角呼んだ勇者様に押し倒されて、しかも頼み事を無碍に断られ、おまけとばかりに奇声をあげてから「帰る」の一言だ。自分の無意識下で作り上げた世界とは言え、ここまで可哀想なポジションにしてやらなくてもいいだろうに。

思わず、アイナリンドの頭をよしよしと撫でてやる。しかし魔法も使えない、「アハハ」「ウフフ」も「教えてア・ゲル」も存在しない夢の世界に興味は無い。さっさと目を醒まして別の夢を見ようと、思い切り自分の頬をつねった。さらさらとしたアイナリンドの髪感触がわかるのだから、痛みも知覚できるだろう。これで起きられるはずだ。

「痛え」

案の定、つねった頬は痛かった。しかし、特に世界が崩壊したりホワイトアウトしたり、夢の世界から抜け出る前兆のものは見当た

らない。ただ、アイナリンドが不思議そうに小首を傾げるだけだ。

「……なあ、どうすりゃ夢から醒めるんだ？」

「え、いえ……これは、夢ではなく……」

アイナリンドはオロオロと俺の顔を見て、それから、ふうと溜息をついてから、にこりと頷いた。

「夢見の儀式について、説明しますね」

夢見の儀式とは、エルフの中でもケレブレス家にのみ伝わる、秘術中の秘術だそうだ。

深い眠りの中で、時と次元の精霊と交信して異世界への扉を開き、眠りを通じて他者に干渉。目覚めと同時に、他者を自分の世界に引っ張り込むらしい。

勿論、その他者とは俺のことで、偶然、俺の夢に入ってきて、そのまま異世界に連れ帰ったとのこと。

「他者と言っても、誰でも良いわけではありません。夢と夢を繋ぐわけですから、私と同調できなければそもそも、夢に入ることすら叶いません。その上で、願いを聞き届けてくださって初めて、儀式は成功です」

俺はちつとも願いを聞き届けた記憶はないのだが、夢の中で実に気軽な調子で「良いよ」と答えたらしい。そうでなくては連れてこれないとアイナリンドが言うので、そうなのだろう。きっと俺のことで、アイナリンドが美人だから簡単に良しと言ってしまったに違いない。

夢見の儀式は、単に連れてくるだけのもので、特に肉体を強化したり特別な力が使えるようになるとか、そういうこともないらしい。つまり、運動神経も成績も顔も普遍的と自負する俺のままである。

そんな俺が嵐や雷や火柱を放ってくる魔王に挑むなど、単なる自殺だ。

「そついうわけで、できれば帰りたいんすけど」

なんとなく、無駄だと思いがちながらも、アイナリンドにお願いして

みる。

しかしというか、やっぱりというか。アイナリンドはにっこりと笑い、首を横に振った。

「夢見の儀式は、契約が終了すれば自動的に元の世界に送り届けてくれます。逆を言えば——魔王を倒さない限り、勇者様は帰れません」

ああ、やっぱりそんなオチですか。

いくらアイナリンドが美人でも、魔王を倒せと言われて、しかも倒せなければ帰れないという状況で頷くとは思えない。倒さなければ帰れないという部分を誤魔化して連れてきやがったに相違ない。

「くそ、こんな悪徳商法に引っ掛かるなんて……」

「全然あくどくないですよ。契約内容だって、ちゃんと伝えました。覚えてないだけです」

「けど、どう考えたっておかしいぞ。何で見ず知らずの世界のために無償で命を賭けにやなんのだ」

夢うつつだったとしても、俺だって単なるお人好しではないのだから見返りも無しに自殺行為に「良いよ」と言うはずがない。

いや、待て。逆に考えると俺が頷くからには、相応の見返りがあったということじゃないのだろうか。俺のことだから、夢だから何でもアリだろうと豪快なお願いをしたに違いない。

「……そうだな。俺のことだから……アイナリンドを好きにさせろと言っただんじゃないのか。それも条件だろ？」

半分は冗談のつもりだった。いくら夢の中の俺でも、相手の身体を求めるなんて下心満開の要求を突きつけるなんて、鬼畜にもほどがある。精々、胸にタッチさせるとかいう中途半端な願いに違いない。

しかし、アイナリンドの反応は如実だった。耳をピンと立てて「あわわ」と口籠もり、挙げ句の果てに「覚えてないハズなのにつ！？」とまで叫んだ。

どうやら潜在的な俺のエロスは相当なものだったようだ。自分を

内心で尊敬しながらも、問題は目の前のエルフ娘である。

秘術中の秘術のくせに、大事な契約内容を相手が忘れたのをいいことに、無かったことにしてしまう腹づもりだったらしい。

「いかなあ。契約だ契約だと言いながら、自分で契約を破るなんて」

「ひいっ！」

ちよつと脅かしてやろうと、オヤジ臭いセリフを口にしてみると、アイナリンドはこれでもかというほど飛び上がり、腰が抜けたのか、這って逃げようとする。そこまで恐れられるなんて、こちらとしても甚だ心外である。俺は正当な報酬を頂戴する立場であるはずなのに、まるで強姦魔扱いだ。

「……あーもう。めんどくせえなあ。わかったよ。とりあえず、今すぐどうこうしないから怯えるな」

そもそも、無理矢理するというのは俺の流儀に反する。こちらら「アハハ」「ウフフ」を夢見る健全な若者男子であって、どこぞの鬼畜戦士とはわけが違うのである。せめて童貞脱出ぐらいは和姦で済ませておきたい。

「……虐めません？」

「虐めるつもりなんかないって。ちよつとからかったただけだ。な？」
猫なで声で宥め^{すか}めし、アイナリンドを落ち着かせる。アイナリンドはなお俺を警戒して一定の距離を取っているが、こちらら色気で釣られた勇者様であり、彼女はその色ボケ勇者をペテンにかけた張本人である。迂闊に気を許したらいつの間にかエロエロな約束まで無かったことにされかねない。

「でも、契約だから後でちゃんとするからな。怯えないぐらいに慣れたらするからな。嫌だつて言わなくなったらするからな」

大事なことなのでちゃんと三回言つてやる。現代日本人のユーモラスな表現がウケたのか、アイナリンドはようやくほっと息を吐き、警戒態勢を解いた。

アイナリンドの住居とやらは、樹齡千年を超える巨木のウロだった。根本にばかり穴が空いているので、削ったのかと思っていたのだが、天然物らしい。アイナリンド曰く、木を大切にしないエルフはいないとのことだ。

粗茶ですが、という前置きと共に出された緑茶を木製のティーカップで頂戴しながら、俺はとりあえず色々と状況を整理することから始めた。

まず、何故このファンタジーな世界に緑茶があるのか。

「ソコからですか」

「ごめん、冗談」

まず、最大の問題は俺が魔王を倒さねば帰れないということにある。

突風やら電撃やら光線やらを放つ魔王様を相手に、単なる高校生で、しかも装備品がパジャマだけという俺が挑むのだ。国民的RPGでも、ヒノキの棒くらいは支給してくれる。初期作なら銅の剣に革の鎧だっについてきたのだ。

「まず、装備品だな」

「じゃあ、これなんてどうですか？」

都合の良い展開である。流石はファンタジーだ。言えばそれっぽいものが出てくるらしい。

俺の期待を背中に受けながら、アイナリンドが部屋のタンスから取り出したのは、女物の木綿シャツだった。

忘れていた。このエルフ娘は天然さんだった。

「……着ると？」

「パジャマよりマシですよ？」

「……ごめん、女装趣味はないんだ」

せめて親父さんの服を貸してくれと頼んだが、既に親父さんは他界しているらしい。そもそもエルフの寿命は天井知らずということで、アイナリンドも俺より百歳ほど年上なのだそうだ。父親は七十年前に他界しているらしく、享年四百六十七歳。割と短命だったら

しい。

「人間だと、私は十七歳くらいですね」

「じゃあ同じ歳だな」

俺が笑うと、アイナリンドは少し不服そうに頬を膨らませた。百も年が違うのに、同じ年と言われたのが少し嫌だったのだろう。

「婆さん、そんなに怒ると皺が増えるぞ」

「…… 同い年ですよね」

一瞬で機嫌を戻すアイナリンドは、やはり天然ながら少々黒い。ダークエルフかもしれない。

「失礼ですね。私はれっきとしたケレブレス家の長女、アイナリンド・ケレブレスです」

「いや、そんなのさっきこの世界に来た俺に自慢されても、さっぱり意味がわからないからな」

ケレブレス家が由緒正しいエルフの家系であることは聞いているが、だから偉いわけではないし、仮に偉かったとしても俺がわかるはずがない。この世界の事なんて何も知らないのだから、言っしまえば俺は赤ん坊並の無知なのである。

当然ながら、未だにこれが夢なのか現実なのかわからないのだが、妙にリアリティがあるところを見ると、どうやら夢ではないような気がする。

「それでだが…… まず、どうすりゃいいんだろうな」

現状、俺はパジャマを着た一高校生に過ぎない。魔法的な存在が使えないとすると、身体能力が上がっているのではと淡い期待を寄せてみたモノの、試しにジャンプしてみても、普段と同じ程度しか飛び上がることができなかった。

ここは呼び出した張本人に今後の指標なりを教えて貰う場面だろう。いきなり他人様を呼び出したからには、何をするべきかわかっているはずである。

しかし、アイナリンドは俺の問いかけに首を捻るだけだった。

「…… え、何。もしかしてヒントとか無し。アイテムも無しで冒険

開始？」

「え、えーと……そうなります」

本気で押し倒してやろうかと思った瞬間だった。

第一話：召喚（後書き）

はじめましての人ははじめまして。 お久しぶりな人はお久しぶりで
す。

黒衣のサムライ以上にお気楽ファンタジーになるかと思いますので、
太平洋より広い心と、世界樹よりものんびりとした気持ちで読んで
いただければ幸いです。

第二話：迷走

呼び出された理由が「魔王を倒すため」である以上、俺は勇者となるのだろうか。

古来より魔王を倒すのは勇者の仕事であり、ともすれば勇者とはつまり、魔王を倒してこそ名乗ることのできる名前なのかもしれない。

だとすれば、俺は勇者見習いとか、勇者志望とかそれぐらいの肩書きなのだろう。

どっちにしても、重い肩書きには違いがないのだが。

「そういえば、御名前を聞いていませんでした」

アイナリンドは手をぼんと合わせて微笑んだ。

契約とやらを夢の中で交わしたはずだが、こっちの世界では契約に名前は必要ないのかもしれない。なんともいい加減な世界である。

「ユウシ タミフルユウシ
勇士だ。 民古勇士」

「タミフルさん？」

「ユウシで頼む」

女の子に名前でももらいたいという下心ではなく、響きの問題である。もしもうつかり俺が魔王を倒してしまい「勇者タミフル」の名が広まってしまい、何かの間違いでそれが元の世界にも広まってみる。俺は間違いなく奇行に走ったようにしか思われない。

それならば少々語呂は悪くとも「勇者ユウシ」のほうがマシというものである。

「ユウシさんですね。なんだか勇者っぽいです」

「そりゃまあ『や』をつければユウシヤだからな」

俺の幼少の頃からの渾名遍歴の中にしっかりと「勇者」というものも含まれている。まあ、それも小学生くらいまでのもので、最近

ではもっぱら「タミフル」というカタカナ表記での名字がそのまま渾名という塩梅ではあるが。

「まあ、自己紹介も済んだところで……問題はこれからだな」

コホンと咳払いをして、アイナリンドの目を見る。

アイナリンドは不思議そうに小首を傾げている。彼女にしてみれば魔王を倒す勇者様を召還したので、もうこれで安心だと思っているのかもしれないが、その勇者様たる俺はレベル1で装備もパジャマだけ。しかも魔法も特技もゼロという、一体何をしにこの世界にやってきたのかという状態である。

「まず、最初に言っておくが……俺には魔王様なんぞ倒せないからな」

「へ？」

「いや、とりあえず今までの流れでわかるだろ。俺は普通の高校生だし」

高校生の意味がわからなかったのか、アイナリンドはさらに首を傾げる。

仕方ないので、何をどうするかという相談よりも先に、このエルフのお姉さんに色々と教えるのが先決のようだ。

「いいか、そもそも俺のいた世界ってのは――」

さほど口が達者でも説明上手でもない俺なので、アイナリンドにとっては未知の世界であろう現代日本。ひいては地球という存在を正しく認識させるのには手間取った。

まず、エルフなんて存在はおとぎ話の中くらいのものであり、魔王様も勇者も、俺の世界には存在しないこと。

「も、もしかして魔物もいないんですかっ!？」

「いないな」

「ど、ドワーフやフェルプールは……?」

「いるはずもない」

「そ、そんな世界があるなんて……」

エルフやドワーフやフェルプル。終いには魔物や魔王様が在籍しているこの世界の方がおかしい気もするのだが、とりあえずアイナリンドはカルチャーショックならぬワールドショックを受けて絶句していた。

さらに、どうやらこの世界では未発達というか、数世紀単位で遅れているらしい科学の発達やら、現代兵器。さらに俺の平々凡々で平和な生活も教えた。

つまり、特に勇者としての素養も、それらしい鍛錬も積んでいない、むしろ発達した科学によって便利な世の中を教授している身であり、きっとこの世界では役立たずもいいところの人間であること。お終いには、学生という自立していない立場であることまで説明すると、アイナリンドはがっくりと肩を落としてめそめそと泣き出した。

「うう……まさか、こんなに酷いなんて」

「や、期待通りの人間じゃなくて凹むのはわかるが、俺は元の世界じゃさほど落ち零れてもいなかったし、酷いと言われる筋合いはねえよ」

アイナリンド曰く、気軽に魔王を倒すことを了承してくれたので、見かけによらない優れた戦士が何かだと思っただけ。

「……つまり、本気で役立たずなんですネ」

「そっちは役立たずを呼んだだけで済んだが、俺にしたら人生最大の危機なんだがな」

今はまだ実感が湧かないというか、まだ夢かもしれないという期待もあつてのことだが、冷静に考えると魔王様を倒さない限り俺は帰ることができず、魔王様を倒すことが不可能である以上、帰ることができないのである。

「……仕方ないな。こうなりゃ、手は一つしかない」

「な、何かあるんですかっ!？」

「子供は三人ぐらいかな。エルフと人間って、子供つくれるのか？」

割と真面目に考えた結果、目の前のエルフを将来の嫁と見据えて
幸せな家庭を築くのが妥当な線だという答えに行き着いた。

少々腹黒いが、逆を言えば強かであるし、何よりも美人だし、契
約上ながら好きにして良い存在である。

魔王様に殺されて短い童貞人生に終止符を打つよりも、このアイ
ナリンドと家庭を持って細々と幸せを噛みしめるほうが有意義とい
うモノだろう。

「……いやです」

「まあ、最後の手段に残しておくか」

「最後までいーやーですー」

そんなにきっぱり拒絶しなくてもいいだろうに、とは思うものの、
確かにいきなり人生プランを決めてしまうのも面白くはない。

とりあえず、何かしら行動しなければならぬ。別に帰る方法を見
つけるとか、もう少しおしとやかで従順な女の子にするとか。

「……まずは、服装だな」

何はともあれ、パジャマで異世界を歩くのは元の世界の恥である
う。

何とか男物の服が欲しいとアイナリンドに告げると「わかりまし
た」と言って、部屋の隅にあった本棚から一冊の本を取り出した。

分厚いハードカバーだが、手書きらしく、どうやら紙ではなく羊
皮紙か布のようなものにインクで書かれている。

「ケイプレス家は召還魔法の家系ですから。ユウシさんの服を召還
してみましよう」

「そんなこともできるのか」

「本人に一番相応しい格好を取り寄せる召還の儀式があります。元
々、その人物がどのような人間であるかを測るための儀式なのです
が……」

要するに、剣士なら剣やら鎧やらが召還されてくるらしく、それ

によって人となりを判別するらしい。

とりあえず、俺はパジャマを普段着に据えている二トではないので、普段着が登場してくれるのだろう。

「便利だな、魔法って」

「エルフは血筋によって魔法を扱えるんですよ。逆を言えば、それ以外の魔法は使えないんですけどね」

アイナリンドは「攻撃魔法だったら、妹も守れたのに」と呟いた。忘れかけていたが、アイナリンドが俺を呼んだのは魔王を倒すためであり、そもそもそこまで思い至ったのも妹を拉致されたからである。よほど、仲睦まじい姉妹だったのだろう。

そう考えると、いくら俺が被害者のような立場だからと言っても、同情を禁じ得ないところがある。

「人間には魔法が使えないのか？」

「使えますよ。エルフは血筋によって系統が違う幾つかの魔法が使えますけど、人間は個人個人で一つだけ、魔法を使えます」

アイナリンドの説明に、ふと俺の目の前に活路が見えた。

なるほど、やはり俺が選ばれたのは相応の理由があったのだ。その一つだけ使える魔法というのが、おそろしく強力なものに違いはない。相手を即死させたり、無敵の変身ヒーローになったりするに違いない。

「どうすれば、魔法が使えるんだ？」

「念じれば使えますよ。そうですね、たとえば……炎を生み出す魔法だとしたら『炎よ出る！』と念じれば発動します。『魔法よ発動しろ！』では駄目ですね」

なんともお手軽である。アイナリンド曰く、魔法というのはこの世界の生物に与えられた神様からのプレゼントらしい。種族間の能力補正のためとか。

魔物は得てして身体能力が高いが、魔法が使えない。エルフは非力だが、血筋によって幾つもの魔法を操る。ドワーフは手先が器用で腕力も強いが小柄であり、エルフと同様に血筋によって魔法が使

えるものの、種類だけだとか。フェルプールは魔物と同じで、高い身体能力を持つ反面、繁殖力が低く魔法も使えないらしい。

「ある意味では、人間が一番可能性を秘めているんです。エルフは強力な魔法を幾つも使えますが、人間はどんな魔法なのか、全然わかりませんからね。未知数なだけ、怖いです」

無限の可能性というわけである。これはいよいよ期待も高まる。

世界を救う勇者という俺に相応しい魔法は、やはり強力無比なチート技ぐらいでなければならぬだろう。

「どんな魔法なのか知りようもないので、色々試さないでだめですけど……ユウシさんなら、きっと凄い魔法が使えますよ！」

「お、そうなのか!？」

「そうでないと、私が困ります」

せっかく召喚した勇者様なのだから、強くないといけない。どうやらアイナリンドも俺と同様に、俺の使える魔法に一縷の望みを託しているようである。

「じゃあ、早速試してみるか。アイナリンドは俺の服を頼むぞ」

「はいっ！」

とりあえずやることができた。

チートな勇者とでも名乗ってやろうか。それとも、魔法を使うのだから異界の魔術師というのもいい。

「くつくく。楽しくなってきたじゃないか」

俺は一人ほくそえみ、アイナリンドとの「アハハ」「ウフフ」な展開に思いを馳せた。

魔法探しは難航していた。

どんな魔法なのかわからない上に、その魔法を特定する術^{すべ}がないので、文字通り手探りである。

やはり勇者っぽく雷の魔法なんかがカッコイイと思って「ギガデ

イン」と唱えてみたが、ウンともスンとも言わず、流石にいきなりギガは不味いと「ライデイン」と唱えてみたが、しかし何も起こらなかった。

「メラゾーマ！　アイスガ！　ケアルツ！　メテオ！　スターストームα！」

一通り、それっぽい呪文を唱えてみるのだが、全然反応がない。

「バギクロスツ！　アースクエイク！　変身ツ！　アウトポート！」

真空派も地震も変身も転送魔法も駄目だった。

「吹っ飛べ！　雷崩しツ！　破壊光線ツ！　炎舞！！」

あれも駄目。これも駄目。

「聞いた話では、足の臭いを増幅させる魔法もあるそうですよ」

「……それだけは嫌だなあ」

うつかり「もしかしてそれじゃないか？」と考えてしまったが、特に臭気が立ち籠めることもなかった。一安心である。

強力無比な魔法でアイナリンドの家を壊してしまおうといけけないので、外でやっているのだが、俺の奇声が森に消えていくばかりで終いにはアホらしくなってくる。別に呪文は必要ないらしいのだが、魔法というからには呪文が必要というのが俺の持論だ。

「私の方は成功しました」

「お。服が届いたか」

「だから外に出てきたんですよ」

アイナリンドは家の中で儀式を行っていたらしく、何やら黒い服を抱えてやって来た。

はて、俺の服の中に黒い物は少ないはずだったのだがと首を傾げるが、アイナリンドがぱつと服を広げたところで合点がいった。

「学ランじゃねえか……ああ、なるほど」

そういえば、アイナリンドの召喚魔法はあくまでも『その人間の人となりを示す物』を引っ張ってくる物である。剣士には剣やら鎧やらが出てくると言うことは、職業を示す物と考えることもできる。俺の職業は学生であり、学ランが出てくるのにもそういう意味で

は頷ける。

「とっても丈夫な素材ですね。これなら旅にも耐えられますよ」

「……まあ、パジャマよりはマシか」

シャツも無しに学生服を着るわけにもいかず、パジャマの上から学生服を羽織り、下のスラックスだけを取り替える。ベルトを締めると、ようやく心地がついた気分になった。

「靴下と靴もありますよ。それに、靴みたいなものもあつたんですけど、重いので全部持ってきてませんでした。中で確認してみてくださいさ
いね」

「おうよ」

とりあえず、かれこれ小一時間は魔法探しをやっていた。叫びすぎて疲れたこともあり、休憩がてら召喚されてきた俺の持ち物を確認してみることにした。

「んー……普通だな。靴下は洗つてあるし、通学に使つてたスニーカー……げ、鞆に弁当入れつばなしだった」

元の世界とこの世界が同じ時系列だと考えれば、少し残してしまつた御飯が腐っていることはないだろうが、一応確認のために見てみる。

「……一晩経つただけで感じたな。セーフセーフ」

「お米ですね。そつちの世界にもあるんですか？」

アイナリンドは俺の持ち物の全てが真新しいようで、しきりに鞆の中を気にしている。ただ、入っている物は教科書に筆箱。ノート。それと水筒代わりのペットボトルぐらいのものだった。

「後は、学ランのポケットに入ってたハンカチとティッシュ。財布は……大事に仕舞つておこう」

以上、俺の所持品の全てである。靴下と靴を身につけて、アイナリンドに一応、礼だけ言っておいた。

「これでまともに行動できそうだ。助かった」

「いえいえ。それよりも、これ何ですか？」

「ああ、それはペットボトルって言つて……まあ、熱にはちよつと

弱いけど、軽いしそこそこ頑丈だから水筒みたいに使えるんだ」

見ると、中には昨日のまま、ウーロン茶が少し残っていた。叫びすぎて喉が渴いているので、都合が良い。

きゅつと蓋を回して口を開けると、一気にウーロン茶を飲み干した。

「ふう。まあ、こういう感じで使うんだ。けど、ちょっと足りないな……水が欲しい」

「お茶、淹れましょうか？」

「いや、できれば冷たい水が良いんだけど……冷たい物つてある？」
ウーロン茶は温くなっていた。森の中なので涼しいはずなのだが、元々気温が高いのか、汗もかなりかいてしまっている。こんなときはやはり、キンキンに冷えた麦茶の出番だ。

「冷やすのつて、とっても難しいんです。それこそ、魔法でも無い限り……」

「げ……くそ、水でもいいんだけどな。冷たかったら」

無い物ねだりをしてても仕方ないのはわかってるが、元の世界ではありふれた冷氣という存在が無いのは、正直辛い。

冷たい水が欲しいと思いながら、なんとなく手元で転がして遊んでいたペットボトルに目をやった。

「……ん？」

最初は違和感だった。そう、有り得ない現象を目の当たりにしたときの違和感である。

何故か、ペットボトルの中から水が湧き出ているのである。

「へ……ど、どうなってんだ？」

ペットボトルの中。何も無いところから、まるで源泉かと思うようにこんこんと水が湧き出てくる。

すぐに水はペットボトルを満たして、満タンになったところで止まった。

「……え、ナニコレ？」

「す、凄いですっ。魔法ですよ、魔法！」

アイナリンドが目を丸くしながらも喜び飛び上がる。

なるほど、これが魔法か。異世界からやってきた俺にも、きちんと魔法は使えたのだ。

ペットボトルのキャップを取り外し、水を飲んでみる。

「う、うめえ！」

よく冷えており、しかも妙に美味しい。水なので無味無臭なのだが、それでも何処か美味いと感じるのだ。

これは凄い。流石は異世界である。超常現象のような事態が目の前で起こっている。

「アイナリンドも飲んでみる。この水、すげえ美味しいぞ！」

「は、はい……わ、美味しいですねっ！」

思わず手を取り合ってキャッキヤと喜び合う。そのままひとしきりはしゃいだところで、ふと俺とアイナリンドは一つの結果が出たことに気付き、ぱちりと目を合わせた。

「……え。俺の魔法って……何。これだけ？」

「……みたいですなえ」

民古勇士、十七歳。

使用魔法はペットボトルに水を補充することで決定らしい。

第二話：迷走（後書き）

タミフルは某黒衣のサムライよりアホなので書きやすいです。

第三話：旅は恥と金のかきすて

「とてもすごい魔法ですよ！」

アイナリンドは拳を握って力説してくれたのだが、俺の落ち込み具合は半端ではなかった。

この世界では飲み水の確保は生物が生きていくうえで最重要課題であり、故に旅などでは水を常に新鮮な状態で確保できる俺は至高の存在に近いという。

確かに言われてみればそのとおりであるし、便利な能力には違いないのだが、こちらら勇者を肩書きを背負ってしまった現代人である。飲み水をいくら確保したところで魔王様を倒せないのであれば、何の意味もない。

「せめて、敵に水で攻撃したりできないもんな」

試しにペットボトルの口をアイナリンドに向けて思いっきり魔法を発動させてみたところ、ホースで水をまく感じで勢いよく水がほとばしったが、アイナリンドはぽかんと俺を見上げるだけだった。何のダメージもない。

「……お気持ちはありがたいんですけど、水浴びは後でいいです」

「……いや、まあ、うん」

割といい方向に捉えてくれたアイナリンドは、根っこではいい人なのだろう。

だから、俺もアイナリンドの服が水で透けて、ちよつとエロい格好になっていることを指摘するような真似はしないことにした。あえて恥ずかしい思いをさせるよりも、俺が一人で眼福を味わうほうが両者の得になるという名判断である。

「うーん、しかし大きいな」

「そうですね。この魔法はとても大きい意味を持ちますよ。商隊に雇われればコースこそ限定されますが、安全な旅だってできますし」「実に魅力的だ」

「そうでしょう。まずは魔王の情報を集めるためにも旅に出ましよう。呼び出してしまった私にも責任がありますし……お手伝いしますから」

「形もいいな。やっぱりエルフってのは歳食つても垂れないのか」

「エルフだからというよりも、ケレブレス家の誇りです。いくら年齢を重ねようが、文句を垂れるような偏屈にはならない誇りがありますもの」

「いやいや、誇りたい気持ちもわかるけど、こういうのは隠しているからこそ魅力になるんであって」

「そ、そうですね……ユウシさんのこと、私は少し誤解していたかもしれません。最初は私の身体ばかりを見ていたのに……誇りが何であるか理解できる、聡明な方だったのですね」

「ああ、そりゃまあアイナリンドの身体は全部魅力的だけど、やっぱり一番はそこだろう」

俺はビシッとアイナリンドの胸を指差した。アイナリンドはぱあっと顔をほころばせて何度もうなずいた。

「そう、そうなんです。私たちはいつも、心に誇りを抱いて生きているんです！」

……おかしい。胸の話をしているはずが、何故か心に話題が摩り替わっているようだ。

だがまあ、アイナリンドは上機嫌で身体をくねらせており、透けた服の下の柔らかそうな身体がエロく踊っているので俺としても万々歳である。

「そういうわけで、旅に出ましよう。いくらここで待っていても魔王が現れることはないでしょうし」

「よくわからんが、まあ旅に出るしか無いだろうな」

アイナリンドの家があるのは、彼女いわく『ステビナの森』と呼ばれるところらしい。

ステビナの森はこの世界で三つある大陸のうち、東の大陸である

アルストリアの北西部。農業大国ディアドラにあるとか。明日には忘れてしまいそうな横文字の地名だが、要するに田舎も田舎。三日ほど歩いたところに小さな農村があるだけのど田舎らしい。こんなところで構えていても、俺とアイナリンドの間に子供が生まれるくらいのは出来事しか起こりそうに無い。それはそれで魅力的でもあるのだが、それをアイナリンドに話すと「意地でも旅に出ます」と言われた。

「エルフは森の守護者です。宗家の代表である私が森を抜けるのは少々不味いのですが、こんなこともあるのかと姪である分家筋の長に細かいことを任せられるよう教育しています」

「しかしこの一帯にアイナリンド以外が住んでいるようには見えな
いんだけど」

「二日ほど歩いたところ。さらに森の奥に住んでいます。まあ、一年か二年に一度は遊びに来るので、手紙を置いておけば気づくでしょう」

「……一年か二年も森を放置していいのか、守護者とやらは」

「何千年も続く森ですから。たかが一年や二年放置してもヒネたり
しませんよ」

流石、御年百歳を超えるエルフ様である。俺にとっての一年、二年。しかも十七、十八歳という青春適齢期は「たかが」では済まされない大事な時期であるが、彼女にとっては二、三日程度の認識なのだろう。

「ま、いいか。水はあっても飯も何も無いんだ。一人暮らししてたら
んなら、飯くらい作れるんだろう？」

「ええ、お任せください。ケレプレス家自慢の料理を存分に振舞い
ましょう」

どうやらアイナリンドには妙に家名にこだわる悪癖があるようだが、この際だから気にしない。

時代も世界も違うのだから、まあ考え方も違って当然だろう。日本にだって未だに家名を残すとか、そういう風習があるのだ。科学

的に俺の住んでいた世界よりも発展が遅れているであろうこの世界なのだから、これくらいは普通のことなのかもしれない。

「では、一カ月後に出発しましょう」

「……せめて、一週間後にしようぜ」

まあ、長寿らしい間延びした性格だけは少々いただけないのだが。

とりあえず落ち込んだものの、アイナリンドの透け透けダンスで気力を取り戻した俺は旅に出る決意を固めた。

別にアイナリンドに乗せられたわけではなく、よくよく考えた上での結論だ。

まず、帰るためには魔王様を倒さねばならないが、どう考えても俺の力では無理である。しかし、人間全員が魔法を一個ずつ使えるとなれば、きつとこの世界のどこかには即死魔法なり、絶対無敵ヒーローに変身するなり、魔王様を倒す能力を秘めた奴がいるに違いない。

つまり、俺が魔王様を倒すというよりも、俺が集めた人間で魔王様を倒すという計画である。

もちろん、それには色々な問題は付きまとうのだろうが、まずはある程度行動してみなければ何もわからない。手探りではあるが、少なくとも森の奥でアイナリンドと二人でぼうつとしているよりは建設的だ。

まずは一番近い農村を目指し、そこから何とか大きな町に移動して、商隊なり冒険者なり、旅をしている人間にくつついていく。安全かつ移動に手間のかからない飲み水の確保ともなれば、俺を雇う人間は多いというのがアイナリンドの言である。

「……けど、やっぱ旅とか自信ねえな」

「野宿は寒いですから、くつついて寝ましょうね」

「よっしゃ旅だ、コノヤロー」

アイナリンドも俺の操縦方法を心得てきたのか、或いは誇りを解してくれる俺に惚れてしまったのか定かではないが、とりあえず言

質は取ったので楽しい旅になりそうだった。

「なりそうだった、んだけどなあ」

旅、初日。

アイナリンドが旅立ちに必要な道具を必死でかき集めた結果、一週間といわず一日で用意は完了していた。

アイナリンド曰く「超頑張りました」とのことだが、衣類数着を箆笥から引っ張り出し、倉庫から保存食や毛布を引っ張ってきただけである。男のロマンとして無人島生活に憧れをひそかに抱いていた俺は、乏しいながらもサバイバルの知識があり、ナイフとランプを要求。これを見つけるのに一日を費やしたというほうが正しい。

アイナリンドが調理に使っていたナイフは小振りすぎて、せめてサバイバルナイフがほしいと注文をつけたところ「倉庫の何処かにあったような」というありがたい返事がきて、俺が半日かけてみつけた。

もっとも、錆付いていて使い物にならなかったもので、それを砥石で研ぐこと数時間。アイナリンドの作る自然食というか、むしろワイルドな「ケレブレス家特製シチュー」を平らげてしまえば、一日は既に終わっていたのだ。

当然、夜も深まったところで俺が同衾を主張したが、アイナリンドがやんわりと「疲れているでしょうから、来客用のベッドをどうぞ」と断り、寂しい夜を明かした。

そして今日。なんだか遠足にでも行くような気分で旅路に着いたのだが。

「……アイナリンドさんや。ちょっと休憩しないかね？」

「まだ五時間しか歩いていませんよ？」

「……いや、五時間ですよ？」

「間に三回も休憩を取っているんですから……頑張りましょうよ」
これである。

森の民。あるいは森の番人と言われるエルフというのはすごぶる

健脚で、決して平らとは言えない森の道をさくさくと歩いていくのである。

俺も決して運動が苦手な部類ではないが、流石に悪路を一時間も歩けば疲れる。運動部にでも入っていれば大したことのない運動量なのかもしれないが、中学生から帰宅部を貫き通す俺にしてみれば、これはもう完全なるオーバーワークである。

幸いにして冷たい水の補給に手間はかからないが、小便が近くなるだけなので無闇に飲まないことにしている。三回の休憩とは別に既に五回のトイレ休憩を要求しており、アイナリンドが半ば呆れているのだ。

俺としても女の子の前でへばるようなみつともないことはしたくないのだが、だからといって足に無理をさせて筋肉痛となれば明日の行程に不備が出る。

「本当に勇者様なのでしょうか」

「呼んだ本人の台詞じゃねえよ」

「……そうなんですよねえ」

アイナリンドは苦笑しながらも、座るのに手ごろな大木を見つけて、俺の手を引いてくれた。

ちよつと腹黒いながら、基本的には優しい女の子である。大木に俺を寄りかからせると、蠟燭の欠片のようなものを皮袋から取り出して、俺の口に放り込んだ。

「蜂の巣です。噛むと甘くて美味しいですよ」

「お、蜂蜜か……うお、こりゃ甘い」

おそろくというか、当然というか、天然モノの蜂蜜だろう。ぶよぶよと、決して歯ごたえのよくない蠟のような巣を噛んでみると、舌がふやけそうなほどに甘い蜜が口の中を支配する。

疲れた身体に染み入る甘さだ。決して甘党ではないが、素直に美味いと思う。

「養蜂でもやってんのか？」

「いえ。家の近くに蜂の巣がありまして……蓮華れんげの花を巣の近くに

育てたので、勝手ながら謝礼として巣の一部を頂戴したのですよ」
なるほど。確かに蓮華の花の蜜は、蜂蜜の中でも美味いと聞く。
決して蜂の巣すべてを手に入れたわけではなく、あくまでも蓮華を
植えた手間賃分なのだろう。

蜂としては別に恩義を感じちゃいないのだろうか、まあ無闇に奪
うよりかはマシである。

「……ってことは、この蜂蜜。貴重じゃないのか？」

手間暇かけた割には、どう考えても採取量が少なすぎる。

「ふふ、気にしないでください。一年もあれば手に掬うほどの量が
取れますもの」

いや、それは十二分に貴重品だと思います。

年間で手のひら一杯分しか採れない蜂蜜だ。俺が噛み締めている
分だけでも、一ヶ月分ぐらいの量ということになる。見た目は若い
女の子であるアイナリンドであるから、甘いものも好きはずだ。

「なんか、悪いな……」

「いいんですよ。私の一年と、ユウシさんの一年では重みが違いま
すから」

「む。いや確かに俺はフラフラ生きてきたけどよ……」

「逆ですよ。寿命が長いだけ、私たちの生き方は薄くなります。薄
っぺらくて、退屈で——ユウシさんの十倍近く生きているのに、妹
一人を守ることすら出来ないんです」

アイナリンドはぽつりと呟いて、悲しそうに目を伏せた。

よほど、妹のことを大事にしていたのだろう。ことあるごとに妹
を思い返すことからよくわかる。

「まあ、元気出せよ。こんなんだけど、一応勇者様がいるわけで……
……なんで俺が来たのか知らんが、まあ、あれだ。もしかすると本当
に魔王様を倒しちゃうかもしれないんだし」

ペットボトルを鞆から取り出して、念を込める。

みるみるうちに水が満たされて、ずしりとした感触が手に伝わっ
た。

「……こんな魔法で倒せりや苦労はないけどな。でも、そこらの名水よか美味しいのは確かだ」

さほど面白い冗談ではなかったが、アイナリンドは俺が元気付けようとしているということに気付いてくれたのだろう。くすくすと微笑んで、ペットボトルを受け取り、こくこくと喉を鳴らして水を飲んだ。

「蜂蜜より、元気が出ました」

「……そっか。じゃあ俺もへばってられねえな。出発するか」

「はいっ！」

俺が立ち上がりアイナリンドに手を差し伸べると、彼女もまたハキハキと答え、俺の手につかまって立ち上がった。

装備はパジャマに学ラン。魔法は水芸。おそらくレベルは1。仲間には美人のエルフさん。

目標の魔王様討伐までは、道が長い。

第三話：旅は恥と金のかきすて（後書き）

序盤なので飛ばしてますが、更新ペースはゆったりですので悪しからず。

黒衣執筆中の時間が時間余ってただけですので。

第四話：基本的には仲良し、お人よし

時間とは止まることの無いものであり、故に貴重である。

だが、貴重とわかっていても早く過ぎ去って欲しい時間というものもあるわけで、人生のうち半分はそんな時間じゃないかとも思う。

終業のチャイムのように、夕暮れ時にカラスと思しき鳥のカーという声を聞いた瞬間、俺はぺたんと座り込んで野宿の準備を進めた。

そして、いよいよお楽しみの時間。そう、アイナリンドの昨日の台詞に「くつついて寝ましようね」とあったからこそ、俺は旅を決意して、一生懸命前へと進んだのである。

言質をとったからには、もうそれは確固たる意思であるという証明を得たようなものである。

くつついて寝ましようと言われたからには、そりやもう鼻の頭が触れ合うぐらいの距離でなくてはならないし、当然そんな位置に頭がある以上、身体もびったり密着していなければならない。

さらに、そこまで密着した状態で眠るためには、どうしても両腕が邪魔になる。腕を身体の下に敷いて眠ると血行の巡りが悪くなるし、翌朝に痺れていること請け合い。しかもバランスが悪く、これはもうお互いがお互いを支えあう形。美しき愛の表現——お互いを抱きしめあいながら眠るという方法に到らざるを得ない。

「今日は案外あったかいですね」

「いや、俺は寒くて寒くて、とても一人じゃ眠れない」

「じゃあ、私が焚き火の番を……」

「一緒に寝ると提案したのはアイナリンドだ。しかも、一晩中女の子に見張りをさせて眠るほど無神経にはできてない。おまけに明日も歩くんだから睡眠はしっかり取らないと遅れてしまう」

「……こういうことになる、ユウシさんは物凄く饒舌になりますね」

アイナリンドは少し呆れた様子で毛布を取り出す。目は笑っておらず、どこことなく悲壮な決意みたいなものが見え隠れする。

よもや、俺を呼び出したことへの罪悪感みたいなものと、勢いで言ってしまったながら、責任を感じて嫌々ながらも俺と抱き合って眠ろうという決意を固めているのかもしれない。

冗談ではない。俺が求めているのは鼻のさきつちよがコツンと触れ合って、お互いが頬を染めあうような展開である。おずおずとお互いの背中に手を伸ばしていくまでの、じれったい時間を求めているのだ。

「俺が見張ってる。アイナリンドはゆっくり休め」

不意に興が冷めてしまい、アイナリンドに背を向けて焚き火に小枝を放り込んだ。森の獣はエルフやその周囲の存在を襲わないらしいので、外敵から夜中に身を守る必要は無いのだが、薄い毛布で肌寒い夜を過ごすのは不味い。火の管理という意味での見張りは必須のようだ。二人でくつついて眠れば寒さも問題ないが、流石に一人だと火がないと辛いのだ。

まあ、若いものだから一晩ぐらい徹夜しても大丈夫だろう。明日は交替で見張り番をしてほしいが、初日ぐらい女の子をいたわるのも男の優しさである。

「ユウシさん、一緒に寝ましょう」

ふと、背中からアイナリンドの声が聞こえる。男の優しさの前に立ちはだかるのは、いつだって女の責任感だ。だが、俺はこれでも現代日本を生きる紳士である。未開の地だからと言って、ホイホイと甘言に乗るようなヤワなハートではないのだ。

「いいよ。嫌々くつついてたら、アイナリンドはどのみち眠れないだろ」

「嫌々なんかじゃないですよ」

せっかく断ってやったというのに、やはり女の責任感は性質が悪い。男の優しさぐらいに性質が悪いのだから、これはもう最悪の部類だろう。

「あのなあ、俺だって我慢してるんだから……！？」

そんなこと言われたら、やばいんだぞ。と言おうとして振り返ったのだが、アイナリンドの目を見たら言葉が途切れてしまった。

真っ暗な森を背景に、炎の小さな灯りに照らされたアイナリンドの表情は、とても優しいものだだったからだ。透き通るような金髪に、エメルルドのような瞳の彼女は、まるで作り物のように美しいのに、命を持たぬ者には決して生み出せない、包み込むような優しい笑みを浮かべていたのだ。

「ユウシさんは、とっても疲れてます。そんな人に、不寝番なんて任せられません。これが、理由のひとつです」

悪戯っぽい声で、からかうように呟かれるような理屈。

「けど、自分でもそれをわかってる筈なのに。約束も守らない私を嫌ったり恨んだりしてもいい筈なのに。それでも私を気遣ってくれるユウシさんに見張りなんてさせられません。私も……嫌々じゃないになりました」

旅の道のりは長い。

だがそれは決して悪いことじゃないと思う。

さて、翌日である。

しっかりと抱き合って眠ったおかげでとても暖かった。しかも妙に肌の色艶がいい。

「おはようございます、ユウシさん」

「おはよう、アイナリンド」

目覚めた瞬間に美人の顔が近くにあるのはとてもいいことだ。はにかんでからそっと身を離すアイナリンドがいじらしい。

そそくさと毛布を片付け始めるアイナリンドを横目に、ぐうつと背伸びをして深呼吸をする。有毒ガスなんて無縁の異世界は、とにかく空気が美味い。

「朝ごはん、作りますね。水をお願いして良いですか？」

「任せろ、唯一の特技だ」

魔王を倒すためには使えそうも無いが、少なくとも実生活において俺の魔法が異様に高性能であることは現在進行形で実感しつつある。

アイナリンドが三十分ほど森を歩いて手に入れた食材を煮込んだ『ケレプレス家特製シチュー』は、実に野性味溢れる味わいだった。旅に出るにあたって持ち物は厳選したが、それでも大量の荷物になり、俺が昨日モロにへばってしまったのも荷物の量に理由がある。まず、先ほどまで使っていた毛布。薄手で軽いものを選んだが、やはりかさばってしまう。そして調理器具として鍋と皿。他には火打石。食材は干し肉に小麦粉などをアイナリンドが管理してくれている。

後はアイナリンドの着替え一式に、蠟燭などの雑貨。これだけの荷物ともなれば二人で分担してもけっこうな重さになり、森の悪路も手伝って歩くだけで重労働となるのだ。

もっとも、飲み水は俺が無尽蔵に提供できるのでかなり楽だとアイナリンドは言う。しかし、それでも極力荷物を減らすためにアイナリンドが「行く先々で食材をそろえていきましょう」と提案してくれたのだ。

流石は森の民と謳われている（らしい）エルフである。森のことは熟知しており、しかもこのステビナの森はアイナリンドにとってまさしく我が家のようなものである。村に行くルート付近にある食材をほぼ把握しており、量こそ腹いっぱいとはいかないが、野草や果物を補給してくれる。

「ステビナの森を抜けると、この方法は使えませんかね」

「村に行けば食材くらいあるだろ。人間の通貨、あるか？」

「ステビナの森を治めている私は、付近の村人にとってはとても感謝されています。近頃、世を惑わしている魔王に対抗すると言えば食事ぐらいは振舞ってくれるはず……路銀は、ユウシさんの魔法で

稼ぐのが一番だと思います」

どうやらこの世界の人間は、己の魔法によって生計を立てている者も多いらしい。

交通の発達していない世界であるから、レポートや重力操作なんかができれば荷運び屋で食いはぐれることは無く、足の匂いを増幅させる魔法ですら、強烈な臭気で魔物を追い払う用心棒としての道があるという。

何の役にも立たない魔法の持ち主とているが、農業や建築において人手余剰ということはなく、また彼らの多くは根が真面目だそうだ。

俺の場合は水という生物に必要な物質を生み出すものであるから、よほど水に困らない場所以外では大変重宝されるはずである。それこそ、商隊に雇われつつ移動するもよし、冒険家や傭兵団に協力して、魔王討伐の足がかりにするもよし。この味ならば町で商売すらできるというのがアイナリンドの言である。

「日照り続きの村に訪れれば、神のごとく尊敬されるでしょうね」

「んー、別に尊敬されなくてもいいけど、困ってる人を助けるのはやぶさかじゃないな。一応、世界を救う勇者様見習いとしちゃ、できる範囲で人助けを行うのが筋だろ」

俺の言葉にアイナリンドはいたく感銘を受けたらしく、目をきらきらと輝かせて俺を見つめていた。

別に魔法と言っても精神力を消費するとか、そういう感覚は特にないのだ。アイナリンドによれば、扱う魔法によっては強烈な疲労感に襲われたりもするそうだが、俺の魔法は便利であるものの、派手ではなく、特に疲れない。そんなリスクのない魔法なのだから、それで金を得るほうが申し訳ないほどだ。

「ユウシさんに勇者としての自覚が生まれるなんて……」

眼を輝かせているアイナリンドには悪いが、そもそも今までの環境が違いすぎたのだと思う。

取っ手を捻れば蛇口から水が流れてくるような生活をしていたの

だ。だからこそ俺は自分の魔法に落ち込んだわけだし、その能力を見返りも無く使うことに対しても抵抗が無い。

平和な国でぼんやり生きてきた故の能天気さなのだろう。アイナリンドからすれば俺が清廉な人物に映ったのだろうが、要するにこの温度差がそのまま、元の世界とこの世界のギャップということだ。「これでスケベが消えたら、完璧ですねっ！」

どうやらこの世界には、英雄色を好むという慣用句は存在しないらしい。

微笑ましい朝の談笑をいつまでも続けていたかったのだが、そうも行かないのが旅の悲しさである。

これが平坦な街道を馬車で移動するともなれば話は違うのだろうが、如何せん森の悪路を徒歩で移動するのである。おまけに荷物を抱えた状態であるから、平均的な高校生男子というポジションを頂戴していた俺には、これだけで十分に試練である。

アイナリンドも初日の俺を見ているので、移動速度をやや落としてくれているものの、それでも休憩ばかりするわけにはいかない。

いくら食材を集めてまわり、水が無尽蔵だとしても小麦粉などの食材が転がっているはずも無く、RPGのように森の中に宝箱が置いてあったりもしない。まあ、その代わりMPという概念も無く、魔法は使いたい放題だったりするのだが。

「アイナリンド。移動手段を召喚してくれ」

「何でもかんでも召喚できるわけじゃないですよ」

旅の二日目。一時間も経たない内に、一度訪れた街に瞬時に移動できるような魔法の持ち主を仲間にしたいと思ってしまった。

国民的RPGでは割と使える人間が多かったのだが、この世界においてレポート系の魔法は極めて珍しいという。どれくらい珍しいかというと、一万人に一人いれば良いほうらしい。

「レポートが使えれば、間違いなく大金持ちですよ。水の魔法はそれなりに使い手も多いですけど、そんなのとは比べ物にならない

くらい珍しいです」

「……地味に俺がダメージ受ける発言だな、おい」

その水の魔法の使い手からすれば、かなり切ない事実である。勇者なのに珍しくも無い魔法だなんて、一体何をしにこの世界にやってきたというのだろうか。

「あ、いえ……飲み水になるような魔法は相当珍しいですよ。生活密着型の魔法は、職に困りませんし」

アイナリンドがフォローしてくれるが、ちっとも嬉しくない。俺は一応勇者なのだから、魔王様を倒さねばならないのだ。のんきに生活してどうする。

僅か二日の異世界滞在だが、電気もガスもない生活に早くも嫌になっていくのだ。不幸中の幸いとして、水道がなくても困りはしないが。

むしろ、水関係だけは元の世界よりも充実しそうだ。

「そういえば、ユウシさんの魔法はペットボトルにしか水を入れられないんですか？」

アイナリンドが獣道を先に歩きながら尋ねてくる。

木の根を跨ぎながら、俺は軽く頷いた。

「お椀やら、竹筒でも試してみたけど駄目だっただろ。元の世界のモノってことかと思っただけど、筆箱も弁当箱も水は入らなかった。多分、ペットボトルだけだと思う」

自分の魔法がどれだけの性能であるかを確認するのは、この世界では常識だそうだ。

俺も色々と試してみたのだが、結局は最初に手にしたペットボトル以外に水を注ぎ込むことはできなかった。今手にしているペットボトルでなければ駄目なのか、或いはペットボトルなら何でも良いのかはわからないが、現状、この世界にペットボトルは一つだけだ。これが壊れてしまった途端、俺は何の取り柄も無い勇者に成り下がる。

「アイナリンド。手を繋いで歩こう。こけてペットボトルが潰れた

ら大変だ」

「大丈夫ですよ。ユウシさんが自分で言ってたじゃないですか。ペットボトルは耐熱性に耐衝撃にも強くて、変形しても割れることは滅多に無いって」

「そ、そんなこと言ってたか？」

「ええ。壊れたら大変なので、扱い方をちゃんと説明してもらいました」

「……大事に越したことは無いって言うだろう？」

「大丈夫ですよ。夜はくっついて寝るんですから」

何が大丈夫なのかちっともわからないが、夜にくっついて寝るのは確かだ。

じゃあいいか、と無意味に納得してしまう自分がいるので、アイナリンドは森の奥で一人で生活していたにもかかわらず言葉巧みなのだと思う。

「伊達に長く生きてませんから」

アイナリンドが胸を張って言う。相変わらず大きくて形の良い胸がぽよんと弾んで、つい食い入るように見てしまった。

「流石はエルフの中のエルフ。ケレブレス家の長だけあるな。心強い」

アイナリンドが俺の操縦法を会得したのと同様に、俺もまたアイナリンドの操り方を覚えてきた。顔を綻ばせるアイナリンドは、俺がアイナリンド以外のエルフを知らない存在だということすら忘れていたのだらう。

俺は内心で長く生きていても垂れない胸への感謝を捧げつつ、早く夜が来ることを願いながら、相も変わらず続く獣道を進むのだった。

第四話・基本的には仲良し、お人よし（後書き）

タミフルとアイナリンドはお互いにわかりやすい性格をしていますね。

そうそう。この作品のテーマは「どうしてこうなった」です。
タミフル・アイナリンド・作者が共有する意志であります。

第五話：無名の勇者は馬鹿扱い

四日間、たった一人の人間——否、正確に言えば人間という種族ではないのだが——としか会わなかったことが、今までであったろうか。

物心つく以前は父親もいたし、その父親が放蕩してしまった頃には幼稚園に通っていた。

母親が仕事に出ねばならず、長期休暇は祖父母や叔母の家で世話になり、最低でも二人以上の人間と会っていたように思う。

中学生にもなれば夏休みを田舎で過ごすこともなくなったが、友達と遊んだり、一人でもどこかに出かけたりしていた。

もしかすると、四日間ぐらいなら母親の顔しか見なかった日というのがあるかもしれない。だが、それでも四六時中一緒だったわけではない。

「ユウシさん、ぼうつとしてますけど大丈夫ですか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

異世界五日目。旅に出たのが召喚された翌日であるから、旅は四日目。

そろそろ最初の目的地である小さな農村につくという頃合だ。

旅というのは思っていた以上に過酷であり、アイナリンドとくっついて眠るというオマケがなければ絶対に心が折れていたと思う。

背中と両腕に提げた荷物の重みに耐え、えっちらおっちらと進む作業はとにかく大変で、料理も味気ない上に質素極まりない。換えの服がないので洗濯などできるはずもなく、着の身着のままのおかげで体臭も割ときつい。

アイナリンドという美人さんが隣にいることは嬉しいのだが、なんせ四日間も二人きりだと会話がなくなる。当初は俺のこの世界への知識のなさを補おうと色々聞いていたのだが、基本的にアイナリンドも森の奥に引き籠もっている種族であるからして、語って聞か

せられる知識は四日分も無かった。

つまり、娯楽という存在の異様な欠如である。

普段ならマンガを読んで、ゲームをして、テレビを観て……というような、ごくごく身近にあったはずの娯楽が一切無いのである。

アイナリンドの異世界講座が終了したのは二日目であり、世間話を始めたのだが、アイナリンドは基本的にひとりで生活しているだけあって、会話の内容に楽しさを見出すというより、会話そのものを楽しんでしまうのだ。アイナリンドはそれでいいかもしれないが、オチもない話を延々と聞かされる俺の身にもなってほしい。三日目の朝——つまり昨日からは、敢えて会話を振っていない。

あと娯楽になりうるものとして、景色というものがあるはずなのだが、森の中は基本的に薄暗く、土の茶色と植物の緑のオンパレードである。たまに鳥や虫も見かけるが、別段珍しい種類でもなく、元の世界でも見かけたようなものばかりとあっては、楽しみようがない。

こうなればもう、娯楽の対象をアイナリンドに求めるしかなく、俺はアイナリンドの着替えを覗こうとしたり、寝ているときに胸に手を伸ばしたりと、実に駄目な方向に全力で突き進んだ。

結果、アイナリンドが「もう絶対一緒に寝ません」と言い出して、俺がマジ土下座をカマし、セクハラを一切しないことを約束させられて今に至る。もうこうなれば脳内で色々妄想するしか手段が無く、脳内のアイナリンドが非常に汁ツ気の多い状態になっていた。

「……アイナリンド。川とか無いのか。水浴びしようぜ」

「ありますけど、もうすぐ村ですよ。先を急ぐって言ったのはユウシさんでしょう?」

「だけどさあ」

「魔法で水、いっぱい出せるじゃないですか。それで我慢してください」

弊害の多い魔法である。

そんな不毛なやりとりをしている間にも、重い足を前へと進めていた甲斐あって最初の目的地である農村へと到着した。

ステビナの森に隣接する、その名もステビナ村。人口およそ三百人ほどの小さな集落ではあるが、たどり着いたときの俺の喜び方は半端じゃなかった。

なにせ、人工物が手持ちの荷物以外に一切見当たらない森の中で四日間を過ごしたのである。アイナリンドのおかげで食料に困らず、外敵も無く。俺のおかげで水にも困らなかったものの、サバイバルな空気が漂いまくっており、自分が文明人であることを忘れそうだった。

ある程度はアイナリンドから聞かされていたので、そんなに驚きはしないが、ステビナ村はやっぱり既存のファンタジーに対するイメージとかなりかけ離れている。

どうしてもファンタジーRPGのイメージで捉えてしまいがちなので、村といっても石造りの建造物が並んでいるかと思っていたのだが、ほぼ全ての建物が木造。それも藁葺きの屋根の、かなり日本の古い農家に近いイメージである。

つくりは日本の農家よりも御粗末だが、それだけ気候が安定しているということだろう。最低限の雨風しか凌げそうにない家は、すなわち最低限の雨風にしか見舞われない場所であることを意味している。

俺達が到着したのは、ちょうど村のはずれ。しわがれたジイさんが小さな畑を耕しているところだった。

「やや、アイナ様。お久しゅうござえます」

ジイさんは森から出てきた俺とアイナリンドを見つけると、クワを投げ捨てて鑿とした足取りで向かってきた。アイナリンドは時折、このステビナ村に顔を出しているそうで、森が村に恵みを与えていることから、その代表者たる彼女はとても尊敬されているそうだ。

天然さんのアイナリンドなので、本当に尊敬されているのか眉唾

だったのだが、このジイさんの様子を見る限りでは本当のようだ。
見慣れぬ風貌のはずの俺のことなど目にも入っていない様子で、アイナリンドの手を握って親しげな笑みを浮かべている。

「お久しぶりです。元気そうですね」

アイナリンドもジイさんの手を握り返して、嬉しそうににっこりと微笑んでいる。数年に一度の頻度でしか顔を出さないというから、再会の喜びもひとしおだろう。

まあ、何はともあれマトモな食事と風呂にありつけそうではある。

ステビナ村は良質な小麦を産出しているらしく、村の規模に比べて裕福だそうだ。

古びた麻の野良着をまとった村民達を見てみると、確かに着ているものは粗末でも、暮らしに困ってでは出てこないような笑顔をみんなが浮かべている。

村長という好々爺の家に案内されると、アイナリンドと俺はいたく歓迎されて、久々に腹いっぱい飯を食った。

猪の肉を焼いて食べるというのは初めての経験だったが、少々クセがあるものの、中々に美味い。アイナリンドが森で採取した香草を使って焼いたそうで、アイナリンドが村に来たときだけ村人全員で食べるご馳走なのとか。

「香草は森の奥地にしか生えていませんから、私でなければ採取できないんです。私が感謝されている理由、少しは御理解いただけましたか？」

「おう。こんな美味しい肉が食えるなら、そりゃ喜んで歓迎するぜ」
俺とアイナリンドは舌鼓を打ちながら料理を平らげ、村長や村人と色々と言葉を交わした。

もっぱらお互いの近況報告のようなものだったが、普段は一人か、或いは親族のエルフを連れてくるはずのアイナリンドが、人間の若者——つまり、俺を連れてきたという話題になったところで、それ

までの和やかなムードが少し変化した。

「彼はタミフルユウシさん。魔王を討つために異世界よりやって来られた、救世の勇者様です」

自信満々とは言わないが、それでも割と嬉しそうに俺を紹介したアイナリンドだったが、村長および村人の反応は非常に微妙なものだった。

そりゃそうだろう。俺が強面の偉丈夫だとか、雰囲気全開の絶世の美男子であれば「おおっ」とでも歓声が上がったのだろうが、生憎と平々凡々な面構えのひ弱な兄ちゃんではない。

その辺を歩いている農夫のほうがよほど屈強であり、ともすれば子供にも負けそうな勢いである。

「え、ええと……魔王を、倒す……のですか？」

村長が若干言いくそな雰囲気を出しているのにアイナリンドは気付かない。笑顔で「はい」と答え、頼もしげに俺を見る始末である。

なるほど、彼女なりに色々思うところはあったのだろうが、折角呼んだ勇者様を役立たずと決め付けるのはアイナリンド自身でも許せなかったのだろう。俺を無理矢理に信じることで己を保っているということだ。

そうでなければ、出会った瞬間に押し倒して、旅の合間にセクハラを敢行しまくった俺にキラキラとした視線を送るはずが無い。

「こっに見えて、ユウシさんはすごいんですよ」

アイナリンドの言葉に、再び村長達の視線が俺に集まる。

一体、俺の何がすごいんだろうか。妄想力にかけては自負のある俺だが、それ以外にすごいと言われるようなものはない。

頼みの綱だったはずの魔法も、すっかり飲料水としての使い方が定着してしまっているのだ。俺が魔王を倒せるならば、蛇口は全部が勇者様だ。

「そこで、討伐の旅に赴くのですが、先立つものが無いものですか
ら……」

しかし、そんな俺の現実的な思考を他所に、アイナリンドは交渉を続行するつもりらしい。

そもそも、この村に来たのは休息のためだけではない。本格的な旅をするための用意をするのが第一の目的なのだ。

いくらエルフが練り歩くファンタジーワールドだとしても、世の中は基本的にお金がないと身動きならない。移動用の動物にしても食料にしても、とにかく金がかかるのだ。

村長宅を訪ねたのも、決して寝場所の確保のためではない。魔王討伐のための資金を少しでも提供してもらおうという腹なのだ。

アイナリンドのこの村における発言力はかなりのものだというのは今現在の歓待を見れば明白だが、俺に関しては非常に微妙な評価である。そんなところで俺をダシに金をせびったところで、一文も頂戴できないだろう。

「アイナ様……その、非常に申し上げにくいのですが」

案の定、村長は困った顔でおずおずと申し上げてしまっていた。

俺が勇者様としての名に恥じぬ人間だと信じ込むしか精神を保てなかったアイナリンドは、不思議そうに首をかしげている。一番難儀なのは俺だ。勝手に祭り上げられて、無言の駄目出しを喰らうというイジメを受けているのだから。

ようやくアイナリンド以外の異世界人に巡り合えたと思っただけである。流石は自他共に認める「特徴がないのが特徴」の俺である。内心で流した涙がしょっぱい。

「アイナリンド。やめておこう」

結果、俺は口を挟んでいた。

もしかすると、アイナリンドが強く言えば金は出てくるのかも知れないが、それでもこれはいけない。渋々出された金や旅支度で過ごす道のりの気分の悪さを考えれば、素直に重い荷物を背負って移動するか、地道に水売って生活するほうがマシというものだ。

「せめて、一番近い街へ送り届けてもらえれば、後は何とかするの……この村は小麦の産地って聞いたんですけど、だとすれば他の

街と交易をしているはずでしょう。行商人なのか、こちらから出向いているのかわからないんですけど、その人間に同行させてもらえないですかね？」

俺がすかさず出した妥協案は、アイナリンドの要求に比べれば実に容易なことだったようだ。村長は助かったという様子で笑顔を見せた。

「それぐらいならば、お安い御用です。丁度、街に作物を売りに行く衆が三日後にでも発つと言っていましたので、彼らと共に街に出られるのが良いかと思います」

交渉成立である。まあ、三日もあれば疲れも癒えるだろうし、最低限の旅装ぐらいいは拜んで頼めば頂戴できるだろう。

「ユウシさん、無一文のまま街まで出て行くつもりですか？」

「……街に出れば、水を売ればいいんだろう。まあ、何とかなるって」

決して単純なお気楽発言ではないのだが、アイナリンドは不服そうだった。

それでも、村長があまり出資に気乗りしないこともある程度は理解できたようで、渋々ながら頷いてみせる。根がお人好しなので、他人への不満もすぐ消えてしまうというよく出来たエルフさんなのである。

「何も無い村ですが、ここまでの道のりも大変だったでしょう。私達ができることは少ないですが、せめて出発までゆっくりしていただくさい」

村長の言い訳とも、本心とも取れる言葉にアイナリンドはにっこりと笑って「ありがとうございます」と告げるのだった。

第五話：無名の勇者は馬鹿扱い（後書き）

いきなり世界を救うとか言い出すヤツは、大体が変なヤツです。
そんなヤツに金を出す人間はそうそういないわけでした。

タミフルは本当に水を出すしか能が無い男ですが、自分のポジションを正確に把握できるのは長所のはずです。

第六話：水の貯蔵は十分だ

久しぶりのベッドの寝心地の何たる素晴らしいことか。

決して上等ではない、藁を詰めたつくりではあるものの、草の上にゴロ寝していたことを考えれば、単純な比較論によって羽毛よりも寝心地が良い。

「これで、アイナリンドと一緒にならなあ」

思わず一人ごちて、隣に並んだベッドで安らかな寝息を立てているアイナリンドを見やる。

一緒に寝ましようと言っていたはずなのだが、ベッドが二つ並んでいるのを見て「折角ですから広々と寝ましよう」と手のひらを返しやがったのである。

村に到着した日。疲れていることもあつて素直に頷いてしまったのが不味かった。疲れも癒えて、のんびりと過ごした今日こそは一緒に寝ようと思ったのだが、慣例と言わんばかりに別々のベッドで眠ることになってしまった。

折角の美人との二人旅であるからして、極力くっついておきたいと願う俺にしてみれば、早くも旅が恋しくなってくる。

「早く明後日になれ……」

硬い土の上でいいから、アイナリンドのすべすべで柔らかい身体を抱きしめながら眠るほうがいい。

純情とも不埒とも言えない、まあ一言で表現するならば若者のサガを持て余しながら、ゆっくりと眼を瞑る。

疲れがまだ完全に癒えきっていなかったのか、割と素直に眠ることが出来た。

翌日。目が覚めると腕の中にアイナリンドがいた。

さては寝ぼけたまま尿意をもよおし、トイレに立った後に本能の

赴くままアイナリンドのベッドにもぐりこんでしまったのだろう。

と思ったのも束の間、位置的に俺のベッドで抱き合っている様子である。まさか、寝ぼけたままアイナリンドを抱きかかえて俺のベッドに横たえたりはしないだろう。アイナリンドが寝ぼけたと見える。

おそらく、四日間の旅で俺の腕の中を寝るときの定位置にしてしまったのが問題だろう。折角のハプニングなので、存分にアイナリンドの抱き心地を堪能させてもらうことにした。

「……ふにゃ」

ぴくぴくとアイナリンドのとながった耳が蠢き、うつすらと眼を開ける。

どうやら俺がアイナリンドの背中をじっくり撫で回したのが呼び水になってしまったらしい。ぼうつと俺の顔を見るアイナリンドの瞳は、やはりエメラルドのように美しい。

「もう少し寝てていいぞ」

「……はふう」

耳元で優しく囁いてやると、アイナリンドは安心したように力を抜いて、再び眼を閉じる。

根が素直なので、寝起きのぼんやり頭だと大体のことに頷いてしまふのだ。旅の間はアイナリンドのほうが多く起きていたので機会が無かったが、折角のチャンスである。

「ちよつと胸揉んでいいか？」

「はい……ほわっ、駄目ですよ！」

眼を閉じたまま了承しかけたアイナリンドだったが、要求がダイレクトすぎたのが不味かった。急に脳を活性化させて、眼を見開いてしまった。

「あうう……どうしてユウシさん、隣にいるんですか？」

既に俺のセクハラ発言に慣れてしまったのか、アイナリンドは胸を揉んでいいかという問いに対して怒ることも無く、自分のおかれている状況に疑問を覚えるだけに留まったようである。

そのうち、もつと要求をエスカレートさせていき、その後にはさげないセクハラを要求すれば、それくらいならばと受け入れられるのではないかというのが俺の目論見である。自分から俺の隣で眠ることを選んでいるのだから、軽い悪戯が許容される日はそう遠くないだろう。

「アイナリンドが自分から『やっぱり一緒に寝たいです』と言って、潜り込んできたんだ」

「……寝ぼけて、ベッドを間違えたということですね」

アイナリンドは俺の発言の虚実をすぐに見抜いて、するりと俺の腕の中からすり抜ける。天然さんなのに頭が良いというのは厄介だ。「では改めまして、おはようございます。今日は明日に備えての準備ですね」

「おはよう。ちゃきちゃき済ませちまおう」

今日も一日が始まる。

旅の用意と言っても、そもそも金も無いので何かを新調することはできない。

ただでさえ小さなステビナ村である。アイナリンドの人徳によって最低限の食料は確保できたのだが、それを荷物にまとめてしまえば、用意は完了していた。後は、明日になって街へ作物を売りに行く男衆の馬車に積み込むだけでいい。

昨日のうちに男衆に面会したが、村でも一番の交渉上手と噂の若者と、力自慢の二人であった。どちらも気さくな人物であり、馬車も幌こそついていないが、作物の他に俺とアイナリンド。それに荷物を積む余裕はあるようだ。馬も村で三頭しかいないうちの二頭で引く事になっており、少々揺れるようだが、徒歩旅に比べれば天と地ほどの差がある。

簡単に用意を済ませてしまうと、アイナリンドはもう今日の仕事は終わりだと言わんばかりに寛ぎはじめた。長寿の種族であるエルフはとにかくのんびり屋で、スローライフがすっかり身に染みてし

まっている。健脚であるし、体力も俺に比べれば高いのだが、根気や長時間の作業には徹底して向いていない。旅ともなれば前に進まねば終わらないので文句も言わずに一日中歩くのだが、環境が整えば途端に面倒くさがりになってしまう。

「まあ、休めるうちに休んでおかないといけないか。歩かなくても済むって言っても、色々あるだろうし」

村長宅の客間にて、アイナリンドに倣ってごろりと横たわる。元の世界に比べれば何も無いに等しい環境だが、美味しい空気と穏やかな時間というのは貴重なものだと知ることができた。

庭先で鶏がコケコケと鳴き、窓――ガラスがないので、壁にあいた穴のようでもあるが――からは、村人の世間話が聞こえてくる。

「ユウシさん、水が欲しいです」

「あいよー」

俺の水は、やはり美味しい。

こう、ミネラル的な成分が多く含まれているのか、美味しく感じることも魔法の一部なのかわからないが、とにかく美味しいのだ。

ほんのり甘いというと語弊があるのだが、感覚としてはそれに近い。こう、疲れた身体に染み渡るような美味さだ。

下手なジュースより美味しいというのが俺の評だが、おそらくここでは望んだところで、ジュースなど飲むことは出来ないだろう。否、果汁百パーセントのジュースなら或いは。

「アイナリンドは、果物を見つけるのが上手いよな」

「ステビナの森限定ですけどね。でも、植物全般に詳しいのは確かです。伊達に百年生きてません」

アイナリンドがえへんと胸を張る。ふるんと揺れる胸が大変好ましく、少々自慢げな態度も甘んじて許容できてしまう。

「今度、果物を見つけたらジュースにしてみるか。絞って果汁を飲むんだ」

「なんだか、勿体無い使い方ですね」

どうやら、この世界にはジュースという存在があまり浸透してい

ないのかもしれない。それならそれで、アイディアを売り込んで商売に出来たりするのだろうか。

否、そもそもアイナリンドは森の奥に引き籠もっている自立二トだから、知識は豊富でも風潮などには疎いだろう。この世界の基本をある程度は教えてくれたが、やはり大きな街に出て、最新の情報を入手しなければ商売なんてできるものではない。

そもそも、商売の経験どころかアルバイトすらしたことのない俺に、金を稼ぐということが出来るのだろうか。

「……すぐに考え込むのは、ユウシさんの癖ですね。良くも悪くも」
アイナリンドがくすくすと微笑みながら、ペットボトルを俺に手渡す。

短い旅のことではあるが、抱き合って眠る間柄である。間接キス程度で一々顔を赤らめるような時期は過ぎてしまった。

しかし、それでもアイナリンドの薄桃色の唇が触れたのかと思うと、少し嬉しくなってしまうのが男のサガである。

「すぐに鼻の下を伸ばすのは、純粹に悪い癖です」

「癖じゃない。自然とそうなるんだから性質と言え」

「どっちにしても悪いです」

軽口を叩き合える関係というのも、それはそれでいいものだ。

さて、そんな暢気な一幕は、ふと村の広場から聞こえてきたざわめきによつて潰えることとなる。

なにやら騒がしいなと思って、窓を見やると、昨日に面会した、俺達を案内してくれる男衆が傷だらけになって運ばれていたのである。ペットボトルで水を飲みながら見ていたので、ぶうつと水を噴いてしまった。

「ちよ、アイナリンド。なんかエライ事になってるぞ」

アイナリンドを手招きしつつ、様子を窺う。村人の話し声によれば、彼らは村の入り口で明日のために荷物を点検していたそうだ。

そこに、迷い込んだ魔物が現れて、二人に襲い掛かったという。

命に別状は無いようだが、鋭い爪で襲われたのだろう。屈強な男の背中には三筋の赤い傷が走っており、麻の服は血に染まっている。映画やドラマで傷だらけの人間を見たことはあるが、実際に目の当たりにするのは始めてである。呆然としてみると、隣で同じく様子を見ていたアイナリンドが腰に下げていた皮袋を開きながら、慌てた様子で外に出て行く。

「アイナリンド!?」

「薬草があります!」

いつになく真面目な声のアイナリンドに触発されて、俺も後に続く。何が出来るかはよくわからないが、少なくともじっとしているよりはいい。

広場に出ると、アイナリンドが颯爽と倒れた男の元に駆け寄り、傷の具合を確認している。村人もアイナリンドが現れた瞬間にほっとした表情を浮かべたところを見ると、医療に関してもアイナリンドが頼られる存在だということなのだろう。

アイナリンドは血に濡れた麻の服をはぎ取る。流れ出る血はあまり鮮やかな色をしていない。つまり、動脈からの出血は無いということなのだろう。

「綺麗な水と布を用意してください」

アイナリンドは状況を把握すると、すぐに村人に指示を出した。すぐに若い男が慌てた様子で駆けていく。

「おい、井戸は逆だぞ!」

「布持つてくるんだよ!」

村人も流石に混乱しているのか、怒号が飛び交う。そこでようやく、慌てているのが俺だけではないということを知った。

みんな慌てているのだ。その事実が、少しでも俺を安堵させて、落ち着いたら状況がよく把握できるようになってきた。

「アイナリンド。水なら俺だ」

そう。俺に出来る唯一のこと。そして、それが今まさに求められ

ているのだ。

綺麗な水——四日間飲み続けても腹を壊すどころか、いつもより調子が悪くなるぐらいの名水でよければ、無尽蔵に確保済みである。「ユウシさん！　じゃんじゃんお願いします」

アイナリンドも俺とペットボトルの存在に気付くと一つ頷いて、水をかける場所を指示してくる。俺はペットボトルの蓋を開いて、どぼどぼと男の傷に降り注ぐ。

本来なら500ミリリットルだけの水であり、すぐに尽きるはずだが、落ちていく分だけ俺が魔法で補充していく。とめどなく溢れ出る湧き水のごとく、男の背中にこびりついた血と泥を洗い流していった。

「十分です。もう一人の方も汚れを落としてください」「了解！」

俺がもう一人の男の傷口を洗う間に、アイナリンドが袋から薬草らしき草を取り出す。

「水、貰います」

アイナリンドが俺からペットボトルを奪い取り、一気に口に含む。そのまま何度か口を濯ぎ、その後で薬草を口に含んで歯ですり潰すと、男の傷口にそれを押し当てていく。

「これで、膿むことはありません。布を巻いて血を止めてください」アイナリンドの指示は早い。村人が持ってきた布が男にぐるぐると巻かれていき、ミイラみたいにされていく。

俺は傷口を全て洗い終わると既にやる事が無くなり、アイナリンドの矢継ぎ早の指示と、それに応える村人の様子を眺めていた。どうやらアイナリンドが持っていたのは殺菌作用のある薬草なのだろう。化膿止めというところであり、確かに命に関わらない傷であれば殺菌して止血さえしてしまえば、時間の経過でよくなっていく。

作業はものの数分で全ての工程を終えて、負傷した男達は戸板に寄せられて村長の家に運ばれていった。

「ふう……ユウシさんがいて助かりました」

アイナリンドが俺を振り返ってにこりと笑う。村人達はアイナリンドに感謝の意を述べて、ようやく落ち着いたのか微かに笑顔も見せていた。

「アイナリンドのおかげだろ。まあ、俺の魔法も案外捨てたモンじゃないってのはわかったけど」

どうしてアイナリンドが村人から慕われているのかも、よくわかった。この百年近くの間、アイナリンドがこのように多くの村人を救い、エルフの持つ知識や技術を伝えてきたのだろう。

俺がしたことと言えば、傷口を洗ったぐらいである。

ただまあ、それだけだと少し寂しい気もするので。

「口元、少し汚れてるぞ」

ペットボトルの水を少しアイナリンドの口元にかけて、薬草の汁を洗い流してやる。

「うん、これで元通りの美人だ」

「……ユウシさんは、たまに卑怯です」

ふと頬を染めて横を向くアイナリンドに、なんだか少しキザだったなと俺まで照れくさくなってくる。

「悪い癖か？」

照れ隠しに、先ほどのやり取りを思い返してくだらない質問を試みる。すると、アイナリンドも思い出したのだろう。くすくすと微笑んでこう言った。

「悪くないですね」

第六話：水の貯蔵は十分だ（後書き）

インフルエンザの特効薬にはなれないけれど、できることはやるべきだ。

勇者タミフル。初めて人の役に立った瞬間。

第七話：魔物と普通の少年

あんまりにも突然のことで驚くタイミングを逸したのだが、魔物という存在がこの世界には割と根付いているらしい。

魔王様が世界制服を狙っていて、その尖兵が魔物だということを聞いていたのだが、別にこんな田舎まで侵略が進んでいるわけではないようだ。

「……つまり、魔物ってのは二種類いるわけか」

今回の件で、旅とは非常に危険であるということが身に染みた俺は、改めてアイナリンドに魔物についての説明を求めた。結果、魔物という大雑把な括りの内側をかなり詳しく知ることが出来たのである。

まず、魔物と一言にいつてもその種類は多岐にわたる。魔物とはつまり害獣のことであるのだが、どうして害獣と呼ばれないかといえば、いくつかの理由がある。

一つは、その凶悪性だ。先ほどの二人にしてもそうだが、魔物一匹を相手にすれば、武装をしていない人間はひとたまりも無いそうだ。まあ、素手でライオンに相対すればひとたまりもないので、ライオンレベルだと仮定しているのだが、ビビるには十二分すぎる。

次に、多くの害獣が農作物を荒らしたりするのに対して、魔物は人を襲う。

中には農作物への被害を与えるヤツもいるらしいのだが、人間の肉が好きなのか習性なのか、基本的に襲い掛かってくるそうだ。ライオンはわざわざ人間を狙ったりしないが、魔物は狙ってくるのだ。この差は大きすぎて泣きそうになる。ちなみに、人間だけでなくエルフやドワーフ、フェルプールなんかも襲われるらしい。エルフやドワーフは仲が悪いと言われているが、幸か不幸か魔物という共通の敵が跋扈するこの世界では、仲良しとまでは言わないが、共同戦

線を張る間柄である。

そして。魔物と害獣の何よりも大きな違いが、種族を超えた主従関係が成立しているということである。

ライオンがハーレムという集団を形成するのは知られているところだが、魔物はそれを種族を超えて行う。その頂点には当然、魔王様が鎮座しているわけであり、その魔王様の号令によって末恐ろしい戦闘集団となって人間達の脅威になるのだ。

もつともこれに関しては先ほど俺が呟いたように二分されており、主従関係を持たない魔物もいる。彼らは野良と呼ばれ、当然ながら魔王様には従わないのだが、だからと言って人間達の味方であるはずもなく、やっぱり人間に襲い掛かってくる。村の男を襲ったのも野良魔物であり、司令官がいないからこそ、ふらっと現れて人を襲う。通り魔のような存在だと言ったら、アイナリンドが「そんな感じです」と返したので、ライオンが通り魔か辻斬りをやっているようなものなのだろう。

「そんな中を旅なんて出来るかいッ！」

とりあえず、魔物についての知識を得た俺は高らかに叫んでいた。人を襲うのが大好きなライオンが跋扈してる世界である。鉄砲があっても嫌なのに、何故に素手で突撃しなければならぬのか。しかも防具はパジャマに学生服である。防御力は1が良いところだろう。レベル1で貧弱な装備の勇者が、いきなりラストダンジョンに迷い込んだようなものである。最初だから弱い魔物がいるというのは、ゲームの都合なのだと思います。そもそも、武器も持たないで撃退できるような生物を魔物などと呼ぶはずが無いのだが。

「ユウシさん、ファイトです！」

無責任に煽るアイナリンドだが、本当に彼女は理解しているのだろうか。

魔物も人間の集落に来れば無事には済まないの、村にいれば安全だが、これから俺達は魔物の親玉とも言っべき存在を倒しに行くのである。

しかも、この状況はとっても危険な香りがする。要素が揃いすぎているのだ。

突然の魔物の襲来に、ふらりと現れた自称勇者。この二つが揃ってしまつと、大変に危険なのだ。

「アイナリンド様。それにユウシ様。なにとぞ、お願いがございませう」

案の定、村長が厳かな表情を浮かべてやって来てしまった。

勇者を名乗る男がいる。しかも、そいつは最近ひよっこり現れて、飯に死んでしまったとしても村としては痛くも痒くもない。本当に勇者たる素養があれば野良魔物なんぞ余裕で倒してしまうだろうし、そうなれば万々歳。村人の結論は至極妥当であり、飯に俺が同じ立場なら、まず何をおいても自称勇者様をけしかけることだろう。

「ユウシ様の御力で、どうか魔物を討伐していただきたいのです」
だから村長のこの言葉も理解は出来るのだが、素直に頷けないのが悲しいところだ。何せ勇者様たる俺には、自慢できる武器が何一つ無いのだから。

俺の魔法は、確かに生活に関して言えばとても重宝する。ペットボトルさえあれば水分補給には困らず、ほぼあらゆる生活用水にもなる。傷口を洗い流すように、最低限の医療にも使える。

だが、それらは牙とは成り得ない。最大出力で魔法を発動させても、シャワーぐらいの水圧しか生まれないのである。使い込めば使い込むほどに魔法は磨きぬかれていくというが、あんまり圧力が高ければペットボトルが破裂してしまうのがオチだろう。

そうなれば、俺に残されたのは、この世界では貧弱と位置される肉体と、役に立たない現代人としての知識である。

いくらパソコンが使えるようが、この世界には電気すらない。鉄砲という存在を知っていても、撃鉄やら銃身やらの製造方法。弾丸の調合なんぞを知らねばこの世界で銃を生むことはできない。

文明の発達によつて、多くの怪奇現象などが理にかなつたものであることを知っているので、多少なり科学的な目で物事を把握することは出来るのかもしれないが、それも魔物との決闘という実に原始的な力比べにおいては役に立ちそうも無い。

しかし、それでも俺にはこの依頼を断ることが出来ない。何故か。理由はこの旅の目的である、打倒魔王様の為には、名を貶めることが出来ないからだ。

決して自尊心や見栄の問題ではない。目下、蛇口と似たような役割しか果たせない俺には、どうしても『異世界からやってきた救世の勇者様』という肩書きが必須なのである。

実に情けない話だが、もう名にすぎるしかないのである。俺に出来ることが水分補給ぐらいのものなら、人に頼るしかない。しかし、いきなり魔王を倒そうと言って「いいよ」と気軽に応えてくれる人間などいない。ならば、俺の勇者としての威光で人を導くしかないのだ。

魔物に尻尾を巻いて逃げ出すような勇者には誰もついてこないだろう。勇者タミフルは逃げ上手などと言われては、慕ってくるのはコソ泥ぐらいのものである。

だからこそ、俺はこの苦難に立派な面持ちで相對して、苦勞の末に魔物を打ち倒し、勇者としての第一歩を踏み出さねばならないのだが。

「……倒したいところなんですけど、生憎武器も無いので」

やっぱり逃げてしまった。

いや、わかつている。確かに名前にハクをつけるチャンスであるし、逃げたら元の世界に帰るところか、アイナリンドとの幸せな家庭すらも遠のいていくのはわかつているのだ。

だが、どう考えても素手でライオンを倒すのは無理だ。流石に勇者とは言つても、レベル1の素手で倒せるのはゲル状の不定形生物ぐらいのものであつて、間違つても鋭い牙を持つような相手には挑めない。その辺りは村長だつてわかつているだろうから、流石に無

茶な依頼だったと、素直に引き下がってくれるはずである。別に逃げたわけではなく、準備が出来ていないだけなので名に傷がつくこともないだろう。

内心で自分の明晰な判断にグツジョブと賞賛を送る。だが、村長は何故か落胆の色も呆れ顔も見せず、何故か口角を上げてこう呟くのだった。

「武器ならあります」

村長が案内してくれたのは、村の共有財産を管理する倉庫だった。かつて、傭兵を稼業としていた村人がいて、彼が戦死した折に村長が遺品を管理しているとのことだ。生活用品などに混じって、長剣と槍がほこりを被って投げ出されていた。

瓢箪から駒というか、藪蛇を突くというか。今更、やっぱ無理ですと言いつくすことも出来ず、なすがままに武器を薦められているわけだ。

中学生の頃、社会見学で歴史資料館に行ったときに日本刀を見たことはあるが、まさか自分が剣を握る日が来るとは思っても見なかった。

刃渡り1メートルほどの両刃の剣で、手入れするのが趣味とかいう村長のおかげですぐにでも使えるとのこと。試しに持ってみると、ずしりとした手ごたえがあるものの、振り回すだけなら何とかなりそうだ。

しかし、素人がいくら剣を持ったところでライオンには敵わない。槍も見てみたが、これでライオンと対峙しろと言われたら全力で拒否したくなる。

「……一応、剣だけ借りようか」

槍も悪くは無いのだが、ふたつの武器を携えていては動きも鈍る。槍のほうが長くて、魔物との距離を空けて戦えるという利点はあるのだが、なんせ目の前にある槍は木の柄の先に、金属の穂先を被せただけのお粗末な量産品であり、魔物の爪にさっくりと折られるの

が目に見えている。

剣は切れ味こそ期待できそうに無いが、とりあえず殴りつければそこその重量のおかげでダメージにはなるだろう。いっそ棍棒でもあればと思うが、無いものねだりを出来る状況でもない。

「これで魔物に対抗できますね」

アイナリンドが嬉しそうに言うが、素人が剣を持って魔物に突撃したら、ただの自殺に他ならない。

「……さあて、どうすっかなあ」

剣を握りながら、俺はどうすれば生き残れるかを必死で模索するのだった。

一度、用意された部屋に戻った俺は、学生鞆を開いてノートとペンを取り出した。

「魔物を退治しないんですか？」

不思議そうに小首をかしげるアイナリンドは、本気で俺が魔物に対抗できると信じているらしい。或いは、さっさと俺に死んでもらって、再び森の奥でヒキコモリ生活を送ろうという魂胆だろうか。

冗談じゃない。魔物と正面からぶつかるのは嫌だし、死ぬのも嫌だ。

せめてアイナリンドとの契約を履行してからでないと、死ぬに死ねない。

「……普通に考える。そう、あくまでも普通に、だ」

俺の最大の特徴——特徴が無いのが特徴とまで言わしめた普遍性。平々凡々な能力。それを最大限活用しながら俺は生きてきたのだ。

物事をごくごく普通の視点で捉え、斬新な発想を捨て去り、極めて現実的で真つ当な結論を導くこと。それが言わば、俺に出来る最高の選択なのだ。

目的は魔物の討伐。期間は早ければ早いほうが良し。武器はろくに使えない剣。それに、いつでも補給可能な水分。

あくまでも、普通に考えれば良い。理論は難解であるほど脆く、シンプルなほど強い。

魔物という存在を、まず現実的——体感できる存在に置き換える必要がある。アイナリンドが傷の手当てをしているときに、間近で俺も確認していたのだ。鋭利な爪を持つ、大型の獣だ。

動きは俊敏だが、ほうほうのていで男達は逃げる事が出来た。つまり、多少の隙はある。

大型の人を襲う獣——やはりライオンと位置づけるのが普通だ。魔物の討伐ではなく、ライオン狩りだと考えよう。だとすれば、正面から向かい合う必要など無く、解決策などいくらでも見えてくる。「……罠の設置。火攻め。まず動きを封じるならネット……ってところかな」

思考をいったん、縄文時代まで戻せば良い。縄文時代の人間は、石槍でマンモスを狩猟していた。

それには罠の存在が必須であり、逆を言えば罠さえあれば、マンモスのような大きな獣でさえ捕らえることができる。それに倣えば、落とし穴を作成してしまうのが一番なのだが、準備をするのも一苦勞で、正確な知識が無いので、どれだけの深さが必要で、仕留めるにはどうすべきかを知らねばならない。

「アイナリンド。まずは聞き込みだ。襲われた二人に魔物の特徴を……できれば絵に描いてもらってくれ。あと、猟師がいれば話を聞きたい。頼めるか？」

俺の言葉に、アイナリンドはふと笑みを漏らして頷いた。どうせ、勇者らしくなってきたか思っているのだろう。

「ユウシさん、ちょっと卑怯だけど勇者みたいですな」

「寝ぼけ頭に色気で釣ったエルフよりは正々堂々としてるつもりだな」

俺の軽い反撃にアイナリンドは「むーっ」と唸りながらも、特徴的なとんがった耳をピンと立ててはいない。最近、彼女の耳が立っているときは興奮状態であることを知った。

「今日是一緒に寝ませんからね」

それだけを言い残して出て行くアイナリンドの背を見送りながら、
ささと腕を組んで考える。

「なまじ怒ってないだけに、謝っても一緒に寝てくれないな……どうしたもんか」

魔物討伐よりも難題であることは違いなかった。

第八話：ゴゴルスの狩獵

俺の自慢は、大体のことを人並みにできるということだ。

まあ、逆を言えば人並み以上にできることなんて無い。以前に、中間テストで全教科平均点丁度をたたき出して驚かれたぐらいである。

そんな俺だからこそ、普通感覚というものをよく理解しているつもりだ。普通なんてものは、概念でしか存在しないこともわかってる。けれど、その概念を体现することができたなら、やっぱり俺のような存在になるんじゃないかと思うわけだ。

アイナリンドがこの村で非常に顔が利くのは助かった。

襲われた二人への見舞いも兼ねて訪れると、未だに恐怖があるはずなのに丁寧に魔物の特徴を教えてくれたし、村で一人しか居ないという獵師も、猪を捕まえるときに使う罠を譲ってくれた。

とりあえず、手に入れた情報をまとめると、魔物の体長は2メートルほど。四足歩行で、鋭い爪と牙を持っているらしい。

見た目としては「でけえ犬」との証言が一番わかりやすかった。

ゴゴルスという名前らしく、本来は辺境の地で縄張りを形成して狩りをする、極めて普通の動物に近い魔物だ。

ハイエナのようにタテガミを持ち、牙と爪が発達しているところなので、見たらすぐにわかるだろう。絵に描いてもらったところ、黒い毛皮に覆われた土佐犬のような動物に見えた。

「火を噴いたり、雷を落としたりはしないのか」

「そういう魔物もいるそうですけど、ゴゴルスは肉弾戦に特化していますね。前足で押し倒して、喉に噛み付いて窒息死させてくるようです」

なんというか、まんまライオンである。トラやライオンが喉に噛

み付く映像を見たことがあるが、あれを喰らえば間違いなく死んでしまう。ゲームでは体長十数メートルのモンスターだって鼻歌混じりに倒す俺だが、現実では2メートルの魔物に真っ向から挑むこともできない。

「猪用の罠、役に立つかな？」

「足止めにはなるでしょうけど罠力が違いますから、捕獲は無理でしょうね。そもそも、罠にかかってくれるのかもわかりません」

猪用の罠というのは、簡単に説明すると足の一本に丈夫なロープを結び付けてしまうというものだ。動けないまま衰弱した猪を棍棒なりで殴って仕留めてしまう寸法なのだが、ゴゴルスの罠力に耐える罠があるかは疑問である。

大型の獣をとるには落とし穴が有効だとも教えてくれたが、ゴゴルスが出没するのは背の高い草の茂った、街道沿いの草原である。えっちらおっちらと落とし穴を掘っているところを狙われるとひとたまりもない。

「……毒殺できないかな？」

「森の奥に、毒キノコは生えてますけど……魔物も動物ですから、食べて良いものと悪いものの違いは知っていますね」

「他に毒はないのか？」

「一応、人間を短時間痺れさせる程度の毒草なら、森に群生していますよ。ゴゴルスに効果があるかわかりませんが」

「……成分だけ抽出とかできる？」

「その辺りは得意分野です」

流星は森の民である。ゴゴルスに効果があるかはわからないが、今後何かを使う機会があるかもしれない。早速アイナリンドには毒草の神経毒抽出に出向いてもらうことにして、俺は猪用の罠を眺めながら、一つ決心をした。

「……まずは、実験だな」

アイナリンドが森から帰ってきたのは、三時間ほどした後であっ

た。

元々、森の植物の全てを把握しているアイナリンドである。村から一番近くに群生している毒草を見つけ出して、それをすり潰して汁を抽出。小瓶に入れてしまえば、お手軽な痺れ薬の完成となった。「経口が一番効果的です」

親切な処方箋つきだが、小瓶をゴゴルスの方に放り込むような余裕があれば、剣で一撃をポカリと加えているだろう。

「ユウシさんは、何か思いつきましたか？」

「まあな。一応、実験した感触だと大丈夫だと思う。村長にも相談したけど、人手を一人借りることになった。三人で討伐するぞ」

三時間あれば、俺だって多少なり動く。

幸い、必要なものは全て揃っていた。村長に頼んだところ、それらの全てはあっけなく手に入ったし、作業も楽なものだった。

「明日、倒してしまおう」

俺の言葉に、アイナリンドはぱあっと顔を綻ばせて、何を思ったのか俺に飛びついた。

「ユウシさんっ。今の言葉、とっても勇者らしいですよっ！」

「そうかそうか。じゃあ、今晩は勇者の英気を養うためにも、一緒に寝ることを提案する」

「わかりましたっ。今日は特別に足を絡ませちゃいますっ！」

アイナリンドは割と単純な性格なのが嬉しい。胸を揉む日もそう遠くないと思うと、俺のやる気もうなぎのぼりである。

さて、翌日。約束どおりにアイナリンドが俺に甘えるようにくっついて眠ってくれたおかげで、肌の色艶もよく、絶好の討伐日和である。

勿論、今日で俺の命もお終いかもしれないという恐怖はあるのだが、隣に美人が居るといえるのはそれだけで心強く、俺は意気揚々と荷物を抱えて、早速準備にかかる。

「おはよーッス」

アイナリンドと朝食を摂っていると、部屋に一人の男が現れた。まだ若くて、俺より一つ年下だという、村人のドレイク君である。くすぶった金髪は天然パーマでだらしく伸ばしており、垂れ眼と無精ひげも相俟って怠け者に見える。実際、かなりの怠け者らしくて村八分の一步手前らしいのだが、襲われた二人とは仲が良かったらしく、何か手伝えないかと申し出てくれていたらしい。

人となりはともかく非常に使える存在だったので、ありがたく申し出を受けて、この危険な討伐に参加してもらっているのだ。

「よろしくな、ドレイク」

「おうよ。まかせろい」

気さくな男であることには違いなく、若さゆえの血気盛んな様子から見ても、土壇場で尻尾を巻いて逃げ出すということも無いだろう。

用意は揃った。気持ちはまだ落ち着かないので、死ぬ前だからと思いついてアイナリンドの胸に手を伸ばすと「勝ってからです」とピシヤリと手をはたかれた。

勝てば触って良いということなのだろう。そうならばもう、やるしかない。

「行くぞ。目標、ゴゴルス。勇者一行のお出ましだ！」

大見得を切ったのはいいものの、作業自体は地味なものだった。

昨日、村長に頼んで頂戴した藁を、せっせと束ねて作った藁人形。その上に、襲われた二人の服を被せた案山子を設置するだけである。べつとりと血のついた服は、いわば撒餌である。野生の動物は血の匂いに敏感だという話を猟師から聞いて思いついたのだ。これでゴゴルスは案山子を発見してくれるだろう。

藁人形も、村人謹製であり、遠目で見ると人のようなものである。服を被せて、草原に立ててしまえば人が立っているように見えるだろう。

う。

逆に俺達の服には、アイナリンドが抽出した毒薬を塗りつけてある。匂いはややきついが、俺達の体臭を消して、仮に見つかっても襲い掛かるのを躊躇させるという役割である。

村人が襲われた地点に到着して、さつさと藁人形を立てる。そして、そのまま俺達は一目散に村の入り口付近まで退避。草を編んで作った隠れ蓑をかぶり、後はひたすら待つ。ここまでの作業、僅かに五分である。

「……アイナリンドは戻ってる。もう用事は無い」

「いえ、居ますよ。私は、勇者の最初の仲間ですから」

義理堅い仲間を持って光栄である。ちなみにドレイク君には役目が残っているので帰ってもらうわけには行かない。まあ、本人はやる気十分であり、俺達のやり取りを横目に、しっかりと息を殺しているのだが。

「……仕方ないか。じゃあ、これより待機だ。ドレイク、タイミン
グは任せる」

「おう。俺の一世一代の大勝負だ」

にかつと笑うドレイク君は、なるほど確かに怠惰な性格なのかもしれないが、アクシデントや突発的な出来事には滅法強いタイプの男である。

元々、単純作業が苦手であるらしく、それ故に農作業を繰り返す生活に馴染めずにいたようだ。そのために怠け者として村人達からは煙たがられ、家族も居ないために孤立しかけていたという。

そんなドレイク君と唯一親しくしていたのが、ゴゴルスに襲われた二人だった。村一番の剛力と、交渉上手という二人は異世界から来た俺にも気さくに接してくれた好漢で、街との交易も担うほどの信頼も得ていた。ドレイク君は二人の世話になりつつ、時に交渉術を学んだり、荷物運びなどの雑用も手伝っていたという。話をしていると、確かに怠け者ではあったのだが、頭の回転はむしろ早く、理解力も高かった。

今回のゴゴルス討伐は、彼にとって敵討ちでもあるし、何よりも非日常という側面が大きく、異様なほど乗り気なのだ。

村長に手伝いを頼んで、まるで生贄のように紹介されたときはどうしようかと思ったが、使いどころさえ間違えなければ実に優秀な人間だというのが俺の評だ。

手先も器用で、藁人形を遠目に見れば本物の人間と勘違いするような躍動感を持っているのも、彼のセンスが高いことを窺わせている。

決して魔王に立ち向かうような戦士にはならないだろうが、彼の存在は貴重だ。是非、この一軒が終わった後に仲間になるように誘ってみることにしよう。

さて、脳内でドレイク君の評をしている間にも、五感は鋭敏に研ぎ澄まされていた。

如何せん、魔物との勝負は初めてであり、もしかしたら背中から息を殺して迫ってくるかもしれないという恐怖もあるのだ。実のところ、ドレイク君について考えていたのも恐怖を紛らわせるためだけであり、ただでさえ待ちの一手であるから、時間が過ぎるのも遅い。草で編んだ隠れ蓑はとにかく蒸して、汗や藪蚊の攻勢にも難儀である。

しかし、真っ向から相對するよりはよほど安全であるし、これ以上の手を思いつかなかった。よくも悪くも俺は普通で、奇策や妙計とは縁が無い。どこかの誰かのように弁舌で煙に巻くこともできないし、ただでさえ相手は言葉を解さない魔物である。

作戦開始からどれだけの時間がたったのだろうか。相手が出てこなければ意味が無いので、長期戦を覚悟しているのだが、できればさっさと出てきて欲しい。いや、失敗を考えれば一生出会いたくも無いのだが。

作戦の失敗が死に直結しないようには考えているが、それでも不

確定要素も多い。逃げ遅れれば死ぬだろうし、そうならば童貞も捨てずに一生を終えるということになる。どうせ死ぬなら一花咲かせようかとアイナリンドを見るが、今触ったら確実に痺れてしまう。作戦の都合上、毒を服に塗ったのが裏目に出たか。

だがしかし、ちらりと見たアイナリンドのとんがった耳がピクリと動くのを見て、ふと我に返る。

アイナリンドに限らず、エルフというのは耳が良いらしい。アイナリンドが俺を見て、静かに頷く。

来たのだ。ライオン並の凶暴な魔物が、すぐ傍まで来ている。

隣に並ぶドレイク君もアイナリンドの視線に気付いたらしい。ゆっくりと頷き、息を殺して藁人形に注目し始めた。もつとも、草むらに伏せているので視認することは出来ないのだが。

生唾を飲み込む音さえたてることが怖くなり、俺はじつと身を固めて待つことしか出来ない。

何度も大丈夫だ、大丈夫だと頭の中で繰り返しながら、思わず叫んでしまいそうになるのを堪える。

そして、ゴゴルスの低い唸り声が聞こえたときには、もうほとんど意識がはつきりしていなかった。

どかつ、とゴゴルスの巨体が藁人形を押し倒す音が聞こえる。刹那、ドレイク君が身を翻し、真っ直ぐに藁人形を見据える。俺も慌てて立ち上がる。

「いけっ——！」

もうもうと粉塵舞う中、藁人形だと気付いたゴゴルスがこちらを振り返る。

だが、時すでに遅いだ。バチツと音がしたと思った瞬間に、轟々と炎が爆ぜ、ゴゴルスが吹き飛んだ。

間断なく爆発音が連鎖して、一拍遅れて熱波が通り過ぎていく。大爆発と呼ぶに相応しい光景だった。

「よっしゃあ！」

思わず声をあげて、ゴゴルスの様子を確認する。熱と衝撃を爆心

地で直撃したのだろう。ぼとりと草原に落ちて、ぶすぶすと煙を上げてもがいている。

「タミフルさん、トドメだっ！」

ドレイク君の動き早い。俺に声をかけるや否や、手槍を片手にゴゴルスに殺到する。俺も慌てて腰に差した剣を引き抜いて、ゴゴルスめがけて突進した。

衝撃波と熱で一時的に戦闘不能になっている。勝負を決めるならここしかなかった。

「おおおっ！！」

先に突撃したドレイク君の槍が、ゴゴルスの喉にぶすりと突き刺さり、血飛沫があがり、ギャアギャアとゴゴルスが鳴く。

生き物を殺すなど、俺には初体験に近い。虫ならそれこそ、夏場の蚊を殺虫剤で問答無用に毒殺してきたが、四足歩行の大きな獣である。だが、躊躇いよりも恐怖が勝った。

「せええあああっ！！」

裂ぱくの気合というよりも、どちらかというと情けない金切り声になってしまったが、気合一閃、ゴゴルスの脳天めがけて剣を振り下ろす。

ゴン、と鈍い衝撃が両腕に伝わり、ゴゴルスが短いうめき声と共にぱたりと倒れる。剣はどうやら刃がしっかりと食い込まなかったらしく、単なる鈍器としての効果を発揮したらしい。つまり、脳に強い衝撃を与えたことによって、撲殺ないし脳震盪による気絶ということだろう。

「う、おおおッ！」

まだ殺しきっていないかもしれない、と思えば身がすくむ。怖くなってさらに剣を振り上げ、ゴゴルスの腹に突き刺した。

いや、腹を切っただけでは足りない。確実に息の根を止めなければ、最悪返り討ちになってしまう。

「ドレイク、刺せ。刺しまくれッ！」

「おおおりゃあああッ！！」

後から考えれば、すっかり半狂乱だったのだろう。

気付いたときには、とうに事切れているゴゴルスを、血まみれの俺とドレイク君が見下ろしていた。

血を洗い流すのにも、俺の魔法は役に立つ。

仕留めたゴゴルスの処理をアイナリンドが村人に頼みに行く間に、俺とドレイク君は村の入り口で身を清めていた。

「いや、しかしすげえなあ。ほんとにあのゴゴルスを仕留めちまったよ、俺達」

興奮冷めやらぬ様子のドレイク君と俺は、わいわいと盛り上がりながら水を頭からかぶる。

「ふう……けどよお、やっぱりよくわかんねえよ。なんで爆発が起きたんだ？」

ドレイク君が不思議そうに首をかしげる。そりゃあ、そうだろう。ドレイク君の魔法は、大爆発を起こすようなものではない。小さな小さな、ちょっとした火花を発生させるだけのささやかなものがある。

「あれは、粉塵爆発って言ってな。実験しただろ？」

「おう、けどやっぱりよくわかんねえ。どうして小麦粉が爆発するんだよ」

ここいらで、仕掛けを説明しておかねばならない。

藁人形の中に、たつぷりと小麦粉を詰めておいたのだ。しかも、地面にも大量に盛っておいた。

ゴゴルスが藁人形を押し倒した瞬間に、中に詰めてあった小麦粉が噴出して、地面に蒔いてあった小麦粉も舞い上がった。

粉塵爆発とは、その名のとおりに粉塵が爆発することだが、小麦粉のような細かい粒子が一つ一つ燃えて、それが連鎖的に繋がることによって大爆発を引き起こす現象を指す。

濃度の調整と火種の確保が非常に難しいのだが、濃度は実験を繰り返すことによってある程度の成功率を確保。火種はうつてつけの魔法を使えるドレイク君のおかげで対処できた。おまけに小麦粉は村の特産品であり、ゴゴルス討伐に絶対必要だとアイナリンドに説明させると、流石に生贄に対してのせめてもの慰めのつもりなのか、村人達が寄付してくれた。

果たして、ゴゴルスを仕留めることが出来るかという不安もあったのだが、一時的に戦闘不能にさせることはできたようで、後は手持ちの武器で止めを刺せば良い。

不確定要素も多かったが、無事に成功したので何よりである。

「……まあ、要するに小麦粉の近くで魔法を使うなってことだな」
俺の端的な説明に、ドレイク君は一応の納得をしたようで、怠惰という割には引き締まった肉体を惜しげもなく晒し、水で清めながら笑った。

「タミフルさんはすげえなあ。流石は勇者様だ」

「まあ、マンガで知った話だったんだけどな」

別に、俺だけが知るような大それたものでもない。意外性が高いので、マンガなどでは特によく利用されている現象であるから、俺にとってはさほど珍しいものでもなかった。

言っちゃ悪いが、粉塵爆発はとっくの昔に普通の発想である。だが、普通であることに關しては自負するところのある俺である。堂々と使わせていただいたのだ。

「……まあ、何はともあれ……勇者様の第一歩ってところか」

血を洗い流し、人心地がついたところで、ようやく俺にも実感が沸いてきたのだろう。

ぺたんと座り込んで、そのまま眠りとも気絶ともつかない、深い闇の中に落ちていった。

第八話：ゴゴルスの狩獵（後書き）

できれば黒衣で使いたかった粉塵爆発ネタ。

ちよつと高木が強くなりすぎたので、使わず仕舞いでした。

尚、粉塵爆発の威力や、発生確率。正直なところ、よくわかってません。

自分でやってみたところ、目の前で小爆発が起きました。

ごつつい量の小麦粉を使って、たまたま上手くいった例、とでも認識してくださいませ。

ドレイク君の元ネタは当然「仮面ライダーカブト」から、仮面ライダードレイクです。

第九話：ステピナ村後日譚

さて、これから少しは後日譚という形式になる。

先に現在の状況を言えば、ゴゴルス討伐より三日の後。街への交易に便乗して荷台に乗っている状態だ。

新たな旅立ちに胸弾むといえはそうなのだが、今一度、これまでの経緯を振り返ってみたい。

まず、何よりも最初に説明すべきは、ゴゴルスとの決戦の結果だろう。

ゴゴルスを粉塵爆発により吹き飛ばし、滅多刺しにして仕留めたところまでは記憶があるのだが、何せ四本足の動物を殺したのは初めての経験であり、当然ながら動物愛護を基本とする日本に生まれ育った俺は、強烈なストレスに見舞われたらしい。勿論、死への恐怖という側面も強い。

結果、緊張の糸が切れた瞬間に気を失い、村長宅に運び込まれた。目を覚ましたのはその日の晩であり、ぼんやりとした表情で居間に出てみると、喜色満面の村長に迎えられた。

貴方様こそ、まさしく稀代の勇者様だ。というありがたい言葉で歓迎され、俺とアイナリンド。ついでにドレイク君を囲んでの宴会が始まったのである。

村一番の強力しつじきと知恵者が揃って襲われるという惨事に、正体不明の自称勇者と、村一番の怠け者が立ち上がって勝利を収めたのだ。アイナリンドは村でも顔が利く有力者ではあるが、今回の討伐においてはほとんど出番らしきものがなく、本人も努めて俺の力であると吹聴した結果、ほぼ全てが俺の手柄となった。

本来はほぼ、ドレイク君のおかげと言って良い。火花を起こしたのも、勇猛果敢にゴゴルスに突撃したのもドレイク君である。

しかし、そのドレイク君も俺を称えてしまうのだから、もう俺の力での討伐という雰囲気なのである。

普段の俺ならば謙遜して、ドレイク君の手柄だと主張するのだが、今回ばかりはそういうわけにもいかない。辺境の地で、相手も野良魔物一匹ではあるが、勇者としての華々しいデビュー戦なのである。目標が魔王討伐であり、そのために必要な名声を考えるならば、甘んじて俺の手柄としてしまうほか無かった。

「いやはや、流石は勇者様。傷一つ負わずに魔物を倒すほどの実力があれば、魔王を倒す日もそう遠くないでしょう」

村長の世辞の尽きぬまま、宴もたけなわとなる。気絶していた俺は兎角、アイナリンドとドレイク君が疲労と緊張によって眠気に苛まれたからだ。

「ドレイクには俺のベッドを貸してやるよ。アイナリンド、今日は一緒に寝るぞ」

よほど疲れていたのだろうか。ドレイク君は深く考えずに頷き、アイナリンドは安心した表情で俺の背にもたれかかった。

約束どおり、胸を触ろうかとも思ったのだが、アイナリンドの表情があまりにも幸せそうだったので、大人しく同衾だけで我慢しておいた。

明けて翌日。村はすでに日常に戻りつつあった。

俺はそれまでの正体不明の自称勇者から、村を救った勇者様というジョブチェンジを華麗にこなしており、アイナリンドへの信頼も一段と増し、ドレイク君への村人の目も柔らかくなっていた。

ゴゴルスは既に猟師に解体され、肉は食えないので油を搾り取り、骨や爪、牙は何かしらの生活用品へと組み込まれるのだろう。見事にばらばらになっていた。

「毛皮は、剣や槍で突いた穴だらけで使い勝手が悪いですな。おまけに焦げているので見栄えも悪く、加工は難しそうです」

猟師はゴゴルスの毛皮で、俺に外套でも作ろうとしてくれていた

そうだが、毛皮がぼろぼろだったので却下。その代わりに、下手な鉄よりも硬いと名高い、ゴゴルススの牙を頂戴した。ゲームならばこれが素材となつて武器になったりするのだろうが、そうそう都合よく物事は進まないものである。

無論、凶悪な魔物の鱗や爪、牙は鋼鉄よりも鋭く、強固であるとの話であり、それらは武器の素材としても重宝されているそうなので、旅を続けているうちに、そういう武器を装備する日が来るのかもしれない。もっとも、自分で素材を集めるかは、甚だ疑問であるが。

俺達はゴゴルスに襲われた二人を訪ね、傷の具合を尋ねたり、仇を討った報告などもした。殊、二人に世話になつていたドレイク君は感慨もひとしおなのだろう。村長の前では謙虚だったのが嘘のように、自分が役に立ったことを報告していた。見た目は俺よりも老けているのに、こういうところは子供っぽい。

二人の男も相好を崩して、弟分を褒めた。

「そうか、そうか。ドレイク、よく頑張ったな。おめえはやっぱり、やりやあできるヤツだ」

「ふむ。ドレイク——君にならば、僕達の仕事を任せても大丈夫そうだ。アイナリンド様、タミフルさん。僕達はこのとおり、怪我で動けません。ドレイクならば、街への道も、交渉の方法も知っていますので、交易を任せようと思つています。まだ不安も多いので、どうか街まで、彼についてやってくれませんか」

これで、俺とアイナリンドの本来の目的である『次の街までの移動』も何とかかなりそうである。ゴゴルススの討伐におけるドレイク君の働きを見れば、彼が実に優秀な人間であることはよくわかる。

俺とアイナリンドは二つ返事で了承して、ドレイク君も責任感の強い、本来の凛々しい顔で頷いた。

かくして、またあくる日の朝。

上機嫌の村長は、謝礼という名目で路銀を捻出して来ていた。

「ゴゴルスの爪や骨は、そこそ値打ちがありましたな。村の危機を発展に変えていただいた御礼です」

本来ならば討伐した俺が、ゴゴルスを討伐した報酬を全て受け取るのが筋であるが、生憎とゴゴルスの価値も知らず、それを利益に変える方法も知らなかった。おまけに、村の財産である小麦を思いっきり爆発させたので、討伐の折には村にゴゴルスの死体を提供すると約束していたのだ。

牙と路銀はせめてもの見返りということで、まあ、実際には村の利益のほうが大きいのだが、欲張っては折角の名声も水の泡である。ちなみに、俺の魔法はやはりペットボトルに水をためるだけなのだが、大爆発の音量は村にも届いていたらしく、俺は「二つの魔法を使いこなす勇者」だとか、「実は大爆発こそが魔法で、水は魔法ではなくペットボトルというマジックアイテムの効果なのではないか」という憶測が飛び交っている。

訂正しようかとも思ったのだが、強い勇者だからこそ人はついてくるものである。敢えて訂正はせずに、放置しておく方向にしておいた。ちなみに、原理をアイナリンドとドレイク君に説明してみたところ。

「ユウシさんの知識があればこそその大爆発です。これぞ勇者様の御力ですね」

「まあ、よくわかんねえけどスゲエよ」
とのことである。

科学力が現代よりも低いのは、村の様子を見れば十二分に把握できるが、そもそも今回の件も運良く爆発してくれたので、今後とも粉塵爆発に頼るということはできないだろう。

威力も、極めてライオンに近い、いわば猛獣レベルのゴゴルスだから通用したように思う。硬い鱗に覆われたドラゴンなんぞが登場した日には、小麦粉をぶちまけると同時に、俺の身体も飛び散っている可能性がある。

「これで百人力ですね」

「……今回限りのことだけだな」

俺の言葉にしょんぼりとするアイナリンドには悪いが、迂闊に博打に頼って身を滅ぼすような真似は、普通するものではない。

あくまでも普通を信念とする俺には、これ以上、粉塵爆発に頼ることはできそうもないのだ。そもそも、ドレイク君と小麦粉。それに環境が整わないと使えないので、それならば似たような魔法を使える人材を確保するか、火薬でも手に入れたほうが手っ取り早い。

粉塵爆発とは、つまり限定された状況での、緊急手段に過ぎない。鞆の中に入っていた教科書によると、爆発の威力とは、燃焼物が気化するかどうかで大きく左右されるらしい。

小麦粉は燃える——つまり、爆発しても、炭化してしまうのに対して、黒色火薬はガスを発生させる。この膨張エネルギーこそが、爆発の最大の威力となるのだ。

「なるほど。さすがは勇者様。賢者をも凌駕する知識ですつ！」

「まあ、よくわかんねえけどスゲエよ」

ちなみに、俺自身もよくわかっていないことは秘密だ。

あくまでも教科書の欄外コラムによる情報であり、詳しいことはわからない。とりあえず、粉塵爆発は火薬の爆発よりも威力が低いので、火薬が用意できるならばそちらのほうがいいとのことだ。うまく爆発してくれるとも限らず、威力も低い攻撃方法を戦法に取り入れるなど、我ながら無茶をしたとさえ思う。

「火薬か……この世界ではもう存在してるのかなあ」

「うーん、聞かないですねえ。並の爆発ならば、そういう魔法を使えるのを探すほうがいいですから」

「だなあ。俺の魔法も鍛えれば、大爆発になるかもしれない………先は相当長いけどよ」

どうやらこの世界では、科学の研鑽を積んでいくよりも、魔法に頼るという気持ちのほうが強いらしい。出来るかどうかわからない科学より、きつと存在するであろう魔法を探すほうが手っ取り早いということか。実際に、爆発——燃焼に係る魔法は割と多いの

だとか。

ドレイク君のように小規模な爆発や、爆発せずにただ炎を出すものを含めると、魔法の中ではメジャーで、水はあまり多くないらしい。俺の魔法が有用というのは、まあ本当なのかもしれない。

さらに明けて、翌日。つまり、ゴゴルス討伐より三日後。旅立ちの朝を迎えている。

「よおし、そいじゃ出発するかあ」

ドレイク君が馬車の御者席に座り、村の特産品である小麦粉や、ゴゴルスの骨。他には猟師が仕留めた猪の皮などが積まれた荷台に俺もどつかりと腰を降ろす。アイナリンドも俺の隣に座り、見送りに来てくれた村長に改めて礼を言われた。

村としても若い二人が動けなくなる今回の事件は痛手であつたが、ゴゴルスの素材によって多少なり利益も出て、ドレイク君もこれからは村のために働いてくれるとなれば万々歳なのだろう。俺を生贄にしようとしたことへの負い目もあつたのか、ゴゴルスを倒したときに使った剣を譲渡してくれた。

「御武運をお祈りしております」

少なくとも、最後の言葉が嘘でなかったと思えば、命がけで戦つた甲斐もあつたかと思う。

「……まあ、なるべく戦いたくないけどなあ」

ぼそりと独り言を呟くのと、ドレイク君が手綱を握るのは同時だった。

がらがらと馬車が動き始めて、手を振る村長が遠ざかっていく。

「ユウシさん。これでようやく、ちゃんとした旅になりますね」

「……多分、これがいわゆる開幕当初のイベント戦って感じなんだろうなあ。もうお腹一杯だけど」

何はともあれ、ステビナ村には世話になった。

勇者という名目には、俺の能力はどう足掻いても追いつけない。

それでも、小さな村の危機を救ったことは、少なからず俺にプラスになったと思う。精神的にも、今後についても。

勇者の旅は、まだまだ始まったばかりなのだろう。

第九話：ステヒナ村後日譚（後書き）

さあて、ようやく本格的な旅の幕開け……となったのかなあ？

タミフルのレベルが2に上がった！

第十話：最初の街

馬車旅の、何たる素晴らしいことか。

がらがらと音を鳴らしながらのんびりと進んでいく馬車は、正直なところ自動車に及ぶべくもないのだが、徒歩で山を移動していたときに比べると天と地の差がある。

まず、当然ながら歩かなくて良い。

歩くことと座っていることの差の大きさは、あの辛い最初の旅を経験していなければわからなかっただろう。少々揺れるのでケツが痛いのだが、両足が棒になることを思えばなんということはない。

そして、荷物を担がなくていいこともまた、大きな利点である。徒歩で大荷物を担ぐだけで体力はどんどん消耗していったのだ。

その重荷から解放されるのだから、乗り物というのがいかに人類の繁栄に繋がっているのかが実感できた。

「のどかですねぇ」

「そうだなあ」

アイナリンドと二人、荷台でぼうつと景色を眺めながらの旅。これが打倒魔王を目標に掲げる勇者一行だと言っても、誰も信じないだろう。

だが、基本的に旅というのは移動が目的であって、その移動を馬にまかせっきりとなれば、やる事がなくなるのだ。

ともすれば暇とも言えるだろう。

「……ゲームでもありゃなあ」

「しりとりでもしましょうか」

「……できねえだろ」

できないわけがないだろう、という顔でドレイク君が俺を見るが、実は無理なのである。

よくよく考えてもみてほしい。俺は異世界人であり、当然ながら言語も文化も違うのだ。一見普通に喋っているように思えるだろう

し、事実、俺もアイナリンドも普通に喋っているのだが、その実、ちよつとした仕掛けが施されている。

俺を召喚したアイナリンドの夢見の儀式は、確かに特殊能力も何も付与されていないように思えるのだが、コミュニケーション能力だけは、しっかりと整えられているのである。

理屈はよくわからないが、俺が召喚された時に、俺は日本語を喋っているつもりで、この世界の言語を喋っているように設定されているようなのだ。当然、俺の感覚ではアイナリンドやドレイク君が日本語を喋っているように聞こえるのだが、実際は俺が異世界語を喋っているのである。文字なども同じ要領で設定されているらしく、この世界でも自由に読み書きができる。

どうせなら超絶無敵パワーを与えて欲しかったのだが、冷静に考えると会話や筆談ができなければ、そもそもアイナリンドとまともなコミュニケーションをとることが出来ず、未だに森の中にいただろう。そう考えると、このコミュニケーション能力の強化は実にありがたい。

そういうわけでしりとりは出来ないのだが、やらねばならないことはあった。

いわゆる、この世界の常識を知るといふ、七面倒くさい作業である。

アイナリンドから一通りの知識を得ているものの、なんせ彼女は御歳百超のヒキコモリであるからして世情や流行に疎い。実際、妹が拉致されねば魔王打倒を掲げるようなこともなかったであろうし、俺もゴゴルスを粉塵爆発で仕留めるような危険を冒すことも無かった。

とりあえず、街への交易で多少なり世情に明るいドレイク君がいるので、この世界の理ではなく、実際に生きる上で必要な知識を得ようとしているのだ。

「まあ、まずは金だな」

これはドレイク君と俺。そしてアイナリンド三者同一の意見であった。

実際に村長に路銀を渡されてはいるが、それがどれだけの価値があるのかもわからない。通貨を聞けば、貨幣それぞれにレートがあって、現代日本のように円という単一通貨で全てが解決するわけではないことを知った。

ドレイク君の説明を俺が噛み砕いて理解したところ、要するに金貨、銀貨、銅貨の三種類があり、さらにそれも細分化されている。細かい名称まで一々覚えるのも面倒なのだが、それぞれに三種類ぐらいあって、その中でも銀貨の価値は差が大きい。

とりあえず、銅貨一枚で百円玉一枚。銀貨も一等級で一万円。二等級で五千元。三等級で千元。金貨は十万円から五万円ほどの間であるとか。この辺のレートは、おそらくそうそう値段に変化の無い食糧やら木材やらの値段を基準に俺が適当に割り振ったものなので信憑性は低いのだが、とりあえず当たらずとも遠からず、といったところだろう。

確かに俺はこの世界では赤子ほどの知識しかないのだが、それはあくまでもこの世界限定の話であり、元の世界と基準をある程度合わせてやることにより、進んだ科学技術や知識を知る、実に合理的な考え方をする賢人になるという寸法である。まあ、実際に賢人になるかは兎角として、そうでも思っておかねば勇者という自称に耐え切れなくなりそうなのだ。

金銭価値に関しては、大まかなレートを確認して、あとは金属などの価値が元の世界よりも高いことを知れば、ほぼ完璧に近い形となった。元々、金銭という存在はこっちもあっちも同じ使用方法なのである。硬貨の種類を覚えるのには時間はかかるが、それさえしてしまえば、大した問題はなくなるだろう。

ちなみに、村長が渡してくれた路銀は、日本円換算で十万円ほど。ゴゴルス討伐の代金とも考えれば、かなり安いのだろうが、勇者とは究極、無償で人助けをするという職業であるから、そう考えれば

礼金が出ただけありがたいというものだろう。

「ほかに必要な知識はあるか？」

「んー、まあ。追っ付け説明していくよ。俺も町で五日ぐらい居るつもりだしな」

とまあ、ドレイク君は説明が苦手なのか、無精ひげを指でこすりながら馬車を操作する。

なんにしても、十万円は大金なのだが、アイナリンドと二人で旅をしていくのだから、この金額で魔王討伐まで乗り切れるはずがない。やはり、金を稼ぐ必要は大いにあるということだけは確定事項のようだった。

旅は順調だ。

例によってアイナリンドとの同衾に期待したのだが、流石にドレイク君の前でくつついて眠るわけにも行かず、また、ステビナの森のように安全というわけでもない。焚き火を管理する不寝番の設置が必要不可欠であり、馬車の操縦があるドレイク君には眠ってもらい、俺とアイナリンドが交替で不寝番を務めた。

幸い、魔物が現れることも無く、俺は暇だったので携帯アプリのゲームに勤しんでいたのだが、二日目にして電池切れを起こして完全無欠の暇人になり、アイナリンドの寝顔を堪能する以外に道が無くなった。

暇になれば人間、どうしても色々と考えてしまうものなのだが、俺は割と図太い神経をしているらしく、次元を隔てた故郷を懐かしみこそすれど、残してきた家族や友人の心配をすることはない。なぜならば、どう考えても俺よりも安全な場所に居るからだ。こっちは既に魔物と勝負して、一歩間違えば死んでいるような身である。人の心配をする余裕などあるはずが無い。

どうやら都合の良い考え方しかできないようで、真剣にアイナリンドの胸のサイズを目測で計ろうとするぐらいであるが、それも小一時間もすると飽きてくる。

「む、むむむ……」

結局俺は、余った時間で魔法の鍛錬に勤しむことにした。魔法という不思議な力の原理は、おそらく現代日本の科学力をもつてしても解明できまい。水がこんこんと湧き出るという水芸も真つ青の超常現象を意志一つで行えてしまうのだから。

しかも恐ろしいことに、この魔法というのは鍛えれば強化ないし進化するものだという。単なる水分補給係に留まらないためにも、魔法の向上は勇者たる俺にとって最重要課題の一つでもあるのだ。

「ぬう！」

気合一闪、念力のつもりでペットボトルに意識を向ける。途端に魔法が発動して、ペットボトルにみるみるうちに水が湧き上がってきた。

一口飲んでみるが、味に変化らしい変化はない。やはりお馴染みの炭酸飲料を出すという荒業はできないようだった。否、或いは修練の結果にはたどり着くのもかもしれないが。

「いやいやいや」

冷静に考えれば、コーラを出したところでメリットらしいものがない。飲む分にはいいのかもしれないが、それで魔王様を倒せれば苦勞が無い。

やはり、少しでもダメージというか、攻撃魔法のような扱いができるほうがいい。折角出した水をペットボトルから捨てて、改めてのチャレンジである。

「てやつ！」

今度は意志に方向性を持たせてやることにした。結果、一口飲まずとも、その変化がわかった。

「ぬるっ！」

ペットボトルに水が湧き出る途中、ずしりと重くなると同時に生温さが手から伝わってくる。本来は熱湯か、水蒸気まで温度を上げるつもりだったのだが、流石に無理があったようだ。だが、温度の変化は可能らしい。普段は飲んでいて冷たいと感じるレベルなので、

5 から10 の間だと思うのだが、これは明らかに20 ほどはある。

「ん……この調子でやっていくか」

とりあえず、飲み水以外にも道はありそうだ。温い水は正直、あまり役には立たないのだろうけれど、これが60 を超えれば、けっこう熱いはずだ。冷たい夜に湯たんぽとして使うもよし。お茶を沸かすにしても手間要らずである。

そんなこんなで、割と楽しい三人旅も目的地に着いたことにより、終わりを迎える。

ステビナ村より西に五日。サカエという街である。

名前のとおりに栄えているのかと思ったが、別段そういうわけでもないらしく、良質とは言わないまでも鉱山がある故にそこその発展を遂げた街らしい。人口およそ三万人。八割がたが人間で、中にはドワーフやフェルプルなどもいるようだ。

「じゃあ、二人とも頑張れよ。短いけど一緒に旅が出来てよかったよ」

ドレイク君はこれから街の商館にて小麦や特産物売り、必要なものを買ひ揃えるらしい。三日ほどの滞在らしいが、俺達はいくら情報を集めたり、金を稼ぐ手段を考えたりで忙しい。ゆつくりと街を案内してもらおう手間をかけさせるわけにもいかず、こちらものんびりはしていられない。

「ドレイク、ありがとう」

「貴方には才があります。村のために、よく働いてくださいね」

俺の感謝の意と、アイナリンドの激励を受けて、ドレイク君は笑顔で街へと消えていった。

頭がよく回り、まだ息のあったゴゴルスにも果敢に挑んだ性格や、旅慣れた様子からしても、実に頼りない勇者一行に加わってもらいたかったのだが、やはりそういうわけにもいかないだろう。

「……しゃあねえよな。よっしゃ、アイナリンド。まずは宿を探して、金を稼ぐ手段や、今後の目標を考えよう」

「そうですね。さしあたって、仲間を得ることが最大の目標でしょうか。私やユウシさんは、どちらかというと前線には向かないです」

アイナリンドも俺達の弱点をよく把握している。

確かに現代人としての知識や、エルフの薬草学などは実に有意義なものなのだが、魔物の王様を倒す直接のものとはなりえない。つまり、某国民的ロールプレイングゲーム、第三作目というところの、戦士や武闘家という存在が必要不可欠なのである。ついでに、魔法使いも欲しい。

「アレで言えば、アイナリンドは僧侶っぽいなあ。俺は……転職すれば賢者つてところか」

別に遊び人のような人生を送ってはいないのだが、ステータス的にはそれが最も近い。

「よくわかりませんが……まあ、まずは街を歩いてみましょう。宿も探さないといけませんし」

アイナリンドが微笑む。確かにまずは寝床を確保しなければならぬ。

荷物を抱えて、街の中へと足を踏み入れる。流石に活気に溢れており、これならば金を稼ぐことも出来そうだと得心しかけたのだが、どうやら様子がおかしい。

活気があると思ったのは、人々がしきりに声を発していたからなのだが、それが商売や談笑によるものではなく、どちらかというと剣呑としたものだ。否、不穏などよめきと言っても差し支えないだろう。

不思議に思っ、人が特に集まっている場所に近寄ってみる。どうやら高札が出ているようで、この国の文字で討伐隊結成という見出しがついていた。

「……ふむ」

要約すると、魔王軍の前線とは遠く離れたこの地で、魔物の一斉蜂起が起きているという。

しかし、魔物に対する備えの薄いこの街は満足な討伐隊も結成できない。したがって、傭兵を雇い入れ、彼らに討伐を依頼するという話であった。

つまるところ、この高札は討伐隊結成を報じるものではなく、討伐隊への参加を呼びかけるもののようだ。資格は武器を有する者で、志し高き者。褒賞も出るという。

なるほど、この世界では魔物を討伐することを生業という傭兵が居るのだらう。俺も攻撃魔法が使えるれば金を稼ぐことが出来ただろうし、少しは勇者らしい振る舞いも出来たのに。

「いや、これに応募する人間なら、貴重な戦力になるんじゃないかな？」

ふと考えて、腰に帯びた剣を見る。なるほど、武器はここにあるわけで、志もまあ、打倒魔王様という高すぎるくらいがあるほどのものを抱えている。後方支援が得意な魔法であることを説明して、予備隊なり支援兵なり、後続部隊に組み込んでもらって、有能な士を発見するという作戦が通用するかもしれない。

「アイナリンド、これは良いチャンスだぞ」

「ええ、早速応募しましょう。討伐隊に採用されれば、勿論宿舎も用意されるはずですし、路銀も減りません」

薬草の知識と、簡単な医术を持つアイナリンドもまた、直接ではないにしろ、討伐隊において貴重な戦力であるはずだ。二人そろって採用される可能性は高い。

早速、俺達は高札に掲示されている討伐隊本部の場所——この街の自警団へと足を運ぶことにした。

第十話：最初の街（後書き）

移動って基本的に旅のメインですけど、やっぱり暇なんですよ。色々とやるべくことをやってるはずなのですが、全部書いていたら物語にならなくなったので、かなり割愛してます。

黒衣での経験をまったく生かせずに足踏みしちゃったぜチクショウ。

第十一話：コカルト討伐隊

そもそも、最初に考えるべきはアイナリンドの性格だったように思う。

彼女は俺を立派な勇者にしようと必死であり、そのためならば少々の無理を通してしまう困ったさんなのだ。割と思い込みが激しいというか、強引なところがあって、そうでなければ俺はこんな世界に召喚されてはいない。

つまり、討伐隊への応募に際して、アイナリンドはやっちゃったのである。

「この方は魔王討伐を掲げられた勇者様です。ここに来る間にも、非力な私と従者の村人を従えただけで、あの凶悪なゴゴルスは無傷で仕留めて参りました。今回の討伐においても、是非参加したいと思つて駆けつけてきたのです。どうか、快く迎え入れてくれますよう、お願いします。及ばずながら、私も薬草の知識と、応急手当の術を修めていますのでお手伝いしたいと思います」

この鳴り物入りの勇者登場に、討伐隊の隊長である自警団の長が仰天してしまった。

ゴゴルスは通常、畏で身動きを封じた後に、弓矢で弱らせて討伐するのがセオリーであり、十数名からなる討伐隊を組んで、ようやく一体を仕留められるという塩梅である。それを何故か三人で仕留めてしまった上に、内一人はか弱い女性。もう一人が農民とあれば、確かに驚くべき事実である。

ただ、勿論それだけで納得するようなものでもないので、売り飛ばそうと思っていたゴゴルスの牙を見せてみたところ、あっさり信じられた。まあ、魔物に困っていたところに自称であれど勇者様が登場すれば信じたくなるだろう。

だが、この流れは不味い。ステビナ村でも経験しているのでよくわかっているが、自称勇者という中途半端な肩書きは、かなり危険

なのだ。

「これは、とても心強い！ 是非、小隊長として隊伍を率いていた
だきたい！」

思いつきり、前線投入されてしまった。

聞けば、対魔物の傭兵というのは、基本的に傭兵団を結成しており、通常は一団ごと雇い入れてもらうものらしい。

そこに飛び入りで勇者とお付きのエルフがやってきたわけで、当然ながら俺達は単身志願の集団に組み込まれたわけである。一小隊は五名。小隊長が一名に、兵卒四名という構成である。

討伐隊長に案内された一角には、プロ集団のような革鎧を纏った傭兵さんではなく、麻の野良着や、ごくごく普通の服装をした面々が揃っていた。

義憤に駆られたり、食うに困っていたり、思惑は様々だろうが。いわゆる寄せ集めの素人集団である。武器持参が条件だったので、適当なものを選んできたのだろう。戦闘用ではなく、明らかに伐採用の手斧を携えた若者やら、果物ナイフかと思うような小振りなナイフを握り締めた少年。それに明らかにその辺りで拾ってきたであろう、木の棒を持った小柄な少女。

俺が小隊長だと、討伐隊長が面々に説明すると、一同は俺を訝しげに眺めて、曖昧な表情を浮かべた。

華奢で若い上に、見慣れぬ風采であるからして、懐疑の目を向けられるのも当然であろう。

「あー、まあ、よろしく。俺はタミフル。こっちはアイナリンドだ。アイナリンドは薬草と医術に心得があるので、安心して戦ってくれ」
一応、形式上挨拶してみたが、恐ろしく不安である。そもそも、どんな魔物が相手なのかわからないのである。

高札には魔物の集団と書かれており、少なくとも複数匹が相手ということだ。宿舎に集まっているのは三十名ほどであり、ゴゴルス

相手に十数名と考えれば、ゴゴルス二匹分に相当する相手ということになる。

「タミフル隊長、よろしくお願いします！」

俺が内心で震え上がっていると、件の果物ナイフの少年がビシッと敬礼してきた。

栗色の髪をした、俺より三つか四つほど年下の少年で、顔立ちはあるだけなさを残しているものの、将来はイケメン確定の美少年である。

「ああ、えーと……君は？」

「ヒュー・トマークです。近くの農家で育ちましたが、いつか必ず魔物を倒すハンターになろうと、今日まで剣の腕を磨いてきました！」

ヒューと名乗った少年は、そう言って白い歯を見せて笑った。ハンターとは何だろうとアイナリンドを見ると、こっそりと「魔物を倒すことを専門にした職業のことです」と耳打ちしてくれた。

「へえ、けど……お前のそれ、剣じゃないよな……？」

ヒューの持つ武器は、先述したように果物ナイフのような、小振りなナイフである。とてもゴゴルスのような強靱な魔物を相手に通る武器とは思えない。アイナリンドですら、腰には短剣を帯びているのだ。はつきり言って殺傷能力は魔物に相對できるものではない。

しかし、ヒューは特に恥ずかしがるでもなく、やはり白い歯をきらりと輝かせて微笑む。

「コカルトが相手ですから、これでも十分戦えます。どうか、僕にも働かせてください！」

ふむ、とアイナリンドを見る。コカルトというのが、どうやら討伐の対象のようだが、生憎と魔物に関してはゴゴルス以外の存在を知らないのである。

しかし、ここで知らないと言ってしまえば勇者の名前以上に、小隊長としての沽券に関わる。これからそのコカルトとやらを倒しに

いくのに、どんな魔物かも知らない小隊長になど、誰もついてこないだろう。ならば、ここで仕入れてしまうのが上策というもの。

「だけど、君はまだ若いし……勇氣は認めるけど、勇氣だけじゃ駄目だ。ちゃんとコカルトについて知っているのか？」

ちよつとした作戦である。まさかコカルトの討伐と知っていないがら、コカルトがどんな敵なのかを知らないはずも無い。ここでヒューに説明させてしまえば、俺も威厳を損なうことなく、知識を得ることが出来るだろう。

「勿論です。実際に見たことはありませんが、人型の魔物で、体長はおよそ50センチ。灰色の身体と真っ赤な目が特徴です」

「……外見だけじゃ知っているとは言えないぞ？」

「主に鉱山や洞窟に住み着いていて、死肉を好みます。小心ですが狡猾で、集団での行動が基本です。力は弱く、一対一でもまず負けることはありませんが、手先が器用で人間の道具を盗み、武器を持っている場合が大半です。中々すばしっこいので、小回りのきくナイフを選んできました……剣が無いのも理由ですけど」

なるほど、何も考えずにナイフを選んだわけではないようだ。それに、淀みなくスラスラと答えるところを見れば、きちんと勉強をしているようだし、まず間違いはないのだろう。

アイナリンドもある程度の知識を持っていたのか、間違いではないとも言つように頷いて見せた。

「うん。そこまでわかつているなら大丈夫だ。他のみんなも、コカルトについては知っているな？」

いきなり現れた、見ず知らずの小隊長にうまく従ってくれるかどうかはわからないが、ステビナ村で幾つかの発見があったので、それを元に自分の言動をやや尊大なものにする。

あまりにも傲岸不遜ではいけないが、気が弱いところを見せてもいけないのだ。ビビっていると思われるのは、ついてくる人間など誰もいない。

「言われるまでもねえ。たかがコカルト相手に張り切りすぎだぜ、

隊長さん」

俺の言葉に、一人の男が嘲る様に笑って言った。体格の良い若者で、他のメンツよりも頭ひとつ高く、武器も伐採用ではあれど、小型の魔物なら真つ二つに叩き潰すであろう手斧である。

むっ、と眉を顰めるアイナリンドだが、俺はそれを手で制する。こういう豪気な人間は頭ごなしに叱ったり、否定するよりも、ある程度自由にさせておいたほうが役に立つ。

「ま、俺は適当にやるからよ。あんまり隊長ヅラしないでくれよ。別にアンタの部下ってわけじゃなし」

「……ああ。存分に暴れてくれれば良い」

それだけを言って、ヒューともう一人の少女に目を向ける。

ヒューはそれなりに鍛錬してきたのだろう。まだあどけない表情ながら、身体はしっかり鍛えてあるようだが、少女のほうは、よくもまあ討伐隊への参加が認められたと思うような、華奢な少女だった。

だが、見た目だけで判断してはいけない。この世界には魔法という概念があるのだ。一見すると小柄な少女だが、きつと強力な魔法を身に付けているのだろう。赤い髪をショートにまとめた、優しそうな子で、年のころは十四歳ほどだろう。胸の発育は残念な感じであれど、顔つきはとても愛らしい。

それでも不安なのは、彼女が手に持った木の棒だろう。一応、棍棒のように柄に布を巻いており、使いやすくはしているようだが、思い切りぶん殴ると、ぼきりと折れてしまいそうだ。

きっと、何かしら理由があるのだろう。そう思っていると、つかつかと討伐隊長が歩いてきて、俺に声をかけてきた。

「顔合わせは済んだでしょうか。早速ですが、街道の傍でコカルトが現れたという報告がありました。傭兵団の方々にはコカルトの巣を襲撃することになっており、貴方たちには街への侵入を防ぐ役割をお願いします」

「……わかりました」

本格的な討伐には、やはりプロの傭兵集団に任せておいて、俺達は彼らが専念できるように防衛線を引くというわけだ。心強い仲間がいれば文句もあるうが、生憎と戦闘力に換算できない俺とアイナリンド。果物ナイフ装備のヒュー。協調性皆無の若者。おまけに華奢な少女である。これでは最前線に出ると言われるほうに文句を言うだろう。

討伐隊長は俺に地図を渡して、目標地点を指示する。しかし、この街の近辺のことなどわからないので、ヒューに覚えてもらうことにする。どうやら討伐隊長とヒューは知己のようで、「小隊長の言うことをよく聞くんぞ」とか「初陣を飾って来い」などという励ましの言葉が聞こえてきた。

ヒューは今回が初めての魔物討伐であるようだ。ゴゴルス一匹分俺のほうが先輩ではあるが、さきほどのコカルトについての知識のように、しっかりと勉強している点では、俺よりも圧倒的に有力だろう。

「それじゃあ、早速行こうか……と、その前に。自己紹介をしてもらうのがまだだったな」

俺が若者と、少女に改めて目を向ける。

若者は面倒くさそうに「ジヴァだ」と答え、ぷいっとそっぽを向く。中々反抗的ではあるが、いざ戦闘となれば一番頼りになりそうだし、特に文句を言うこともないだろう。

それよりも、もう一人の少女である。

「えっと……君は、何か魔法が使えるのかな？」

ちなみにヒューはまだ自分の魔法がどんなものであるかを知らないのだという。一般的な魔法は一通り試したのだが、うまく発動しなかったらしい。俺自身があっさりと見つけてしまったので意外だったが、大人になっても自分の魔法がわからないことだってよくあるらしい。

「えっと、私は魔法が使えないです……」

少女が申し訳ないように顔を伏せて、ぼつりと呟く。

まだ子供なので仕方が無いことだろう。だが、そうなれば何故、彼女がこの場にいるのだろうか。

魔法を使うことも出来ず、肉体的にはどう考えても戦力換算できない。彼女も後方支援だとなれば、俺とアイナリンド含めて、随分と後方支援組だらけになる。

「何か、出来ることがあるかな？」

「えっと……コカルトっていう魔物ぐらいなら、頑張って倒します！」

少女はぐつと木の棒を握って、健気に答える。つまり、特に後方支援に回るつもりはなく、華奢な身体で戦おうということなのだろう。

「ん……わかった。じゃあ、君は俺と一緒に連携して、戦ってくれ。アイナリンドはヒューの補佐だ……と、そういえば、君の名前を聞いてなかったな」

赤髪の少女の名前を聞いていないことを思い出して、ふと尋ねると、少女は少しだけはにかんで、薄い胸を張ってこう答えるのだった。

「エリシア・フォウルスです」

第十一話：コカルト討伐隊（後書き）

黒衣の続編ではないけど、黒衣のキャラが登場しないとは一言も言っていないというオチ。

第十二話：赤い髪の少女

これがゲームならば、いわゆるコカルト二十体の討伐、とでもいうところだろうか。

俺達に任されたのは、街から離れた小屋にたむろするコカルトの討伐である。話を聞く限りでは素人でも大丈夫とのことだったが、実際に戦ってみるとこれが中々手ごわい相手である。

「おおっ！！」

狭い小屋では剣を振ることもままならず、小屋の中にはヒューが突撃しており、俺は外に逃れてきたコカルトを仕留めていく役目なのだが、ねずみのようにすばしっこく、容易に倒すことができない。「てあっ！」

そして、そんな俺を補佐するエリシア・フォウルスだが、何故か不思議なほどに綺麗にコカルトを昏倒させていく。

木の棒で的確にコカルトの眉間を突いていくのだ。武術の心得があるわけではないが、俺がブンブンと剣を振り回すものだから、そこから逃げようとするコカルトはエリシアの不意打ちを避けることができないようである。昏倒したコカルトは俺が逐次、剣で仕留めている。

最初は躊躇いもした。体色は灰色で、目玉ばかりがぎよるぎよると赤いコカルトは不気味だが、それでも二足歩行をする、少なくともシルエットは人間に近い魔物だからだ。

しかし、躊躇している間に目を覚ましたコカルトがエリシアに飛びかかるうとしたところで、一瞬で躊躇が消えた。思わず蹴り飛ばして、ポーンと跳ね上がったところを剣で叩き潰した。

変な色の血が飛び散ったが、もう気にしてはいられなかった。小さい女の子を守るためならば、男というのは少々の気味悪さなど無視できるようになっているらしい。

「ユウシさん、小屋のコカルトはほぼ逃げ出しました！」

ヒューと一緒に小屋に突撃していたアイナリンドが、ひょっこりと小屋から顔を出す。だが、その隙を突いて隠れていたコカルトがアイナリンドに襲い掛かるうとしていた。

「ちょ、アイナリンド後ろ！！」

思わず叫んで、とにかく走ろうとするが、次の瞬間にコカルトが物凄い勢いで何かに吹き飛ばされた。

まるで横から薙ぎ払われたようだと思った瞬間、ぼとりとコカルトが手斧を頭に突き刺したまま落ちてきた。

「ったく、気を抜くなボケエルフ」

ジヴァが小屋の裏側から声をかける。手斧を投げたのだろう、丸腰だ。その隙を突こうとしたもう一匹のコカルトはヒューの果物ナイフで背中を斬られて事切れた。アイナリンドは目を白黒させていたが、状況を把握すると、素直にジヴァに礼を言う。ジヴァも根っからの人間嫌いではないのと、アイナリンドが美人であることが幸いしたのだろう。照れくさそうに「気をつける」と呟いた。

兎角、これでこの一帯のコカルトは仕留めただろう。ヒューが小屋から出てきて、にっこりと笑った。

「中は終わりました。タミフル隊長は如何です？」

「……おう、こっちに逃げたやつは仕留めた」

ふうと溜息をついて、周囲を見る。小屋の周囲には背の低い草が茂っており、その上に幾つものコカルトがつつぶくしていた。

「……惨状っていうべきかな」

「害獣駆除ではよくある光景ですよ」

俺がげんなりと剣を下げると、エリシアが特に動じる様子もなく呟いた。

まったく、心強い女の子である。もつとも、この世界では魔物という存在が人間達の命を奪い、生活を脅かす存在以外の何者でもない。仕方が無いのかもしれない。

街に帰って討伐隊の宿舎に入ると、討伐隊長が出迎えてくれた。成果を報告すると、隊長は相好を崩して労をねぎらう。ちなみに内訳は、ヒューが五体を仕留め、ジヴァも六体。アイナリンドが二体と、エリシアと俺で七体。計二十体丁度である。

アイナリンドは元々、補佐に徹していたようだし、二体を仕留めただけで上々の結果と言うべきだろう。実質、ヒューの仕留めた五体のうち、三体はアイナリンドの短剣を避けたコカルトを仕留めていたようだ。

ジヴァは遊撃要員として、主に小屋の裏側や小屋の窓に狙いを絞っていたようだ。個人で言えば一番仕留めている。

「上々の結果です。流石は勇者様ですね。初陣のヒューや、か弱いエリシアという面々に不安が残ったのですが、おかげで助かりました」

「いえいえ、彼らはとても優秀です」

俺は世辞ではなく、本心で言った。小屋に突撃して作戦を成功させたのはヒューであり、エリシアが的確に急所を狙い打ちして昏倒させなければ、半数ほどが逃げてしまっていただろう。

俺よりも年下の二人が仕事をしっかりこなしてくれたおかげで、このような結果に至ったのだ。まとめるというよりも、突撃と包囲を指示しただけの俺は、ほぼお飾りの小隊長と言って良い。

それでも、このポジションはありがたい。俺は剣を振り回しつつ、昏倒したコカルトを叩き潰していただけの陽動と始末だけを請け負った身であれど、小隊長として評価を受けるのだから。若干、申し訳ない気がしないでもないが、俺が目指すのはこういうことの繰り返しなのだ。

他力本願。俺が魔王様を倒すのが不可能である以上、肩書きによって豪傑を率いる道しかないのだ。

「タミフルさんとアイナリンドさん、それにエリシア。お部屋を用意しています。少々狭いのですが、自警団の仮眠部屋でして……必

要であれば、宿の手配もしますが」

「元が根無し草ですから、雨風が凌げれば十分ですよ」

隊長のありがたい言葉は、正直魅力的だったのだが、なにせイメー
ジ重視の職業、勇者である。清貧を貫いているように見せかける
ことも地味ながら活動の一環である。その実、アイナリンドと同じ
ベッドで眠るのを今から楽しみにしているなどとは、ちらりとも表
に出してはいけない。

「……ユウシさん、鼻の下」

「ちよつと疲れたから緩んでるだけだ」

イメージ重視も大変である。

仮眠部屋は五人が一部屋で眠るようになっていて、簡素なベッド
が並んでいるだけのつくりで、やはり狭い。

アイナリンドと同じ部屋というのは当然で、一緒に寝るにしても
都合が良いのだが、同じ隊ということでエリシアも一緒にの部屋とい
うことになったのは誤算だった。エリシアもまた、タイプは違えど
可愛い少女であるから、男との相部屋は不味いと思ったのだが、
当のエリシアが「全然大丈夫です」と言い、他の部屋は傭兵団が使
っているという実情もあった。おまけに討伐に参加しているメンツ
のうち、女性がアイナリンドとエリシアのほかに、傭兵団に所属す
る筋骨隆々たる女丈夫が一人という塩梅で、アイナリンドと同じ部
屋のほうが都合がいいとのことだった。

「もし気兼ねするようであれば、タミフルさんを傭兵団と相部屋に
してもらい、傭兵団の女性を替わりにアイナリンドさん達と相部屋
にしてもらうようお願いしてみますが」

「謹んでご遠慮申し上げます」

三人とも同時にお断りしていた。俺は当然、男臭い傭兵団と同じ
部屋で寝るのが嫌だったからなのだが、アイナリンドとエリシアま
で一緒に断ったのはどういうことか。

「その女傑の御方、少々怖いので」

というのがアイナリンドの理由だった。なるほど、確かにちらりと見た限り、俺よりも骨太で、ともすれば下手な男よりも始末に終えない可能性がある。それよりは、気心も知れて、同衾しても襲わない俺のほうが安心というところだろう。

「ちよつと、タミフルさんをお願いしたいことがあるんです」

これはエリシアの言葉だった。可愛らしい少女からのお願いに、俺は当然ながら妄想を思い切り働かせてしまう。

どという類のお願いなのだろうか。火照った身体という文字が脳内を飛び交い、自然と頬が緩んでしまった。

「わかった。じゃあ、俺とアイナリンド。それとエリシアが同じ部屋ってことで」

今夜は楽しくなりそうである。

部屋に案内されて、とりあえずその狭さには閉口したものの、五人用の部屋を三人で使うので、快適とまでは言わないがゆつくりと眠ることは出来そうだった。

ただ、魔物の討伐の後というのは、少々血生臭い。多少なり返り血も浴びているし、埃っぽい小屋に突撃したアイナリンドはけっこう身体の汚れを気にしていた。そうなれば当然、身体を清める作業と相成り、必然的に水が必要で、水といえば俺という図式が出来る。

宿舍の裏で、人気の無い場所を選んで、布団から引っぺがしたシートで簡易天幕を用意すれば準備万端。俺がペットボトルから極力熱くした水を桶に注ぎ込み、天幕にそつと差し込んでやると、中で裸でいるはずのアイナリンドとエリシアが嬉しそうな声をあげた。

ちなみに今の俺では、精一杯熱くしても二十度前後という水温であり、少々冷たいのだが、もとより風呂に入る習慣の無い世界である。二人とも特に気にすることなくざぶざぶと水を掛け合い、俺がその都度補充してやっている。

俺もパンツ一丁になって自分の身体に水をかけて、タオルで拭い

た後に、唯一の換えの服装、パジャマに着替える。正直、手の届く距離にアイナリンドとエリシアの裸体があると思えば、これはもう突撃したいのだが、ここで強姦沙汰ともなれば、勇者のイメージは一気に最底辺にまで落ちる。

「うん、大丈夫……なんせ、お願いがあるんだからな」

この後に控えている、エリシアのお願いに期待を膨らませる。イザとなれば、アイナリンドも高まって混ざること考えられる。なんと、俺を男にしてくれるのが美女二人という素敵な図式。これはもう男冥利に尽きるというものだろう。

こざつぱりした俺達は、その足で近くにある酒場に向かうことになった。

エリシアはこの街に来て十日程という旅人らしいのだが、安くて量の多い店だと案内してくれたのだ。

「三日ほど、この店で仕事をさせてもらってたんですよ」

「へえ、なんでまた？」

「無一文だったので、賄いのある店じゃないと働くことすらできなかったんです。けど、旅をするにはお金がたくさん要りますし、魔物討伐に参加することにしたんです」

エリシアは料理を注文して、そのまま手伝うと申し出ると、厨房に入ってしまった。まだ若いのに随分としつかりした少女だ。だからこそ、よくわからない。どうしてこんな少女が旅なんてしているのだろうか。

聞く限りでは、どうやら金に余裕のある旅行ではなく、目的のために切り詰めた生活をしての旅のようだ。遅いというか、無茶というか。

「アイナリンド。どう思う？」

「……そうですね。コカルトと戦う姿は、獣に慣れた様子でした。コカルトは二足歩行と言っても、動きや感性は獣のものです。決し

て技量は高くないのに、獣の習性を把握していたので上手く立ち回れたのでしょーうね」

なるほど、確かにエリシアの動きは俊敏だとか、極めて正確とかいうものではなかった。それでも倒せたのは、動きを先読みしていたからなのだろう。

「後、幾つか気になったのは、ユウシさんの魔法で水を浴びたときでしたね。温かいお湯に浸かるのが一番気持ちいいと言っていました。水浴びではなく、湯に浸かれるような金持ちのようにには思えません」

「そうか。この世界じゃ風呂は豪勢なシロモノだったな」

「ユウシさんのような魔法がない限り、そうそう入れるものじゃないですね……エリシアは魔法を使えないと言っていましたし、あの年齢で旅をしているのであれば、家族が居るのかも怪しいものですし、お風呂のある環境にいたことが考えにくいですね。長年の勘で言えば、悪い子には思えないんですけど、怪しい気がします」

「……まあ、理由があるんだろ。どうやら、お願いしても楽しいもんじゃなさそうだ」

やれやれと溜息をつきながらも、やはり引つかかるのは確かだ。

「どうします?」

「簡単だろ」

俺はペットボトルの水を飲んで、厨房を窺う。丁度、エリシアが皿を持ってきたところだった。

「お待ちせしました。サラダを先に持ってきましたよ」

「おう。まあ、折角客として来たんだし、エリシアも座って待てるよ。ちよつと話もあるから」

「は、はい……」

俺の言葉に、エリシアが少し畏まった様子で席に着く。

簡単な話だ。そもそも、世の中の人間を疑っていたらキリがない。だから、俺に出来ることなんて一つしかないのだ。

「色々と気にかかったから、全部聞くことにする。エリシア……君

は、一体何者だ？」

俺の言葉に、エリシアはピタリと動きを止めるのだった。

第十三話：エリシア・フォウルス

エリシア・フォウルス。

十四歳の少女で、赤い髪は短くまとめ、活発で人懐っこそうな笑顔が愛らしい。

たどたどしい動きながら、コカルトを的確に昏倒させたことと言、風呂に日常的に入っていたような台詞と言、幼いのに一人旅をしていることと言。外見とは裏腹にかなり怪しい。

ただし、アイナリンドが懸念するほど、俺は心配していない。別に人を見る目に長けているとは思わないが、屈託の無い笑顔を見ていると、おおよやましいことがあるとは思えず、仮に何か隠していたり、秘密があるのなら、会ったその日のうちに、幾つも疑問を感じさせるような行動を取るはずがない。

だからこそ、素直にエリシアに尋ねてみたのだが、エリシアは固まった。

アイナリンドが訝しい目でエリシアを見たのも、この反応では仕方ないだろう。だが、誰だって「何者だ？」と聞かれたらびっくりするのは当然だ。

「エリシア。別に焦らなくて良いぞ。単に興味があるだけだから」俺が優しい調子で声をかけると、エリシアは少しだけ俺を見て、やがて意を決したように呟いた。

「私のことを喋るのはいいんですけど……その前に、ひとつ質問しても良いですか？」

ほう、と俺は内心で感嘆の声をあげる。

確かにエリシアは怪しいが、俺だって学生服という、この世界の技術では作ることの出来ない服を着ているのだ。こちらも怪しまれて当然だ。

自分の話をする前に、まず相手がどのような人間であるかを測ろうというのだろう。あどけない容姿の割に、中々強かである。

「なんなりと」

別に聞かれて困るようなことはしていない。一応、こちらら勇者様である。アイナリンドとの同衾やセクハラ以外は実に健全で爽やかな勇者様であると断言できる。

爽やかな分、おそろしく弱いのが玉に瑕ではあるのだが。

「……タミフルさんは、この世界の人ですか？」

「——ッ!？」

おずおずと、どこか遠慮がちに紡がれたエリシアの言葉に、今度は俺が絶句していた。

いや、理解は出来る。俺の服装や所持品は確かに、この世界では手に入れることが出来ないものだ。そこに違和感を持つのは少しもおかしいことじゃない。

だが、普通は他国のものだとか、珍しいものだとか反応しないのだ。ステビナ村では俺が異世界から来た人間だとアイナリンドが説明していたが、この街では異世界から来た勇者とは名乗っていない。

真っ先に、異世界から来た人間ではないかと思いつくのは、あまりにも不自然だ。

「……何故、それを？」

ゆっくりと、エリシアに言葉を返す。肯定するように言ったのは、エリシアが確信を持っているからだと判断したからだ。

本来は思いつかないであろう、俺が異世界の人間だということを、真っ先に尋ねてくるということは、何かしらの情報を掴んでいるからだろう。

さては、勇者を恐れた魔王様の暗殺要員かとも勘繰ったが、魔王様が俺を恐れるはずが無い。そうになると、いよいよわからなくなってくる。

「タミフルさんと同じ格好、二ホンでよく見ましたから」

「日本だと!？」

思わずガタンと椅子を蹴り飛ばして立ち上がり、エリシアを凝視

する。

何故、彼女が俺の世界を。そして、日本を知っているのだ。それだけじゃない。日本に行ったことがあるとまで言っている。

彼女は、世界を飛び越えるような魔法でも使えるのだろうか。

「……全部、お話しますね」

エリシア・フォウルスの話を要約すると、おおよそ以下のようななる。

まず、エリシアはこの世界の人間ではない。シーガイアと呼ばれる、俺の世界でもなく、この世界でもない世界に居たらしい。

親の残した借金の返済に追われる生活をしていたエリシアだが、そんな窮地を救ってくれたのが、俺と同じ世界の人間——格好も、俺と同じ学生服を着た、日本の高校生だったようだ。

この世界とは違う理の魔法により召喚されたようで、帰る手段を探していたというのは俺と同じだが、その行動には天と地の差がある。

彼はエリシアを救い、彼女の保護者となって面倒を見てくれたらしい。様々な経緯があつて、旅に出て。最終的には一国の革命の首謀者の一人にまでなつたと言うから驚きだ。

決して武勇の人間ではなく、むしろ得意なのは口先三寸。敵味方問わず、とにかくよく欺いて様々な問題を解決。最後には、彼を慕う人間を連れてもとの世界に帰ろうとした。

だが、そこで不手際により、さらに別の世界に飛ばされたという。エリシアも彼を慕っていた一人で、一緒に別の世界——今、俺達がいるこの世界に飛ばされてきたらしい。

「魔王の本拠地のすぐ近くに飛んできたみたいで……なんとか騙して逃げれたんですけど、魔王の配下に、妙な魔法を使う人がいて……気がついたら、私は一人で全然知らない場所に居たんです」

つまり、転送魔法なのだろう。おそらく、全員がばらばらに飛ばされてしまったようだ。

エリシアはその、はぐれた仲間や日本人と合流するために旅をしているらしい。

幾つかの噂話を集めながら、一生懸命旅をしてきたのはいいが、路銀が乏しくなってこの街でしばらく稼ぐことにしたという。

そして、そこで出会ったのが、エリシアと共に旅をしてきた日本人と同じ服装で、同じ髪の色を持つ俺だったわけだ。エリシアはすぐに、俺が別の世界から来た人間だと理解して、ここまで行動を共にした。

彼女が風呂を知っているのも、その彼が教えたことのような。魔物を昏倒させたのは、親が死んだ折に獵師に預けられていたときに教わった技だという。

「……つまり、日本人がもう一人、この世界に居るわけだ」
俺が呟くと、エリシアは力強く頷いた。

そして、それと同時にエリシアが言っていたお願いも、理解が出来てしまった。

「……同じ世界の人なら、何かわかるかもしれないと思ったんです。もし、何か知ってるなら教えてくれるだけでも良かったんですけど……知らないみたいです」

エリシアががくりと項垂れて、しょんぼりとしてしまった。

おそらく、エリシアはその日本人に惚れているのだろう。ほとんど何のアテもない探し人だったところに、出身が同じという俺を見つけたときの喜び方は、きつと半端なものじゃなかったはずだ。

だが、残念ながらそういったことは何も知らない。日本に学生服を着た人間が、何人いるのだろう。知人という可能性はゼロに等しい。「ユウシさん」

それまで黙っていたアイナリンドが、俺を見ていた。

可哀想だし、なんとか力になってあげましょう。とでも言いたいのだろう。さっきまで疑っていたのに変わり身が早いというか。

だが、親しい人間と離れ離れになっているのはアイナリンドも同じだ。最愛の妹を魔王様にさらわれてしまっているのだから、エリ

シアの辛さはよくわかるのだろう。

「んー、そうだなあ。そいつ、すげんだよね？」

「はいっ。すごく頭が良くて、優しくて、かつこよくて、しかも強いです。シーガイアで一番強い騎士と一騎打ちして、互角だったんです！」

なんだその完璧超人は。エリシアの話を聞く限り、シーガイアもことは似たような感じの発展具合で、相手も職業軍人たる騎士である。現代日本の高校生が、中世の騎士を相手に互角に戦うなんてさぞかし運動神経がいいのだろう。

「そいつ、仲間になってくれねえかな」

俺の言葉に、アイナリンドがこっちを見た。

「確かに、革命を起こすような行動力に、最強の騎士と引き分けるほどの腕。それに駆け引きも絶妙で、ついでにかっこいいんですよ。そういう人が居てくれれば、ユウシさんなんか後ろを歩いているだけでよさそうですね！」

「……今日こそ契約を果たそうかな」

「ユウシさんも凄いですけど、一層凄くなりますね」

アイナリンドはどうやら、俺ではなくそいつを呼び出せばよかったと思っているようだ。まったくもって同感だが、俺の扱いがひどい。

「あ、あの……」

「ああ、すまん。まあ、そういうわけだから、俺達も手伝うよ。どうせ旅するのは決定事項だし、俺と同じ格好の人間を見かけた人間が居ないか聞いてまわればいいんだろう？」

いくら初対面でも、遠く離れた世界でならば手を取り合うことも出来るだろう。周囲全員が異世界人となれば、同じ世界出身の日本の高校生というだけで、とてつもない親近感を得ることが出来るはず。仲間になってもらうのに、そうそう苦労はしないと見た。

エリシアにしても、単純に人手が増えるのは嬉しいはずだ。しかし、そのエリシアは口元をまごつかせて、ちらちらと俺を見ていた。

「どうかしたか？」

「いえ……その、できればなんですけど。タミフルさんの旅に、私も連れて行ってほしいんです」

エリシアの言葉はこちらを窺うような様子でありながら、どこか信念を感じさせるようなものだった。

「二手に分かれたほうが効率が良いと思うんですけど」

アイナリンドが正論を言う。確かに、人手が増えたならば分担させるほうが効率は上がる。

しかし、これは半分正解で、半分が間違いだ。

「エリシアはこの街で待つておくつもりがないんだろう。つまり、お互いが旅に出てしまえば、せつかく見つけても連絡を取ることが出来ない。それなら、少々手間はかかるけど、一つの街を三人で調べて、さつさと次の街に行ってしまうほうがいいってことだ。だよな、エリシア？」

「……あと、やっぱり一人旅が大変だということもあります。それに、ここでタミフルさんに出会えたのは、きっと何かの意味があると思うんです。今まで、ほとんど当てる無の旅をしていましたけど、同じ世界の人に出会えるなんて、奇跡みたいじゃないですか」

エリシアにとっては、確かに大きな手がかりに見えるのだろう。

確かに、探して見つかるような存在ではない。俺もまさか、同じ世界の人間がこの世界に居るなんて思ってもみなかった。

俺にとっても、ここでエリシアに出会ったのが運命のような気がするのだ。

「アイナリンド。いいかな？」

「……世界は違って、長らく旅してきた上に、この世界でも一人で旅をしてきたんですよ。私よりも旅慣れているでしょうし、良いと思いますよ。それに、またエリシアさんを一人で旅をさせるのも少し心配ですから」

流石は百歳オーバーの年長者である。エリシアは庇護欲を沸かせる子だし、旅慣れていることよりも、心配だということのほうが大

きのだろう。

それに、エリシアをつれていれば、まだ見ぬ同郷の彼を仲間に取り込むのも容易いように思える。

「決まりだな。じゃあ、早速趣旨変更だ。今日は新たな仲間との出会いを喜んで、歓迎会ってことにしよう」

「ふふ、ユウシさんらしいですね。エリシアさん、よろしく願います」

俺とアイナリンドがエリシアを見る。エリシアはぱっと顔を輝かせて、嬉しそうに頷いた。

「よろしく願いますっ！」

案内人たるアイナリンドに加えて、旅慣れた異世界人のエリシア。なんだか打倒魔王様一行とは思えない、後方支援組ばかりが揃ってきているような気もするが、可愛い女の子が道中を共にするのは良いことだ。これも日頃の行いが良いからに違いあるまい。

「じゃあ、早速ですけどエリシアさんの探している方、なんて名前なんですか？」

アイナリンドがぶどう酒を注文しながら、にこにこエリシアに問いかける。

御歳百を越えるアイナリンドだが、見た目同様に性格も若く、目が好奇心に満ちている。エリシアにとって恩人であり、そして異性として惹かれているという存在が気になってしょうがないのだろう。まあ、探すにしても名前を知っておくのは重要だ。知人であることはまず無いだろうが、カタカナばかりの名前に飽き飽きしていたところである。ここらで日本人の名前が欲しいところだった。

「あ、えっと……タカ——」

「大変だアー——！」

エリシアがぱっと頬を染めながら、件の高校生の名前を呟こうとしたときである。

酒場の入り口に転げ込むように、自警団の隊長が入ってきた。

「デカルトが……デカルトがいたんだ！」

息も絶え絶えにそれだけ叫ぶ隊長に、周囲の喧騒が一瞬止む。

デカルト。なんだその哲学者のような名前は。横文字だらけの異世界であるから、デカルトさんという人だっているだろうに。

俺が首をかしげていると、隊長の後を追ってきたのだろう。ヒューがやはり慌しく駆け込んできた。

「タミフル隊長！ デカルトです。コカルトのねぐらを攻めた隊が壊滅しました！」

「……ん？」

「コカルトの親玉ですよ！ 滅多にいないんですけど、この一帯でコカルトが行動を活発化させたのは、デカルトが親玉にいたからだっただけです！」

ヒューの説明に、ようやく俺の脳内でデカルト＝魔物の構図が出来る。しかし、いくらコカルトの総元締めだと言っても、コカルト自体がスライム並に弱いのだ。せいぜい、スライムベスぐらいの強さだろう。

「……ユウシさん、わかってません……デカルトは、人間の三倍は大きいんです」

アイナリンドの青ざめた表情と、呟いた言葉が、俺のお気楽なムードをいっぺんにひっくり返した。

第十三話：エリシア・フォウルス（後書き）

今更ですが、エリシアについて詳しくは黒衣のサムライを読んでいただければと思います。

全部で五十万文字ぐらいあるので、読んでない人は頑張れ！
あ、いや。嘘ですごめんなさい。よければ読んでください。

第十四話：仔細は黒衣のサムライで

「タミフルさん、お願いします。ゴゴルスを倒した貴方なら！」

「タミフル隊長、行きましょう！」

自警団長とヒューが飛び込んできたのは、どうやら俺を探すためだったらしい。

状況は最悪に近い。俺達が小屋を襲撃したのと同時に、他の傭兵部隊がコカルトが住み着いている砦を襲撃したのだが、予想外のデカルトの登場に不意を突かれた上に、装備がそろっていなかった。小兵のコカルトを相手にするには、小回りの聞くナイフを使うらしい。ただでさえ、砦の内部で大剣を振り回すわけにも行かず、傭兵たちは短剣やナイフを片手に突っ込んだ。そこに人の三倍はあるうかという巨躯のデカルトが鎮座していたのだ。巨大な棍棒を広間で振り回して襲ってくるデカルトに、傭兵は総崩れ。死者三名に、重傷者十五名。後詰の二人だけが無事なだけだった。

「……死者が出たか」

思わず呟いてしまった言葉に、俺は思わず口を手でふさいだ。そうだ。ゴゴルスのときもそうだったが、ここは死を覚悟しなければいけない世界なのだ。

俺だってコカルトを殺したのだ。相手にそれをされて文句を言えるような立場ではない。

「……ユウシさん」

アイナリンドが俺の顔を見て、ふるふると首を横に振った。

いつものアイナリンドらしくない。俺の命なんて使命に比べれば軽いものだと思っているようなアイナリンドにしては、珍しい反応だった。

「私達も、コカルト相手とは言えども疲れています。それに、装備もおぼつきません。ゴゴルスは獰猛だからこそ少数で倒せましたが、デカルトは決して智能が低いわけではありません。無闇に突撃

せずに、じっくりとこちらの動きを待っていることでしょう。今、この暗闇に突撃をするのは自殺行為です」

冷静な言葉だと思う。状況を分析すれば、確かにその通りだ。脳の大きさと知能は不可分ではない。巨躯ということは、それだけ知能が高いのだろう。

相手は獣ではなく、知恵を持つ存在となれば、罠を仕掛けて一撃粉碎というわけにもいかない。

「タミフルさん。勇氣と蛮勇は違うって、マサトも言っていました」
エリシアがやはり、俺を止めるように呟いた。

マサト。それがエリシアが探している男の名前なのだろう。背が高く、かつこよくて、頭が良く、強く、すぐ舌の回る男。そんな男でも。いや、そんな男だからこそ、線引きはしっかりしていたはずだ。勝てない勝負をするはずがない。冷静に状況を見極めて、勝てるところで勝負をするか、或いは勝負すらずに逃げるか。否、或いは勝負という概念を摂り省いてしまうかもしれない。俺の知り合いにもマサトという男がいる。そいつは別にかっこよくもなく、強くも無かったが、やはり背は高く舌がよく回った。そいつの持論だ。発想は逆転させるもの。勝負に負けるならば、勝負というフィールドをねじ伏せることはできないかと考える、と。
「……高木の言葉なんか、今更思い出しちまうなんてなあ」

周囲には、俺を見詰める視線だらけだ。

この窮地に、自称勇者にすぎる自警団長と、ヒュー。

危険を考慮して、止めようとするアイナリンド。

事態の推移を見守るほかの客達。

なんてことだろう。名目だけの勇者のはずが、いきなり実を求められてしまっている。

逃げ出してしまいたい。あれだけ俺に勇者らしさを求めているアイナリンドが俺を止めるといふのは、そうせざるを得ない相手だからだ。確かに勇者としての名を上げる好機でもあり、逆に逃げれば目的達成までは大きく後退することだろう。それでも、アイナリン

ドは逃げる選択肢を選んだ。

既に死者が出ている。俺も死ぬかもしれない。流石にエリシアを連れて行くわけにはいかないし、アイナリンドも後方待機をせざるを得ない。小回りがきくヒューといえども、小回りだけではデカルトを倒せない。少なくとも真っ向勝負は今のメンツでは不可能だ。

ならば、真っ向勝負でなければだろうか。火攻めだとか、コカルトやデカルトが眠る時間帯を狙っての奇襲だとか。

否、それも無理だ。奇襲にしる、火攻めにしる最低限、前に打って出るような存在が必要だ。ジヴァがいてくれれば助かるが、それでも手斧ひとつで、一人で突撃させても無駄死にするだけだろう。

「何か、何か手は無いか……」

発想を逆転させる。勝負を無にしてしまうような。或いは、こちらの劣勢が最大の武器になるような。俺が、勇者に相応しい活躍が出来るような、そんな発想が必要なのに。

「……何も、思い浮かばねえ……」

高木の言葉は、高木だからこそ意味のあるものなのだろう。あの頭でつかちのひよる長い、口だけ達者な男は、成績も運動神経も良くないのに、こういうことだけは得意だった。

俺には無理だ。あまりにも普通すぎるのだ、俺は。

思わずうなだれる俺に、全員が沈痛な面持ちを浮かべるのがわかった。傭兵達は壊滅。頼みの綱の勇者様がこの調子では、デカルトの討伐などおそ無理だろう。軍隊でも呼べばいいのかもしれないが、洒落にならない金額が必要だという。

情けないことこの上ない。今まで順調だったが、やはり俺はここいらが限界だ。

そう思っ、ふと溜息をつこうとした瞬間だった。さっきからだ一人、俺の顔をじっと見詰めている少女が居た。

エリシア。何故か、エリシアだけが俺の顔をぼかんと見詰めて、不思議そうな顔をしていた。

「どうした、エリシア？」

予想以上の俺のヘタレっぷりに呆れたのだろうか。自分が惚れた相手の同郷がこんなヤツで失望したのだろうか。

俺が萎縮する中、それでもエリシアはぼんやりと、一言呟いた。
「タカギ……マサト？」

その名前を、この世界で聞くことになるとは思わなかった。

高木と俺が出会ったのは、なんと病院のベッドである。

否、別に入院患者として知り合ったわけではない。正確に言えば、そのときのことを俺は覚えていない。なんせ、生まれた日に会ったのだから。

同じ病院で、母親同士が同じ部屋に入院していた。しかも俺達が生まれたのも、ほとんど同時だったらしい。

俺と高木は、物心つく前どころか、生まれてから最初の一週間を、ほとんど同じ環境ですごした。

家が近所だということもあっただろう。同じ病室で、同じ誕生日ということもあってか、俺はヤツと一緒に居るのが当然だった。小学校に入り、中学校を出て、高校まで一緒だった。

別に、特別に気が合うわけでもない。ただ、小さいときから近くに居るのが当然であり、お互いのことをまったく意識することも無いほどに知っているというだけだ。

俺は平々凡々。高木は長短激しく。

まるで違う俺達だから、意見も違えば行動も違う。けれど、お互いを熟知しているものだから、喧嘩をする気にもならず、かといって特別親しくもしない。

良くも悪くも、幼馴染だった。

まあ、俺が好きだった子が、高木の彼女になった時点でけっこう逆恨みもしたのだが、別に高木が悪いことをしたわけではない。つい最近、高木と彼女は長期留学に二人して行ってしまっただけが良かったのだ。それだけ女の子を幸せに出来るのが幼馴染ならば、ま

あ俺の鼻も高い。

運動は駄目で、成績も普通。それでも、周囲に一目を置かれる男であり、その大半が口先三寸で全てを動かすような、悪魔のような舌のおかげだった。

その、高木聖人の名前を、どうしてエリシアが。答えなんて、ひとつしかないだろう。

「あいつが、この世界に……なんて、偶然だ」

思わず呟いて、周囲を見る。話を飲み込めていないエリシア以外の全員がぼかんとしていた。

だが、そんなことはいい。あの高木が来ているのだ。しかも、エリシアという少女に好かれているのだ。あのやろっ、エリシアの話だと、この世界の前にシーガイアという場所に召喚されていたようだ。だから、三ヶ月ほど前に突然失踪して、帰ってきたときに辻褄を合わせるために記憶喪失とかいう嘘をでっち上げたわけだ。その後は留学をしていると思っていたが、まさかまさかの異世界留学だったとは恐れ入る。

否、そんなことよりも。高木がこの世界に来ているのならば、話は早くなってくる。

「エリシア。お前、この世界に来てどれくらいだ？」

「……えっと、三ヶ月くらいです」

「そうか。じゃあ、そろそろだ」

高木のことならば、俺が誰よりもよく知っている。

あの理屈の塊のような、嘘が服を着て歩いているような男のことは、平々凡々な俺が一番良く知っているのだ。

そして、高木の行動ならば全て把握が出来る。シーガイアで革命を起こしたというのも、どうせヤツ自身が悪人のフリをして権力を握り、誰かに革命を起こさせたのだろう。

そんな高木が、自分を頼る少女を三ヶ月も放っておくとは考えられない。この世界には便利な魔法がたくさんあるのだ。エリシアを

見つけて、追いかけることぐらいはヤツならあつさりやつてのける。

「高木を待つぞ。あいつがいりや、なんとかなる」

俺がエリシアを見て言ったときだ。静まり返った酒場の扉を開き、一人の男が顔を出したのは。

「待つ必要は無い。僕はここにいる」

学生服を着て、めがねをかけた地味な男が、ニヤリと口元を緩ませながらそこに立っていた。

第十四話：仔細は黒衣のサムライで（後書き）

えー、どうしてもこの回は上手くまとまりませんでした。

一人称の宿命というか、技量不足というか。

黒衣を読んでくれている人には、まあわかりきった話です。

読んでいない人には申し訳ない。読んでいただくか、そういうヤツがいると、強引に納得していただくしかございません。

筆者の技量不足を読者諸兄に押し付けるのもどうかと思うのですが、えっと……許してね？

第十五話：高木聖人

すらりと細い長身に、学生服をまとった男。

野暮つたい、手櫛で撫でただけのようなヘアスタイルもいつもと変わらず、お洒落とは程遠い銀縁眼鏡も変わっていない。

おまけに整っているのに地味という印象しか与えない面構えや、口元だけをにいつと歪ませた皮肉っぽい笑顔もいつものままで。

エリシアの話だと壮絶な人生を歩んでいるはずなのに、高木聖人はまるで学校の教室に入ってくるように、ごくごく自然な様子で酒場に入ってきた。

「エリシア、待たせたな。見つけるのには苦労しなかったが、移動に時間がかかってな」

「マサト!!」

低いがよく通る声で高木が言葉を紡いだ途端、エリシアが椅子を蹴り飛ばして、文字通り高木に飛びついた。

高木はそれをしつかりと受け止めると、エリシアの赤い髪を慈しむように撫でて「もう大丈夫だ」と呟いた。

「この人が、エリシアの言っていたマサトさんですか？」

アイナリンドが確認するかのように俺を見る。その顔は疑問形だ。そりゃそうだ。エリシアの話では完璧超人として描かれていた高木であるが、見たところヒョロ長い兄ちゃんではない。やせ細っており、およそ剣を振り回すようには見えないし、顔も地味なのだ。髪を上げて眼鏡を外せば、女性がうつとりするような渋い男前にもなるのだが、この状態だと、根暗で神経質な兄ちゃんにしか見えない。

「……よお、高木」

俺はエリシアが落ち着くのを待ってから、高木に声をかけた。

高木はエリシアの頭を最後にもう一度撫でて、視線を俺に向ける。異世界情緒漂う酒場に、二人の日本人高校生が並ぶ姿は、おそらく

かなりシニールなものだろう。

しかし、俺達二人はシニールとは裏腹の、不思議な存在感を持つてして場の注目を集めていた。

「タミフルか。どういう経緯か知らんが、ファーストに来ていたとはな」

高木は再会の喜びでもなく、驚きすらなく俺に言葉を向ける。

そのことに対して、やはり俺も何も思わない。こいつはこういう男なのだ。何事も冷静に受け止めて、迅速に処理してしまう。確かに頭の回転は速い。

まあ、少々友達甲斐のない態度ではあるのだが。

「ファーストってのは、この世界の名前か？」

「ああ。まあ、僕がつけた名前だがな。僕達の世界にはアースと名づけた。わかりやすくいいだろう？」

「いいんじゃないか。俺も出身地を聞かれて困ってたんだ。アースって言えばいいってことだろ？」

「うむ。それじゃ早速だが、この状況を確認しようか。とりあえずは……タミフル。何故君が、この世界に居るのかからだ」

相変わらず冷静だ。

まあ、それだけ頼りになるのも違いなのだが。

一時は高木の登場に静まり返っていた酒場だったが、自警団長の「二人の勇者がデカルト打倒に立ち上がった」という希望的観測を聞いて、元の喧騒を取り戻しつつあった。

大半は俺達の様子を窺いつつ、俺達が弱そうだとか言っているようだが、変に静まり返っているよりはいいだろう。些事を捨て置くのは高木も俺も同じだ。

「ふむ。魔王討伐のために立ち上がった……というか、半ば騙されるように連れて来られたか。タミフルらしい」

「うるせえ。まあ、経緯はわかっただろ」

「うむ。要するにデカルトを倒せば良いということだろう。生憎と、僕の連れはまだ集合してなくてね。まずエリシアから探したものだから、戦力は現状のままだ。まともにやりあうのは得策ではない」
流石は軍師というあだ名を頂戴する男である。要点を拾い上げ、当面の行動指針を容易く見抜いた。

本来はもう少し先まで考えているのだろうが、俺達に説明するために簡単なお話から喋っているのだろう。

「ユウシさん」

アイナリンドがそつと俺の袖を引く。なんだと首をかしげると、アイナリンドは懐疑的な目で高木を見ていた。

「正直、想像していたような人じゃないんですけど……それ以上におかしいですよ。ユウシさんのお友達というのはわかりましたけど、なんでいつの間に協力してくれているんですか。エリシアのためだとしても、二人ですぐに旅に出れば済むことじゃないですか。他にも仲間がいるのなら、そうしたいでしょうし。私達に協力してくれる意味がわかりません」

流石に長年生きてきたエルフさんである。確かに高木は協力する理由を言っていないし、そもそも協力するとも言っていない。

俺からも、協力してくれと頼んだ覚えは無い。アイナリンドが疑問を覚えるのも仕方ないのかもしれない。

「けど、協力してくれる……んー、高木。説明は任せた」

「簡単に言えば、僕とタミフルは利害を超えたところにある関係ということだな。正直なところ、さほど気が合うわけでもないが、長い付き合いだね。妙なところでの再会ということもあり、放っておくのも変な話だ。少なからずエリシアも世話になったようだし、礼という側面もある。他には……そうだな。魔王様とやらを倒せば、タミフルはアースに帰ることができるだろう。こいつの親御さんには、僕もよく面倒を見てもらったものでね。放蕩息子を連れて帰るのも近所づきあいの勤めというものさ」

近所づきあいの勤めは兎角、まあ、そういうところだ。

なんせ生まれた日が同じで、空気のように自然な存在だったわけ
で、お互いを助けるのは当然というよりも、やはり自然なことなの
だ。アイナリンドにわかるように説明するのは不可能だろうから、
高木はある程度の一般論で脚色したのだろう。

「……でも、命の危険もあるんですよ？」

「そんな危険を承知で、まるで生贄のようにタミフルを召喚したの
は何処のエルフだったかな。僕としては、友人を危険に巻き込んだ
そのエルフさんとやらに説教してやりたい気分だ」

なおも食い下がるアイナリンドに、高木は不意打ち気味に抜き身
のような鋭い皮肉を返した。こいつの特技は不思議なほどに良く回
る舌先三寸なのである。

アイナリンドはハツとして俺を見ると、唇を噛んで俯いてしまっ
た。元々、俺を召喚したことに罪悪感を覚えていたのだ。それを突
かれてはたまらないだろう。もっとも、高木にしては随分と優しい
言葉なのだが。

「高木、俺は気にしていないからいいんだよ」

「そんなことはお前の顔を見ればわかる。だからちよつとした皮肉
にしたんだ」

高木は飄々と答えると、一度仕切りなおすかのように大きく息を
吸い、ぐるりと周囲を見渡した。

大方、使える人間の把握というところだろう。しかし、流石に労
働者の集う酒場で都合よく戦士なんかが見つかるとは思えない。た
だでさえ近辺で腕に覚えのある連中は討伐隊に参加しており、現状
満足に動けるのは俺達だけのようなものなのだ。

「ふむ……タミフル。君は腰に差した剣を使えるか？」

高木がふと俺の腰を見て尋ねてくる。自慢じゃないが、コカルト
討伐でもゴゴルス討伐でも、斬りつけるというより振り回している
だけに近かった。扱えているとは思えない。

「さっぱりだな」

「ふむ。ならばその剣は、その少年に渡してやるといい」

高木はヒューの肩をぽんと叩く。高木の眼力はヒューの実力を高く買ったのだろう。確かにヒューの手のひらは美少年に似つかわな
い、ごつごつとした豆だらけである。いつか剣を手に入れた日のた
めに修練を欠かしていなかったのだろう。

いきなり御指名が飛んできたヒューは目を白黒させていたが、俺
がひょいと剣を渡してやると、目を大きく見開いて、まじまじと剣
を見詰めた。

「僕が……これを使って良いんですか？」

「ああ。俺が下手に使うよりよほどいい。デカルトと向き合う役、
できるか？」

「やります！」

ヒューは力強く答えて、俺と高木にきらきらとした笑みを向ける。
確かにヒューは今日が初陣とは思えない活躍をしてくれたし、きつ
と戦力になってくれる。

「さて。後は……ふむ、そのヒゲをはやしたお兄さん。どうだ、
手伝わないか？」

高木がぐるりと酒場を見渡して、一人の若者に声をかける。無精
ひげと垂れ目が特徴的な若者——誰かと思えば、一緒にゴゴルスを
討伐して、この街まで案内してくれたドレイク君だった。

食事に来ていたのだろう。喧騒の中で一人だけ落ち着いて飯を食
っている男が居ると思っていたが、なるほど、彼の胆力によく知っ
ている。

「や、タミフルさん。早い再会だったな」

ドレイク君はにかつと男臭い笑みを浮かべて俺を見る。高木は「
ほう」と呟いて俺を見た。

「相変わらず、良い人材を集めるのが得意だな」

「……らしいな」

俺自身、よくわかっていないのだが、何故か俺の周りにはデキる
やつが多い。

別に何かをしているわけではないのだが、気がつくとな変人ながら

も一目置かれているようなヤツと知り合いになったり、友達になっ
ていたりするのだ。生まれたときから高木というとびきりの変人を
横にしていたのだから、これはもう才能や技能ではなく、持って生
まれたものなのだろう。

「ドレイク、手伝ってくれるか？」

俺が声をかけると、ドレイク君は苦笑して首を横に振った。

「いや、悪いけど俺も用事があるんだよ。村の代表で来てるから、
買出しもしないといけないし、期限も決まってる。それに死ぬのも
不味い」

ドレイク君はさらさらと実に真つ当な理屈を述べて、食事を続け
ようとした。

だが、生憎と論戦に滅法強い男がニヤリと口元をゆがめてしまっ
てなまじ頭がいいと、高木は格好の標的と見定めて論破したくなっ
てしまふのだ。

「ふむ……見たところ、中々頭が良さそうだが、ならばこそ期限を
ギリギリに設定はしていないと見たが。僕ならば、不測の事態と余
暇のために、そうだな。一日から二日ほどの余裕を持つ。その時間
を僕達に貸してくれないか？」

高木の言葉に、ドレイク君は流石に驚いたのだろう。確かにステ
ピナ村を出発する際に、ドレイク君は往復に必要な時間と、買出し
のための一日のほかに、余裕を二日ほど見て予定を立てていた。知
ってる俺がそこを突くのなら兎角、初対面の人間が言い当てたの
だからたまらない。

「タミフルさん、なんなんだコイツは」

「……あんまり相手にしないほうが良いぞ。喋れば喋るだけ術中に
はまる。無視してしまうか、素直に従うほうが幾分利口だ」

俺の助言にドレイク君は神妙な顔をした。ゴゴルス討伐の際に、
それこそ大魔法のような粉塵爆発を利用した俺を、ドレイク君はけ
っこう慕ってくれているのだ。その俺の薦めとあれば考えるに値す
る言葉であろう。しかし、理屈で勝負しておきながら、反論を無視

してしまうのも道理が通らない。

道理と現実的な問題の狭間に、ドレイク君は思わず神妙な顔をしてみせたのだ。

だが残念なことに、俺としてもドレイク君の機転と思い切りの良さは欲しい状況である。高木を支持するのも癪ではあるが、既に一計を案じている。

言葉というのは、基本的にどんな状況でも聞く耳さえ持たなければ意味をなさない。逆を言えば、聞く耳を持たせてしまえば相手が誰であろうと、何らかの効果を得るのだ。

ドレイク君が自力で無視するという答えに行き着いたなら厄介だが、あらかじめ俺が無視を薦めたことにより、無視するという覚悟は弱まっている。他人に言われてすること、自発的にすることでは意志力に天と地の差があるのだ。

さらに、高木が非常に巧舌な男だという認識を与えておいたので、必要以上に高木の言葉を意識してしまっているだろう。ここまで舞台が揃えば、高木は口先三寸で世界を獲る男である。

「手伝ってくれると、三つの利点がある。まず、報酬の分配による金銭的な利益。次に、街の救世主として名を広め、交易も容易に進むことだろう。最後に、デカルトという魔物を簡単に仕留める手段を知ることになる。君が居ればデカルトなんぞ単なる木偶と化すわけだ。気味自体の存在価値がうなぎ登りになる」

まずは高木、単純な損得論で攻めるようである。しかし、この損得論には大きな穴がある。ドレイク君ならば、そこを見逃すほど愚かなまねはしないだろう。なんせ、自分の口で言っている。

もっとも、それも布石であるが。

「確かに利点は多いだろうし、一日二日で済むように仕組むんだろう。だけど、問題は安全性だ。さっきも言ったとおり、死ぬのは勘弁してほしいんだよ」

そこだ。ドレイク君の理屈は非常に安定志向で、思い切りのよさが単純明快な「危険や死を避ける」という部分に帰着している。こ

の単純な理屈は、単純ゆえに突き崩すのが難しいところである。

だが、それでも高木はにやりと笑ってみせる。

随分と余裕がある。わけではない。この笑みは、高木が必死で頭を働かせているときの仕草だ。ふてぶてしく微笑み、相手に「何かある」と思わせているうちに次の手を考える。元々頭の回転は速いので、大概がこの間に状況を覆す言葉を思いついてしまうのだが、流石にドレイク君と初対面では案も少ないだろう。

ここは、俺が口出ししておく場面だ。ドレイク君は決して臆病ではない。ステビナ村でゴゴルスと戦ったときも、勇ましく大型の魔物に立ち向かっていったではないか。

彼は自分の命の危機を避けるならば、ゴゴルス討伐に名乗りを上げる真似なんてしていない。あの時は、村の全員が危機に晒され、恩義のある二人が重傷を負ったことで、我が身の危険などお構いなしに立ち上がったのだ。ならば、そこを突くような言葉の一つで、高木は逆転できる。

「放っておくと、ステビナ村もやばいけどな」

俺の放った一言に、ドレイク君と高木が反応した。

前者はドキリと。後者はニヤリと。

「ああ、タミフルの言うとおり……参加することで利点があるのと言ったが、それ以上に不参加のリスクが高い」

高木の言葉は、決して狙い済ましたものではない。俺の言葉に、ドレイク君の性質を見抜いて即座に思いついたものだ。

いつの間にか、アイナリンドもエリシアも、周囲の観衆も二人のやり取りを見守っている。誘いを断れば終いのドレイク君のほうが圧倒的な有利には違いないのに、このタイミングで立場が逆転したからだ。

人を動かすのに、利益だけを与えてはいけない。危機感こそが、人を最も突き動かす。これも高木の言葉だ。

「デカルトの存在は脅威だ。力もあるが、知恵もある。いわば知勇兼備であり、そうなれば当然ながら素早いコカルトを上手く指揮し

て、平穩に暮らしていた人々を脅かし始める。この一帯をデカルトが支配してみる。魔王と戦っている前線に兵力が集中している現在、こちらに駆けつけるのは傭兵が関の山。傭兵達が敵わないのは、現在で証明された」

高木の言葉に、ドレイク君が聞き入っている。止めを刺すのならば今だろう。

「ここからデカルトが台頭すれば、一大勢力にもなりかねん。そうなれば、前線は挟み撃ちに陥る可能性もある。いわば、この一戦が世界の命運を握っているということだ。そして、その一戦のためには、ドレイク……君の力が必要だ」

話は大きくするだけ現実味が無くなる。ただし、嘘だけは大きくするほど真実味が伴う。

デカルトという魔物がいかほどのものか、おそらく正しく理解している人間は少ないだろう。話を聞く限り、数が少ないからだ。つまり、情報が定かではなく、知ったかぶりをしているも、高木の口調と存在感で真実味を帯びる。ましてやドレイク君はステビナ村という平和な地で生活してきた人間だ。異国風の高木の言葉は、実に博識な人間の発言だと捉えてしまう。

だが、それでもドレイク君はひるまなかった。高木の言葉の穴を探し当てたらしい。

「ちゃんとした戦士じゃないと倒せないんだろう。傭兵でも無理なら、単なる村人の俺じゃもつと無理だ」

一見すると謙遜にも聞こえるが、理屈は通っている。アイナリンドは駄目だったかと目を伏せ、ヒューや隊長も勝負がついたと溜息を吐く。

高木が逆転した瞬間の、さらなる逆転だ。スポーツで言う勝負を決める一発というヤツだろう。特に好プレーの後なだけに、ドレイク君の言葉は大きくのしかかった。

だが、エリシアと俺だけは俯かなかった。なぜならば、高木の言葉の穴は、ヤツ自身がせつせと掘っていた落とし穴だったからだ。

「魔物退治は騎士や兵士の仕事じゃない。勇者の仕事だ」

待ち構えていたかのような、鋭く透き通った一言だった。勇者という肩書きをもつ存在——つまりは俺のほうへ、全員の視線が一瞬にして注がれる。

高木の意図が理解できなければ、俺はここで呆然としていただろう。だがしかし、俺は平々凡々な男ながらも、この珍妙な幼馴染と十七年間を過ごしてきた。

高木の考えていることなど、全てお見通しだ。

「ドレイク。君の力が必要だ」

俺が力強く放ったその言葉が、この場のやり取りの全てを決めた。

第十六話：黒衣の（前書き）

どうしてこうなった

第十六話：黒衣の

ドレイク君が言葉を失い、理知的な瞳で虚空を眺めた後に、静かに頷いたのを皮切りに全てが動き始めた。

「素人にばかり仕事をさせちゃいられねえな」

今回の作戦に参加していなかった傭兵たちが、参加を申し出てくれたのだ。

それだけではない。高木の言葉に危機感を覚えたのはドレイク君だけじゃなかったらしく、街の人間からも数名、名乗りを上げてくれた。

「手伝えることがあるなら、協力させてもらうよ。この街を守るためだ」

全てが、良い方向に向かっていった。

久々の再会に、本来は積もる話もあったのだが高木も俺も、とりあえず眠ることを選んだ。

「エリシアに会うために、必死でこの町に来たからな。正直、眠くて敵わん」

「俺もコカルト相手に大立ち回りした後だしな……おやすみ」

お互い、地味に疲れていたのだ。作戦会議も何もあったものではなく、俺たちは宿舎に帰って、俺はアイナリンドの胸に顔をうずめて。高木はエリシアを胸に抱いて熟睡した。

否、少々語弊がある。アイナリンドと添い寝したのは確かだが、俺の顔とアイナリンドの胸の合間には、アイナリンドの手によって枕が挟まっていた。

「ユウシさんの顔が、そんなに近くにあると……ドキドキして眠れませんから」

いやはや、なかなか上手いことを言うものだ。思わず頷いてし

まい、谷間へのダイブを逃してしまったのである。

隣のベッドではエリシアが高木の胸板に頬擦りをしているというのに、この違いはなんだろうか。

「フィアやレイラが居ない今しか、マサトを独り占めできないから」
恥ずかしそうに言うエリシアだが、恥じるぐらいならば他所の宿でゆつくりちとイチヤついてほしかった。清純そうだったエリシアが、高木にべったりと甘えている様子を見ると、俺が女の子を信用できなくなってしまう。

まあ、本来ならばもっと大事な話をしなければならぬところだが、所詮は疲れ果てた若者達である。精々、考えられるのはこのくらいだったのだ。

で、翌朝になって青ざめるのが俺であり、迂闊にも深夜にエリシアと何処かに消えた高木だった。

朝方には戻ってきて、布団に入り込んでいたようだが、明らかに寝不足で、それでいて妙にすっきりした顔をしている。隣にいるエリシアは頬を染めていたりするのだから、昨晚でナニがあったかは聞くまでも無い。というか、聞きたくない。

「いや、つい懐かしい顔を見ていて、作戦を考えるのを忘れていた」
高木が笑うが、全然笑えない。昨晚、ドレイク君を相手にあれだけ大見得を切っておきながら、何の作戦もありませんでしたとなれば、勇者たる俺の沽券にも関わってしまうではないか。

これから仲間を続々と増やしていかなばならないのだ。高木の色欲で御釈迦になってしまつては目も当てられない。だが。

「……まあ、つまりは作戦は必要ないってことか」

俺がそう言つと、高木は笑みを一瞬消して、やれやれと溜息をついた。

「君はまったく、物語を盛り上げるといふ心配りを知らないな。確かにたかだかデカイだけの魔物相手に、作戦なんぞ練る必要はまったく無い」

高木は飄々とした顔で言い放ち、エリシアの頭を一撫でする。

エリシアがくすぐったそうに目を細めるのを見て、こいつらの関係が兄妹に近いのか、恋人に近いのかよくわからなくなった。昨日は恋人にしかできないことをやっていたはずなのに。

「マサト、頑張ってね」

「ああ。デカルトだかアダルトだか知らんが、僕の蹴りの一発で十分だ」

自信満々に言う高木に、これだけは突っ込んでおきたい。

「アダルトなのは前だ、バカ」

さて、デカルト討伐隊と銘打った面々は、思いのほか人数が多かった。なんと二十名を超えていたのである。

俺と高木のアース出身の二人。それにアイナリンドとドレイク君というステビナの森、村からの参加者。高木の恋人なのか妹なのかよくわからないエリシア。このサカエの街からは引き続きヒュー。それに加えてコカルトの討伐で一緒になったジヴァ。さらには討伐隊長という面々。さらに、コカルト討伐隊の中でも無傷だった傭兵が数名と、別件で訪れていた傭兵や、有志の市民など。事実上、この中で武器をとって戦える人間は半分ほどなのだろうが、それでも高木はご満悦のようだった。

「中々、良い人材が多いな。ドレイクに、あのヒューという少年。少々扱いにくいがジヴァも良い。この中で、魔王討伐に名乗りを上げてくれる人間がいればいいのだが」

「相変わらず、先を見据えてるな。デカルトはいいのか？」

「ただデカいだけなら脅威だが、デカい上に知能が高くなると、途端に弱くなる。馬鹿が知識を付けると、どうしようもない馬鹿になるというところか」

高木は考えがあるらしく、飄々とした様子で集まった面々に声をかけていく。

「やあ、みんなの協力があれば、デカルトなんて多寡が知れている。危険な目にも遭わせないので、安心してくれ」

朗らかな表情を人前で見せる高木は、よほど嬉しいときか、或いはそれが策略の一手であるときぐらいのものである。長年の付き合いで後者であることは一目瞭然なのだが、初対面に近いファーストの面々には心強く思えたのかもしれない。

機は熟している。高木がそう言いたげに視線を送ってくると、俺はひとつ頷いてコホンと咳払いをした。

「よし、じゃあ作戦を説明する……高木」

あくまでも、この討伐隊のリーダーは俺であるべきだという高木の意見に従い、指揮は俺がとることになっている。だが、実際に作戦を練ったのは高木であるので、指示するように見せかけて、基本的に丸投げである。

高木は策など必要ないと言っていたが、つまりそれはこの状況に最も適した策を練る必要が無いというだけで、ごくごく一般的な策は使うということだ。つまり、夜襲やら伏兵程度のものだ。

「うむ。まず、この作戦なのだが、キモは如何にして敵をおびき出すかにある」

高木は俺の指示に従うように説明しながら、各々の顔を見る。ヒューや討伐隊長などは使命感で満ちた顔をしているが、傭兵は豪気な笑顔。ジヴァにいたってはあくびをしていた。まあ、それはそれで頼りになるので何も言わない。

「そこで、みんなには陽動役を頼みたい。デカルトは賢い魔物だが、妙な知恵を持ってしまったが故に、幾つもの欠点を持っている……人間にも言えることだけだね」

高木が皮肉っぽく笑い、ドレイク君を見る。ドレイク君は無言で高木の言葉を待っているようだった。

「皆に立てこもっているうちは、コカルトの援護や待ち伏せでこちらの被害が非常に多い。つまり、おびき寄せて、こちらの陣地で戦うのが得策だ」

やはり作戦は至ってシンプルだ。これは高木の策のおおよそ全てにいえることなのだが、骨子がとても単純なのである。

複雑怪奇な、実に多くの複線を張り巡らせた策を高木は好まない。なぜならば、そのような策はたった一つの誤算で全てが破綻してしまう恐れがあるからだ。浪漫を追求するところもある男だが、根っここのところではひどく現実主義で、酔狂や戯曲的な作法を好む割には、その下地は常に安定させる。

言うなれば、特撮やアクション映画と同じだ。大爆発を起こすならば、あらかじめその爆破地点と爆破規模を定めておき、ド派手な演出とは裏腹に安全性もしっかりと確保している。高木の活躍は、おそらく多くの人間が気付かないようなものばかりなのだろう。元々、ドラマや映画の主役に向くような男じゃない。精々、脇役として影で動いたり、主人公へのアドバイスという形で地味な活躍をする。

「知能が高ければ、当然ながらプライドを持ち、人間を軽んじているだろう。なるべく小馬鹿にするような挑発が好ましい。後は、タミフルと僕で片付ける」

高木はポンと俺の肩を叩いて、力強く笑った。その笑顔は決して作ったものではないだろう。自信のあらわれともいえる表情が、この討伐に参加する面々を後押しする。

「さあ、それじゃあ準備に取り掛かるう。勇者の活躍を是非、その眼に留めていただきたい」

高木の言葉に、一斉にときの声が上がった。

草原にたたずむ砦は石造りであり、本来は街の防衛にも使われる代物だ。

だが、魔物が棲みつく途端に脅威となる。このあたりは国獲りと同じだろう。せつせと作った城が立派であればあるほど、奪われたときに厄介な思いをする。

俺たちは砦から五十メートルほど離れた草原に立ち、砦を眺めている。傭兵たちは手にそれぞれの武器を持ち、町の人間は棍棒や、中には鍋を持っている者もいる。これは俺の提案でもあるのだが。「それじゃあ、早速はじめようか」

高木の合図で、鍋を持ってきた中年の男が頷くと、もう片手に持っていた木の棒で、激しく鍋を叩き出した。

ガンガンと打ち鳴らされる金属音に続いて、一斉に俺たちは腹の底から声を張り上げて罵詈雑言をまくしたてる。

「出て来いやウスノロのアホタレ！」

「さては砦の入り口につつかえて出てこれねえんだろう。マヌケめ！」

「おまえのかーちゃんべそー！」

高木の発案ではあるが、これは酷い。大の大人が二十数人で一斉に低レベルな悪口をまくし立てるのである。しかも草原の中で。

端から見ればシュールだろう。そもそも、魔物が人語を理解するとも思えず、果たして効果があるのかさえも疑問だ。それでも高木は自信満々に自らも声を張り上げて、おそろしく幼稚な悪口を言い放った。

「図体ばかりでかくても、肝もアレもさぞ小さいのだろうな」

まさか、デカルトも人間にアレの大小を論じられるとは思ってもしなかっただろう。流石にこれには参加しづらかったアイナリンドとエリシアが思わず下を向いて、高木のセクハラに顔を赤くしている。

「俺のほうでデケエぞー」

調子に乗った傭兵がおもむろにズボンをズリ下げたところで、俺と高木は速やかにアイナリンドとエリシアの眼を手で覆う。なるほど、堂々と白昼堂々とご開帳するだけあって中々のシロモノである。存在がイロモノになってしまっているが、この際なので眼を瞑つてやろう。

「まあ、あれなら僕のほうが一回りほど」

高木の感想は聞かなかったことにしておく。エリシアが頬をなお染めたことも見なかったことにしておく。

少々お下劣な展開と相成ったわけだが、そもそも罵詈雑言自体が下品なもので、ある意味では順調である。高木の言葉もあながち調子に乗ったわけではなく、男のプライドとして都合の良いアレを引き合いに出して、より効果的な悪口に発展させたのかもしれない。

さて、その効果であるが、怒ったのか、単に五月蠅かったのかはわからないが、皆に変化が見え始めた。コカルトが二十体ほどワラワラと出てきたのである。小柄ながら、それぞれが石や鉄のナイフを身に付けており、臨戦態勢である。

「ようし、出てきたぞ。ひきつけてから戦え！」

俺の合図で、それまでアレを丸出しにしていた男がいそいそとズボンを履いて、他の者も武器を手取る。個人的には丸出しで戦って欲しかったが、流石に小柄なコカルトの目の前に曝け出すほど、そこは丈夫に出来てはいない。

高木も腰に差した日本刀を引き抜き、エリシアは木の棒を。ヒュ―は俺の渡した剣を。ジヴァは手斧……各自、臨戦態勢が整っている。

「かれ！」

コカルトが十メートル手前に差し掛かったところで、俺は指示を下す。流石にコカルト相手にひるむような俺たちではない。傭兵が真っ先に飛び掛り、次いでジヴァやヒュ―がコカルトに斬りかかる。一度は戦った相手であるし、ヒュ―は木剣で稽古をしていたのだから。ナイフよりも身のこなしがしっかりとっており、コカルトを一刀両断して、さらに他のコカルトに斬りかかっている。

「それ」

高木も傭兵達をすり抜けて近づいてきたコカルトに日本刀で斬りつけていた。誰かに手ほどきでも受けていたのか、或いはこの世界で魔物を斬ることに慣れたのか、躊躇いの無い太刀筋であり、ポー

ンとコカルトの首がすっ飛んだ。日本刀の切れ味、恐るべし。

俺も負けてはいない。ヒューのナイフを借りていたので、手近に迫っていたコカルトを思い切り蹴り飛ばし、ぼとりと地面に転がったところをナイフで突き殺す。血が噴出して顔を濡らす、もうそうしないと生き残れないからして、細かいことは気にしていられない。

「良い判断だ。生き残る覚悟ができている」

「当たり前だ。RPGで何百の魔物を倒したと思ってるんだよ」

「ゲーム感覚、ではないな。ゲームで得た経験で、何とか気持ちを繋ぎとめている。やはり、ゲームが凶悪犯罪に繋がるというのは嘘っぱちだ。全否定する評論家に、僕たちの姿を見せてやりたいものだ」

高木の持論はどうでもいいが、確かに何かを理由に気持ちを繋ぎとめているのだろう。

なるべく見ないように。考えないようにしているが、冷静になつてしまえば周囲は惨状だ。コカルトという人型の魔物が喉笛を掻き切られて死んでいた、中には内臓がぶちまけられているグロいやつまでいる。もしも、これを初日に見せられていたならば俺は何が何でも旅など出なかっただろう。

アイナリンドと仲良くなり、高木やエリシアという仲間が増え。街を守り、世界を救うという意識が無ければ到底耐えられるものではない。

「さて、敵の斥候は片付けたようだ。これでデカルトは自ら出なければ活路が見えないことをはっきりと認識したはずだ」

高木の言葉に、俺は思考を遮って頷いた。

俺たちはデカルト相手にはきつと歯が立たないが、コカルトならば余裕で倒せる。それがお互いの共通認識になっている。ならばこそ、高木の悪知恵でデカルトを倒してもらわねばならないのだが。

「ところでタミフル。君の魔法はペットボトルに水を貯めるというものだったな」

「ああ。飲むか？」

「後程な。しかし、不思議なものだ。魔法というのはランダムなのだろう。よくもまあ、ペットボトルというこの世界には存在しないものから水を出す魔法が存在するものだ」

高木はコカルトを倒して隊列を組みなおす面々を見ながら、不思議なことを口にした。

俺の魔法は、そんなにおかしいだろうか。ペットボトルは確かに俺が持ち込んだものだが、元々、水を入れるような容器なのだ。そこに水が入って何の不都合があるのだろうか。

「僕はひとつの仮説を立ててみた。魔法とは、きっと生まれ持つてランダムに選ばれた能力ではない、とな。そうでなければ、この世界の人間ではないタミフルが魔法を使えることがおかしい。ならば、これは生まれ持つての才能ではない」

高木の言葉に、思わず俺は目を見張っていた。

確かに。俺はこの世界の人間ではない。元の世界ではどれだけ念じて魔法など使うことは出来なかった。魔法があくまでも個人に依る能力だとするならば、俺はこの世界の理から外れる存在であるから、使えるはずが無いのだ。

「つまり、それは……」

「ああ。この世界の魔法は、勿論生まれ持つてのものではない。ただし、望みのままというわけにもいかない……おそらく、何らかの形で覚醒するのだろう」

高木はにやりと俺を見て笑う。他の面々は再び罵倒を開始しており、作戦は順調に進んでいる。

「僕が思うに、魔法は個人の何らかの具現だ。その『何らか』がどのようなものかはわからないが……たとえば、君の魔法はひどく君自身を体現しているとは思わないか？」

「俺の魔法が、俺自身を？」

ペットボトルに水を貯めるといふ、その魔法が俺自身だといふのだろうか。

俺は別に水道局に勤めたいとか、飲料メーカーに勤める親父がいるわけではない。そりゃ確かに水は飲むし、ペットボトルも常用しているが、そんなの誰だってやっていることだろう。ごくごく普通のこと——否。普通という言葉に、引っ掛かりを覚える。

「気付いたようだな。地表の七割は水であり、人体も水が七割を占めている。それだけじゃない。水ほどに人間にとって汎用的な存在は無い。飲用は勿論、炊事や洗濯。冷却としての活用。他にも運搬に川を利用したり、水力発電や蒸気機関。水ほどあらゆる環境に存在して、人に密接に関わっている物質は無い。水ほどに万能の存在は他に無い」

高木の言いたいことが、少しずつわかってきた。

そうだ。水の汎用性など、旅の間にもいやというほど認識していたではないか。否、水だけではない。

「それを言えばペットボトルもそうだな。ポリエチレンはペットボトルだけじゃなくて、確か服の材料だったり、磁気テープなんかに使われてるんだったよな？」

「ああ。さらに元を辿れば石油が原材料だ。これは水ほど汎用性はないが、そこから派生する製品は数え切れない。燃料としても非常に優秀で、原材料にもなる——もっとも、それを言えばどれもこれも原子レベルや電子レベルまで遡っていつてしまうのだがな」

苦笑する高木だが、それはきつと答えがわかっていてはぐらかしているだけだ。

既に、俺も理解した。高木が言うように、俺が何の長所も短所も無い、おそろしく普遍的な存在であるならば。

水という、あまりにも普遍的で汎用的な存在と符合する点が多いということになるんじゃないだろうか。そして、ペットボトルという、その中に水が入っていて当然という環境の中でしか魔法が発動しないのも、いかにも普通の発想だ。

もしかすると、あのときに。俺がこの世界に来てペットボトルを手に取り、水が飲みたいと思った瞬間に。俺の魔法がこの生活密着

型の戦闘にはおよそ不向きなものに決定したというのだろうか。

「あくまでも仮説だがな。それに、ひとつ勘違いしないでおいてほしいのは、決してその人物の体現が魔法ではないということだ。君の場合は、その本質が魔法になったようだが。僕は違う」

高木がニヤリと笑ったときだった。周囲でワツと声上がる。見ると、皆からのっそりと、巨大な人影が現れて、怒りとも昂揚とも取れない不気味な咆哮をあげていた。

単純にコカルトを巨大化させたような魔物。手には巨大な棍棒を持ち、のしのしとこちらに向かってくる。

「高木、話は後だ。まずはあいつを倒すほうが先だしな。それで、いい加減に作戦をしっかりと教えてくれよ。みんなビビってるぞ」

「ふむ。しばらく会わないうちに随分と僕を忘れたらしい。タミフル……僕が無駄話をしていても思っているのか？」

「うるせえ。てめえの存在自体が半分無駄だろうが」

「うむ。だからこそ、僕は僕自身の体現などを魔法にしなかったよ。うだ。楽しければそれで良しという僕の人生は、魔法にするとおそらく相当悲しい現象しか引き起こさない」

まだ喋るのか、この男は。

生まれたその日から喋り出したのかと思うほど口が達者で、きつと死ぬまで喋り続けるのだろうと確信するほどに舌が回る。

こいつのことだ。素直な魔法じゃないんだろう。高木の大好きな嘘や理屈を魔法にするんじゃない。むしろ、逆だ。

「なるほどな。ようやくわかったみたいだ。高木、行ってこい」

幼馴染だから、すぐに理解できてしまったのだろう。高木は口が達者で、その弁舌を思う様に振るうが、決してそればかりを望んで生きてきたわけではない。体力や腕力に恵まれず、頭の回転ばかりが速かったせいで、そのような形でしか己を表現できなかったからだ。

そんな高木が、昔から好きなものがあつた。決して届くことの無い理想を具現化したような存在が、高木の小さな頃からの憧れだつ

ただ。

ならば、恐れることは無い。もしも本当に高木の理想が魔法になったのならば、ただデカいだけの魔物に勝ち目など何一つないのだから。

「では、いこうか」

高木は刀を鞘に納め、両手を天高く突き上げた。

そのまま両腕を胸の前まで降ろし、交差させる。じわりと高木の額に汗が浮かび、だが、それでも高木はニヤリと笑っていた。

「変……身ッ!!」

低く、よく通る声だった。掛け声と共に両腕を腰まで下げた途端、高木の身体が光を帯びて、次の瞬間に照明弾が弾けたのかと思うような閃光が奔った。

「な、なんだあッ!？」

近くにいたジヴアが驚きの声をあげる。シュウシュウと煙が高木の身体から立ち上り――否、高木の身体ではない。

白いスーツに、黒いアーマー。ブーツと手袋、それにスカーフも黒一色。白い仮面に、昆虫のような大きな複眼が黒々と光っていた。この、白と黒のツートンカラーの姿。そして、先ほどの掛け声にポーピング。間違いない。

高木が幼少から懂れて止まなかった正義の味方。地球の危機を幾度と無く救った男。

「仮面ライダー……」

それが、高木の魔法だった。

第十六話：黒衣の（後書き）

どうしてこうなった

第十七話：仮面ライダー

そう、それはまさしく仮面ライダーだった。

顔を覆う仮面。ライダースーツにブーツと手袋とスカーフ。そして胸と腹部を覆うアーマー。そして何よりも重要な腰のベルト。

高木が仮面ライダーに憧れていたのは知っている。特撮好きで、しかも昭和ライダーが大好きで仕方が無いのだ。小さい頃は高木の家で一緒にライダーを観たものだ。

見た目はライダーの基本。すなわち一号を基調としているのだが、最近リメイクされた映画版に多大な影響を受けているのか、現代風にリファインされており、配色もこだわっている。

「……いいなあ」

思わず口に出た言葉は、おそらく多くの男の子には理解してもらえないだろう。元の世界限定だろうけど。

「わあ。マサトがすごいことになっちゃってる!？」

エリシアは目をまん丸にして驚いている。アイナリンドは呆然とヒューは驚きつつも、どこか眼を輝かせていた。異世界であっても、やはり男の子には魅力的に映るのだろう。

「マサトじゃない……仮面ライダーさ」

高木。もとい、仮面ライダーはぼそりと呟き、一歩前に出た。

デカルトの登場に息を吞んでいた討伐メンバーが、突然の閃光と謎の仮面男に目を白黒とさせている。

「心配ない。ヤツは味方だ」

俺の言葉に、仮面ライダーはこくりと頷いた。高木のヤツ、内心ではおそろしく喜んでるに違いない。

渋く決めてはいるが、特撮好きとしての血が騒ぐのだろう。悠然と前に進みながらも、スーツや仮面を通り越してワクワクしているのが俺には見て取れる。

「マサト、楽しそうだね」

「ああ。あんなに楽しそうな高木も珍しい」

エリシアにもわかるようだ。ただ、アイナリンドは首を傾げている。ヤツとの付き合いの長い人間でなければわからないだろう。高木は気持ちが昂ぶっているときは、歩幅がいつもより大きくなる癖があるのだ。

高木は真つ直ぐとデカルトに向かって進み、デカルトもまた高木を敵と認識したようだった。見慣れない格好だとも思っているのだろうか。しかし、なまじ知恵をつけるとロクなことがない。

もしも知恵よりも本能を信じているならば、今の高木——仮面ライダーの強さを瞬時に判別していたはずなのだから。

仮面ライダーはデカルトの前に立つと、ゆつくりとデカルトを指差した。あの無駄なポーリングは間違いなく高木が己に酔いしれている証拠だろう。

「お前の罪を数えろ」

決め台詞もばっちり。ヒューやエリシアが固唾を呑み、デカルトは流石に言葉が理解できないのだろうか、雰囲気を感じたらしく咆哮をあげる。

だが、相手が悪い。仮面ライダーはトン、と地面を蹴ったかと思つた瞬間にデカルトの懐近くにまで潜り込んでいた。

「！！？」

「せあッ！！」

裂帛の気合と共に、ライダーの拳がデカルトの大きな腹に叩き込まれる。まるでスポンジに腕を突っ込んだのかと思うほどに拳がめり込む。思わずデカルトが後ずさったら、次の瞬間には背後に回りこんでいたライダーがデカルトを蹴り飛ばしていた。

「すげえ！」

これには思わずジヴァも叫んでいた。まさかデカルトを倒す方法が肉弾戦だとは思っていなかったのだろう。軽く吹っ飛んだデカルトに、周囲から歓声上がる。だが、仮面ライダーの力はこんなものじゃない。

高木ならば。否、高木に限らず、多くの仮面ライダーファンならば、必殺技が何であるかよくわかってるだろう。

ライダーに蹴り飛ばされたデカルトは、おそらく己の常識を覆されたような気分を味わっているのだろう。ダメージはさほどではないように思うが、それでも先ほどに比べて余裕の色が消えている。

それでもライダーは手を緩めようとはしない。既にデカルトはコカルトに町の住民を襲わせてしまっているのだ。人間に敵対する魔物を倒すのが勇者であり、高木もまた勇者一行である。ある意味では無慈悲なのかもしれないが、仮にここで殺さずにおけば、新たな犠牲者がこちら側に生まれるのかもしれない。

ライダーはベルトの核である風車に力を込める。すると、周囲に急に風が発生して、ライダーベルトに吸い込まれていった。

風力はライダーの力の源である。つまり、これは必殺技の前段階に他ならない。

「ライダー……キック！」

お約束に従い、ライダーは必殺技の名前を堂々と叫びながら、高らかに跳躍した。ポーンと軽く飛んでいるように見えるが、実際には相当の力を使っているのだろう。ライダーが蹴った地面がボコンと凹み、その勢いを物語っている。

ライダーはそのまま空中で一回転を決め、背中を風に押されたかのような、本来ならば力学的にありえない速度でデカルト目掛けて飛び蹴りを放った。

物事を擬音で表現するのは道義に悖るが、敢えて使うのであれば、ドゴオオオン、というド派手な衝撃音と共にライダーとデカルトの影が重なり、そのままライダーがデカルトを貫いて地面に降り立つ。デカルトは大きな腹を貫かれており、ごぼりと口から血を噴いて地面に倒れ伏せる。あまりにも圧倒的な力の差に、討伐隊はしばし言を忘れていたが、やがて倒すべき敵が既に事切れていることに気付いた者たちから歓声が上がった。

「……ふう」

ライダー……否、既に変身を解いて元の姿に戻っていた高木は、やれやれと眼鏡を整えてデカルトを見下ろしていた。

「マサト、すごいよ！」

エリシアがわつと声をあげて高木に駆け寄る。俺はアイナリンドと顔を見合わせ、苦笑いを浮かべた。

「これが、高木さんの魔法なんですか……？」

「ああ、そうらしいな。それにしても羨ましい。仮面ライダーだぜ、仮面ライダー」

「カメンライダー？ よくわからないですけど、この力があれば魔王だつてきつと倒せますよねっ！」

「……そうかもな」

思わぬところに強力な味方がいたものと、アイナリンドはこれまで高木に対して抱いてきた敵愾心のようなものを消したようである。半ば無条件に力を貸してくれる高木のことをあまり信用していなかった節があつたのだが、とりあえず戦力としては申し分ないという判断をしたのだろう。

元々、高木の口先三寸と回転の速い頭、それに判断力は認めていた俺も、まさか肉弾戦でこんな活躍が出来るというのも嬉しい誤算だ。

「けどよ、これじゃ俺の村にゴゴルスが来ても、タミフルさん達がいなかったらどうすることもできねえよな」

ドレイク君は散々、デカルトの悪口を言つて、近づいてきたコカルトを一体、蹴り飛ばして終いだつたようだ。確かに高木はデカルトを狩る方法を伝授するとドレイク君に言っていたが、生憎とこんな荒業は他の人間にはできないだろう。だが高木は軽く口角を上げて、実に楽しそうに呟いた。

「安心するといい。基本的に魔物といつても生物だ。なまじ身体がデカイから動きも鈍く、弓でいくらでも狙うことが出来るだろう。アイナリンドは薬草の類にも詳しいと聞く。極力即効性の高い毒の調合を教えてもらえば、後は先ほどと同様に陽動して誘い出せば片

がつく」

高木はいとも簡単なように言うが、ドレイク君は狐につままれたような顔をしている。流石にそれだけでは納得できないということだろう。

「……ふむ。まあ、後はそうだな。強い酒を用意しておくといい。酒の味を覚えると野生動物ですら酔いを楽しむ。大量の酒を並べておけば酔いつぶれて眠るだろう。それでなくとも千鳥足だ。脳天に一発、ガツンと剣を突き立てれば話は終わる」

なるほど、確かにアースでも実験で野生動物に酒を飲ませたというものがあつたはずだ。確かオランウータンだっただろうか。ものの見事に酔っ払ったらしく、捕獲も容易だったとか。

ドレイク君はやはり納得がいかない顔をしていたが、そもそも高木を相手にこれ以上の問答は不利だと感じたのか、苦笑いを浮かべた。

「食えない人だな。勇者様も人が悪いぜ」

「そう言うな。それでも、相当の代価は支払っている」

高木も苦笑交じりに返すと、そのまま軽くフラついて、ばたりと倒れた。

「つと、高木!？」

「し、心配ない……僕の体力では、ライダーに耐えられないだけだ。三日ほど眠るから、後はよろしく」

まるで、眠くて仕方が無いという様子で高木はそれだけ呟くと、そのまますうつと眼を閉じて、途端に寝息を立て始めた。

なるほど、これが変身の代価か。理不尽とも思える強さだが、一旦変身すると、たかだか一分ほどの行動に対して三日も眠らなければならぬ。道理で既に魔王を倒していないはずである。これでは安全な場所でなければ後が怖くて戦うことも出来ないではないか。

「……さあて、勝利の立役者をベッドまで運ぶとするか。隊長さん、デカルトの方の始末は任せた」

「ええ。本当に感謝しています。間違いなく、貴方達は救世の勇者

です」

貴方達ではなくて、高木だけだろうとは思いますが、その高木を背負って街へと目を向ける。

死傷者は出てしまったが、それでも最低限の被害で抑えられたのではないだろうか。正直なところ、ニユースと同じで誰かが死んだという実感は沸いてこないが、それは討伐隊長やジヴァなんか同じのようだ。魔王が存在して、魔物が徘徊するファールランドは、きっと人の命がアースよりも軽いんだろう。

俺の命のほうが重いと思わない。この世界に来たときから、俺の命もやはり軽くなってしまっている。アイナリンドが俺に魔王を倒せというのも、この世界での命の重さを考えればさもありなん。

「ただ、その軽い命を守るのは、生き甲斐にすらなりそうだな……」
…高木」

俺が呟くと、高木は意識も残っていないだろうに、俺の背中を身を擦じらせて、少しだけ頭を傾けた。頷いているとも思っておこう。

「アイナリンド。みんな、帰ろうか」

今はただ、俺についてきてくれた全員が活着していることに満足できればそれでいいと思うことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1955k/>

勇者喜譚

2010年11月9日01時40分発行